導くもの

アカリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
導くもの

【Ｎコード】
Ｎ９９０６Ｍ

【作者名】
アカリ

【あらすじ】
転生して、第二の人生に。
世界は魔法、精霊、魔物……そんなものであふれていました。
そんな世界で魔導師として活躍する主人公、ティーナのお話。
主人公ははじめから最強です。
まだ魔導師にはなれていません。

＊1　帝都

「いいかいティーナ、私が死んだら、帝都を尋ねるんだよ、この手紙を持って。」

おばあちゃんの言いつけを守って……帝都に着きました。

「……私はいったい何の職に就くことになるのでしょう？」

そのつぶやきは、誰にも拾われませんでしたが。

導くもの（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊1）

えーっと。自己紹介を。

名前はアルベルティーナ・ギラルディーニ、祖母にはティーナと呼ばれていました。

簡単に言っちゃいますと……前世の記憶があります。

ていうか転生？　ってやつでしょうか。

「ニホン」という国で２４年、暮らしていたのですが、ある日交通事故でぽろっと。

……ぽろっと、ておかしいです？　まあ、あっけなくなくなってしまったようです。
「あ、死んだな」と思って次に目を開けたら……私、赤ん坊でしたから。

私、異世界トリップものとか、転生系のもの好きでしたから、納得は早かったと我ながら思うわけです。

それから3年くらいしたら（つまり私は3歳でしたが）、両親は祖母に私を託してどこかへ。
祖母が私に、厳しい……そりゃあもう、２４年生きてきた記憶からか、面倒くさいことが大嫌い、人生適度に適当に、がモットーな私でもまじめに勉強せざるを得ないような……
厳しい、特訓でした……（遠い目）

祖母は、あれですかね？　悪魔ですかね？　鬼、とかの間違えじゃないですかね？
人間、というカテゴリーからははみ出ていません？？
まあそれは重要なことですが（私にとっては、ですが）おいておくとして。

この世界はいわゆる「ファンタジー」の世界ですね。

魔法、精霊、魔物、……悪魔は知らないんですけどいるんではないでしょうか。
どんとこい！　っていう感じです。

祖母は「魔法使い」でして。祖母の血を受け継いだ私も「魔法使い」なわけでした。
その特訓の成果として、火・水・風・土・光・闇、全属性に＋α
して
そこからの派生属性の魔法。
しっかりと使えるようになりました。
そこはやっぱり転生をしてきた人としては、「魔法を使えるようになる」ていうのは
抑えておきたいポイントですよね??

いや、ちょっとかじる程度にやるのかと思ったんですよ。かじる程度に。（ここ重要です。）
……まさか「ろうそくの火をマッチじゃなく魔法でつけたい！」位にしか
思っていなかったのに「炎をはなてば周りは焼け野原！火加減調節までばっちり！！」の
レベルまでやらされるとは思いませんでした。

さて、元の話題に戻るとして。

そんなこんなで3歳から14歳にいたる約10年間、祖母にお世話に（命の危険にさらされつつ）
なってきたわけですが、祖母が病気で亡くなってしまいまして。
祖母いわく「書状によって仕事をもらえる」ということらしいのです。
そこで私は村でのんびり暮らしていてもよかったのですが祖母のめいれ

……いえいえ祖母の言いつけを守って祖母がなくなる前に言っていた手紙をもって
帝都に旅立ったわけです。

祖母は結構な魔法の使い手で、知識も豊富だったらしく村の人に才能のある人には
魔法を教え、時には医者として怪我や病気の治療をしつつ、
帝都から離れた村ですんでいました。

そこから休憩をいれつつ４時間、てところですかね。帝都に着いたわけです。
「結構近いのでは？」と思うかもしれませんが、これでも肉体強化と速度上昇、
空気抵抗の軽減に風の力を借りて、とやってきたわけです。

ここでやっと冒頭からつながるわけです。

「『クルス・ベナーリオ』さん、ですか……。」

手紙を渡す相手の名前、まったく聞き覚えがないですね……。
どこにいらっしゃる人なんでしょう？　……それくらい言っておいてくれれば……
すみませんすみませんおばあさま、だから呪わないでください。

しょうがない。ご飯を食べつつ情報収集、といきますか。

「すみませーん。Aセットでお願いします。」
「まいどっ、とお嬢ちゃん……であってるかい？　なんでそんなフードかぶってるんだい？？」
「あ、気にしないでいただけるとありがたいです。」
……さすがに声で女だってことはばれるか。

今私は白いマント……というか膝丈までの外套についているフードを目元深くまでかぶった状態です。
いや、これで目立つのは十分わかるのですが。
この世界、というか私が見てきた範囲では、私の外見の特徴、黒い髪と天鵞絨（びろうど）色の目、ていう人見たことないんですよねー。

髪の色として多いのは茶色（というより焦茶、ですかね？）、目の色として多いのは葡萄（えびいろ）色だ。

この世界では「目の色」っていうのが魔法の適正に影響するところがあるらしく
（私も祖母に聞いただけであまりわかりませんが）、一般的に「目の色＝魔法の属性」である。

私も天鵞絨色の目から一番得意とするのは風と闇、だ。
……え？　２つあるのはおかしい？　まあ、だけど事実ですから。
葡萄色の目だと火や土が得意そうに私には見えるのだけど……
祖母いわく火が得意な人の目はもっと燃えるように赤く、
土を得意としている人はもっと穏やかな土の色をしているそうだ。

帝都でその実例を見れたらいいと思っているのだけれど。

目の色にでる、とか困っちゃいますよね、地味に生きていきたいのに。
魔法で変えることもできますが、悪いことしたわけでもないのに変える、までしなくても、
と自分では思うので。

そういうわけで何かあったときにその特徴で覚えられるのも困りますし、
顔に何か他人としては覚えやすいな特徴も会ったらいやですから。

「白いマントの変な女」て印象だったらまあいいか。

ということでこの格好で帝都の中を歩いているわけです。

「おまちどーさまでーす。Ａセットです。」
「ありがとうございます。
……すみませんが『クルス・ベナーリオ』という名前に聞き覚えは？」
「あんた、魔術師（マーゴ）かい！　一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラクラス）さんに用かい？」

「はい。どこに行けば会えるかわかりますか？」

おじさんに驚かれる。そっか、あんまり魔法使える人って、いないんですね。

『一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラクラス）』？　魔術師（マーゴ）＝魔法使い、ですよね？

クルスさんは魔法使い……というか魔法使いっていう呼び名じゃないのか。

「そんなお偉いさんは城じゃないかねえ？　一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラクラス）、

となるとやっぱ帝都研究所より城、だろう。」

「そういうものですかね？　城、と言いますと……」

祖母はあまり帝都については話してくれなかったので私には帝国の首都、王様がいる、

位の知識しかない。

『帝都研究所』に『城』ねぇ。

食事をした後、おじさんにお礼を言って『城』に向かう。

『一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）』さんはお偉いさんっと。

おばあちゃんは結構な魔法の使い手だ、て言われてたけど……どこで知り合ったのだろうか？？

頭の中でもやもやと考えつつ、着きました、『城』。

なんと言うか、中世ヨーロッパ??　この中に王様が住んでいるのだろうか?

今回の目的は王様に会うことではないが、（元）ファンタジー大好き人間として、見てみたい気もする。

……さて。正面から行って一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）、『クルス・ベナーリオ』さんに会うまでにどれくらいの時間がかかるのやら。

「すみません、一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）クルス・ベナーリオさんに会いにきました。」

門番さん、通してください。

＊1　帝都（後書き）

気の向くまま、書きたいことを書いていきたいと思います。

いろいろと至らない点があると思いますが、読んでいただけるとうれしいです。

＊2　城

「クルス・ベナーリオ様への面会、か？」

「はい。……通していただけますか？」

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊2）

「すまないが、すぐに通すことはできない。誰かからの紹介による面会か？」

「はい。フレドリカ・ファルコーネの書状によるものです。」

「フレドリカ・ファルコーネ、だな？　確認をとろう。しばらく待っていてくれ。」

２人いた門番さんの一人が城の中に入っていった。

さすがにすぐに「はい、どうぞー。」にはならないか。そしたらいろいろ危険だもんな。

……祖母の名前を出してみたが祖母はクルス・ベナーリオさんと

知り合いなのだろうか？

よし、待っている間に「魔術師（マーゴ）」について聞いておくことにしますか。

門番さんA（城のなかに入っていった人がBです。勝手に決めました。）によりますと、帝国、というかこの世界全体ですかね、では「魔法使い」の国家資格があって、その実力や使える属性によって3段階に分けるそうだ。

偉い順から「一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラクラス）」「二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）」「三級魔術師（テグナキヤ・マーゴ）」。

それに加えて治療に特化した「治癒術師（ヒーラー）」だそうで。

剣を使える、とかまあ魔法に＋αできるような才能がある人は「騎士（ナイト）」になる人が多いそうだ。

騎士団は魔法が使えなくても入れるみたいだが。

騎士団には「白騎士（ホワイト・ナイト）」と「黒騎士（ブラック・ナイト）」の二つの部隊があるそうで、火・風・光のどれか、（またはすべて）を使える人は白騎士（ホワイト・ナイト）に、水・土・闇を使える人は黒騎士（ブラック・ナイト）になるらしい。

ちなみに門番さんAは白い団服を着ていたから白騎士（ホワイト・ナイト）、Bさんは黒騎士（ブラック・ナイト）だそうだ。

そういう風に二つの部隊があると対立する可能性が高いので、したっぱのうちから少しでも
友好関係を、ということで門番は各部隊から一人ずつでペアを組むそうだ。

騎士団について更に詳しい説明を人名を交えてAさんがしてくれていたが、
私が騎士団に入る、ということは（武器は祖母への対抗手段として一通り使えるようにはしたが）
まずないと思うので適当にあいずちをうちつつ城を「視る」。

ここで魔法スキルの発動である。
『魔眼（ディアブロ・アイ）』――　簡単にいうと自分の目に魔力をこめて周りを見、
魔法陣や、どのような魔法が使われているのか、
対人、魔物だとその人の使える属性がわかる目のことだ。

私が得意としているのが闇なこともあり、通常状態でも見えているのだが
詳しく「視る」ためには魔眼（ディアブロ・アイ）をするのが一番いい。

城の防御魔法か……結構きれいな網目だなぁ……光？　かな。
これで防いでいるのは何だろうか？　攻撃魔法？

Aさんに騎士団の説明をうけつつ（流しつつ）、城の防御魔法について考えをめぐらせていると

Bさんが白マントを着た人を連れて帰ってきた。

「確認がとれた。こちらの方についていってくれ。」
「ありがとうございます。」

おばあちゃんはクルス・ベナーリオさんとちゃんと知り合いだったのか……よかった。

Bさんにお礼を言って白マントの人と向き合う。

「行きましょうか。」
「はい。」

城の中でさすがにフードは失礼だろう、と思いフードを外すと3人（白マント＋門番2人）が
少し驚いていた。

「……珍しいですかね？やっぱり。」

この髪と眼。

「……魔術師（マーゴ）だろうとは思っていたが……風か？　それとも闇、か？」

……？　どちらが得意、という意味だろうか？

「どちらとも同じくらいに術は使えますが……」

「！　２属性（ダブル）、か。一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）への面会希望者なだけあるな……。」

Bさんが何か考えだしてしまった。２属性（ダブル）使いも珍しいのか……何人くらいいるのだろう？

まあ、ともかく。

「すみません、クルス・ベナーリオさんへの面会を……」

「、ああ、そうでしたね。」

白マントの人について城の中を歩く。同じような白マントの人がいるなぁ……。

下のほうに入っている線の色が一人ひとり違う。

「視る」とその糸にその人の魔力がこもっているみたいだ。

……見られている気がする。やっぱり珍しいのか。

気にしていてはきりがないので黙って白マントの人についていく。

「ここです。」

ある部屋の前で止まるとドアをあけてくれる。先にどうぞ、ということらしい。紳士だなぁ。
中に入ると黒いマントの人が真ん中で、その両隣に白マントの人が2人つくかたちになった。

「君がフレドリカ・ファルコーネの書状を持ってきた子かい？」
「はい。フレドリカ・ファルコーネの孫、アルベルティーナ・ギラルディーニです。」

そう名乗るとその部屋にいた3人の人に驚かれる。

「そうか、あの、『魔女（ストレーガ）』が……孫がいたのか。私はクルス・ベナーリオ。
一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）だよ。」

黒マントさんがクルスさん、ですね。

ん？　『魔女（ストレーガ）』？　今の流れからすると……確実に……おばあちゃんが？

「……祖母は『魔女（ストレーガ）』と呼ばれる人だったのですか？」
「うむ。あいつの性格からすると、話してなさそうだの。」

うわー……やっぱり人じゃなかったのか。よかったよかった。

話を聞くと、フレドリカ・ファルコーネは一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）であり、一（マー）級魔術師（ゴ・デ・プリメーラ）の中でも

薬の調合や毒物の解毒などに特化していて、冷静沈着、自分の興味の持った分野にしか
動かない、という性格から『魔女(ストレーガ)』と呼ばれていたらしい。

クルス・ベナーリオさんとは３０年間魔術師(マーゴ)として働いていたときの同期だそうだ。

祖母は２０年前、一級魔術師(マーゴ・デ・プリメーラ)をやめてからはまったくどこにいるかわからない存在だったらしい。

……なんだかすごく祖母らしい。けど人だったのか。

ちなみに魔女(ストレーガ)と呼ばれるくらいだから名前も有名じゃないか、と聞いたら
名前を名乗らず、魔女(ストレーガ)、とそのまま名乗ることが多かったらしいので名前は有名じゃないらしい。

そうだよね、名前が有名だったらこの１０年ちょっと、もっと大変でしたよね。

「祖母から、クルスさんに渡すように、ということで……。」

これです。と手紙を差し出す。

「ん？　この手紙か。読むからしばらく待っていてくれ。」

手紙を読んでいる間にクルスさんたちを観察してみる。

クルスさんは５０……６０歳？　くらいだろうか？　祖母と同じで年齢不詳な感じがある。

白髪と銀髪が混じった（まあそんな感じの色の）髪の毛、天色（あまいろ）の目。

一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）でこの目の色ってことは光と、水？　２属性（ダブル）使いだろうか？

それとももっと使えるのか？　治癒術師（ヒーラー）でもあるのかな？

白マントの二人は一般的な焦茶色の髪に案内してくれた人のほうは浅緑色の目、

もう一人は青色の目だ。

風属性に、水属性？？　村では魔法使いは滅多にいなかったので一日でこんなに会えるとうれしい。

一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）についている人、てことかな？　二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオテグナキヤ）か三級魔術師（マーゴ）の可能性が高いだろう。

魔眼（ディアブロ・アイ）を使って何か言われると面倒くさいので普通に観察する。

祖母が一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）さんへのお手紙をわたした、てことは私は魔術師（マーゴ）になるのだろうか？

一級、二級、三級の違いは何で決めているのだろうか？

……時間があればもうちょっとＡさんに聞いていたんだけどな。

……ん？　なんかクルスさん驚いた顔してる？　微妙に青ざめてません？

白マントの2人に何か話すと青色の人は驚いた顔をして部屋を出て行った。

一体おばあちゃんの手紙には何が書いてあったんだ？

「場所を、変更するかの」

「へ？」

場所を変更して、何やるんだ？

頭の上に「？」をたくさん飛ばしているだろう私にクルスさんが言葉を続ける。

「魔導師（マイブル・プルーバ）の試し、か。……これは歴史上、初めてだの。」

魔導師（マイブル・プルーバ）の試し？　何、それ？？

今の流れからすると、……私が何かしないといけないものですか？

……何か、面倒くさいことになってきたなぁ……。

＊2　城（後書き）

はじめのうちは一日2話投稿できたら、と思います。

色についてはまたどこかに出したいな、と思ってます。

＊3　試し（1）

魔導師（マイブル）の試（プルーバ）し？　……というかその前に、魔導師（マイブル）って？

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊３）

「すみません、魔導師（マイブル）って何ですか？」

「……フレドリカは、何も説明していなかったのか？」

「？　何について、ですか？」

クルスさんは手紙に書いてあったことを簡単に説明してくれる。

私が全属性使い（オールユーザー）であること。

帝国で現在確認されているのは３属性（トリプル）使いまでで過去に４属（クア）性使（トロ）いが

２人いただけだそうだ。

魔力がフレドリカ（祖母のことですね）よりかなり多くあること。

一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）より多い、となるとかなりのものであるらしい。

子供ながらに魔眼（ディアブロ・アイ）が使え、その他魔装具（ディアブロ・コーシー）の類を作れること。

魔眼（ディアブロ・アイ）は魔力がかなり必要で、その調節が難しいらしい。

……おばあちゃんが普通に使ってたから気がつかなかった。

魔装具(ディアブロ・コーシー)を作れればそれだけでかなり儲けることが可能なものらしい。

以上のことから私には魔導師(マイブル)の才能があるから魔導師(マイブル・プルーバ)の試しを受けるように手配させてくれ、ということらしい。

そして、魔導師(マイブル)とは。

一、全属性使い(オールユーザー)である。

一、一級魔術師(マーゴ・デ・プリメーラ)の各属性でもっとも優れている人に勝ったものである。

一、帝国の王の認証により、魔導師(マイブル)と名乗ることが可能である。

この3つを満たす人が魔術師(マーゴ)のトップ、魔導師と名乗るのだそうです。

魔導師(マイブル・プルーバ)の試しはその人が上に書いてある中の2つ目の条件を満たしているかを見るもの、とも解釈していいようだ。

……全属性使い(オールユーザー)、いなかったのですか。

おばあちゃん、それくらい教えておいてくれても……。

試し、落ちたら駄目かな。そう思った瞬間に悪寒が走った。

……おばあさまに呪われる気がする。

……真面目にやろう。

クルスさんに説明してもらってから、城のある場所についた。

魔眼（ディアブロ・アイ）について手紙に書いてあったなら使ってもいいですよね。
訓練所……よりも試合会場（というべきか？　観客席があるし。）みたいなところで、
「視る」と、周りに防御結界が張ってあった。
……魔術の影響を受けないためだろうか？

「クルス様、今日いらっしゃるのはバルドメロ様だけです。」
「そうか、じゃあ今日は水と火、それと闇、かの。アルベルティーナ。」
「はい、何でしょう？　祖母にはティーナと呼ばれておりましたので、
ティーナでかまいません。」
「そうか、それでの、ティーナ。」

クルスさんいわく、魔導師（マイブル・ブルーバ）の試しでは、各属性の魔法をぶつけあうそうだ。
火なら火を、水なら水を、という形らしい。

「それで今城にいる一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）はわしとバルドメロだけでの、
わしは水使い、バルドメロは火使いだからそれでやるとして……今一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）には
闇使いがいないんじゃ。」
「それでは、闇、の相手とは？」
「帝国一の闇使いは今黒騎士（ブラック・ナイト）の長であるからの。そのものにやってもらおうと思う。」
「はい、わかりました。」

つまり今日は前半戦、てことですか。

水、は治療もしていたから結構得意なほうに入る。
闇はあたしの目の色に入っていることもあって得意だ。
……問題は火、か。うまくいくといいのだけれど。

しばらく「視て」いたら（城は魔法にあふれていて、こんなに魔法が多いところは私は初めてなのだ。「視」飽きない。）観客席に人が集まりだした。

……もしかして。

「クルスさん、これって公開試験、みたいなものですか？」
「まあ、そんなものかの。なにしろ、魔導師（マイブル・プルーバ）の試しが行われるのは初めて。
魔術師（マーゴ）にとっては絶好の勉強の場じゃ。皇帝陛下も見学されるそうだからの。」
「こうてい、へいか？」
「『一、帝国の王の認証により、魔導師（マイブル）と名乗ることが可能である。』だからの。
全属性の試しを見られるはずじゃ。」

うわぁぁぁぁぁ！！　恥ずかしい！　公開試験というよりは公開処刑じゃあないか！？
目立ちたくないのにーー！！　地味に生きたいのにーーー！！！

……そこでふと気づいた。魔導師（マイブル）は毎日公開処刑てことになるじゃないか。

人生あきらめが肝心、てことですか。

「皇帝陛下が到着なされました。」
「む、じゃあはじめるかの、ティーナ、会場の真ん中へ。」
「はい。」

会場に入っていくと今までざわざわと話し声がしていたのが一気になくなった。

皇帝陛下、見てみたかったけど、どっちにしろ認証される時に見ることができるだろう。

視線を感じる。……嫌だなぁ。

真ん中まで行ったらクルスさんと向きあう。

「いいかの？」
「いつでも。」

緊張はしているけど魔法ができない、なんてことはない。
……正直修行を始めたころのおばあさまの怖さに怯えていたときのほうが

ずっとやばかった。

「我はクルス・ベナーリオ。水を統べ、扱うものなり。
＞水よ、我が元に聖なる力の源となりて具現せよ！＜」

おお、上級魔術（アダンツァダ・ステゴネリア）。おばあちゃんによくやられたやつの詠唱だ。
クルスさんが唱え終わってこちらに力を向ける。

おっと。
詠唱、したほうがいいのだろうか？　まあいいか。
私は左手をクルスさんのほうに向け、頭の中で構築式を描いた。

――――――どんっ

クルスさんの丸い形をした水塊に私は盾のような形の水をぶつける。
私とクルスさんとの間で水がせめぎあう。

なかなかの威力だ。……けど、クルスさんの魔術はおばあちゃんの魔術に及ばない。
１０歳のとき、私は水の魔術全般でおばあちゃんに勝るようになった。
もちろん、１４になった今でも。
クルスさんが更に魔力をこめてきているのが魔眼（ディアブロ・アイ）でわかる。

……水の魔術で消せば、いいですよね？

「＞水よ＜」

短詠唱（ブリーブ・カント）によってクルスさんが詠唱したものよりもう一段階上の魔術を発動する。

クルスさんの術を包み込むようにして、消えた。

魔力の量、ちゃんと調整できてよかった。

クルスさんが驚いた顔をして固まっている。

え？　今のじゃ駄目でしたか？　私が内心戸惑っているとクルスさんがはっとして言葉を発した。

「我が統べるは癒しの水、今ここに魔導師（マイブル・ブルーバ）の試し、達成したり。」

……決まり文句、みたいなものかな？

「名を、名乗るのじゃ。」

さっきの文章につながる感じで？

「アルベルティーナ・ギラルディーニ、ここで水の試し、達成したり。」

……恥ずかしい。

こんなかんじでいいですか？　という風にクルスさんを見るとクルスさんが頷いてくれた。

クルスさんが会場を出ていくのと同時に黒騎士（ブラック・ナイト）の人が入ってくる。
この人が黒騎士（ブラック・ナイト）の長の人か……。
年齢は２０代だろうか？　藤鼠（ふじねず）色の髪、紫黒（しこく）色の目。
顔の印象はやさしいお兄さん、ってかんじだ。
……そういえば、この世界の人は美形しかいないのだろうか？
それとも転生前の価値観（美形観？）とちがうのか？

「我はマルシアル・ロジオン。帝国一の闇の使い手。……よろしいですか？」
「はい。」

さっきのクルスさんとの試しを見ていたのか、すぐに詠唱を始める。
……ちなみに「闇」というとおり、夜のほうが威力が増すのだけれど。

「＞大いなる闇、影より来たりてここに具現せよ＜」

さて、どんな魔術で、対抗するのがいいですかね？？

＊3　試し（1）（後書き）

今日はたくさん書けたので3話もＵＰします。

＊4　試し（2）

「＞大いなる闇、影より来たりてここに具現せよ＜」

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊４）

地面からＮＡＲＵＴＯでいうシカマルの影縫いの術？　みたいな闇の手が伸びてくる。

うわぁ……やさしそうな顔してマルシアルさん、容赦ないですね……。

手加減してほしいわけではないんですけど。ちょっと、びっくりしました。

得意属性なので詠唱はなし。私は片手で円を描いて手でぐっとつかむ動作をする。

これで出てきた「手」はすべて拘束することができた。

これを消せば、ＯＫですよね。

マルシアルさんが魔力をこめて拘束を外そうとしてきているのが

わかる。

マルシアルさんが発動している術より下に私は術を発動した。

黒い穴を作り、ブラックホールみたいにマルシアルさんの術を飲み込む。

中に取り込んでから、クルスさんの術と同じように包み込むようにして消した。

観客の方々には見えないだろうが、魔術を発動している人と魔眼（ディアブロ・アイ）が使える人にはわかるだろう。

マルシアルさんがため息をついてから、言葉を発した。

「我が使うは夜の闇、今ここに魔導師（マイブル・プルーバ）の試し、達成したり。」

「アルベルティーナ・ギラルディーニ、闇の試し、達成したり。」

にこにこと握手を求めるように手を出されたので手を差し出す。

精神年齢３０代後半だから、やさしそうなお兄さんと握手は少し照れる。

そうしたら、差し出した右手をぐいっとマルシアルさんのほうに引き寄せられた。

ええぇ、何ですか？？

混乱していると私の耳元でマルシアルさんが小声でささやいた。

「君、一体何なんだい？　まあ、何でもいいけど。気に入ったよ。」

「は、？」

ちゅ

……

▲%＊@◎◆$！！！？？？？

こい、っつ、頬にキスしやがった！！

今の私の外見で気に入ったとすれば、ロリコンか、ロリコンなのか！？？（性格が変わってる）

顔が真っ赤になったのがわかる。恥ずかしい。

マルシアル（敬語なし。もういい。）は手を掴んだまま、にやにや（にこにこ、じゃなくて

にやにや、が正しい）と私を見ている。

むかついたので手を振り払うと、マルシアルがさっき使ったような闇の手で

会場の出入り口まで放り投げておいた。

真っ赤になった顔を戻そうと違うことをぐるぐると考えていると別の人が会場に入ってきた。

キャラメル色の髪に深緋（こきひ）色の目、あ、これが「燃えるような赤」の色なのかな？

確かに葡萄（えびいろ）色よりもずっと赤い色だなぁ、と思ってじっとみる。

なんていうか……堅い？　さっきへらへらしていたマルシアルがいたからかもしれないけど、すっごく真面目そうな人だ。

真面目そうに見える人のタイプは
・根っからの真面目な、勉強熱心な人
・お堅い融通の利かない斜め４５度くらいにずれちゃってる人
のどちらか、ということが多いと私は思う。

「バルドメロ・インフォンティーノ、一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）の炎の使い手。お相手願おう。」

おおっと、そうでした、魔導師（マイブル・ブルーバ）の試しでした。

「どうぞ。」

バルドメロさんは一息ついてから低い声で詠唱を始めた。

「＞熱く滾（たぎ）りし焔（ほむら）、我が元に集いて炎塊となれ！＜」

聞いたことがない、読んだこともない詠唱だな……オリジナルですかね？

私が苦手な火に限ってオリジナルで上級魔術（アダンツァダ・ステゴネリア）ですか！？

「＞華炎（アレーヴ・チチェック）＜！！」

普通に防いだら負け、ですよね……おばあさまに呪われたくないです！！（汗）

とりあえず右手で炎の壁、みたいなものを構築して＞華炎（アレーヴ・チチェック）＜を防ぐ。

その間に魔眼（ディアブロ・アイ）で術式の読み込みをする。

……きれいな形の構築式ですね……真面目そうな人タイプの前者ですね。

今のままでは私が押し負けますから、申し訳ないですけど真似させてもらいます。

右手で防いだまま左手で魔眼（ディアブロ・アイ）でみた構築式を宙に描く。

「＞華炎（アレーヴ）＜」

短詠唱（ブリーブ・カント）で右手で発動していた魔術と入れ替わりにバルドメロさんの術にぶつける。

バルドメロさんは一瞬驚いた顔をしたけれど、その後、だんだんとこめる魔力を多くしてきた。

……ちょっと油断してました。バルドメロさんの火は予想以上、ですね。

私が対抗して私の炎に魔力をこめると多分相殺してしまうだろう。

「相殺＝負け」だから、私がやることは、１つ。

バルドメロさんの炎、に魔力をこめた。

どおんっ

爆風とともに土が舞い上がる。収まった先に残っている炎は、私の、炎。

「我が統べるは暖かき焔（ほむら）、ここに魔導師（マイブル・プルーバ）の試し、達成せり。」

「アルベルティーナ・ギラルディーニ、火の試し、達成したり。」

ふう。これで半分、ですか。

まだまだ修行不足ですね……。苦手な属性でも押し負けそうになるとは。

おばあさまに呪われてしまう。……え？　祖母は死人だからそんなことはないんじゃないか？

死人だからこそ、「呪い」、できそうなんですよ、おばあさまには。

バルドメロさんの術、参考になりました。

バルドメロさんにぺこっというかんじで頭を下げ、会場の出入り口へと足を向ける。

この後ってどうすればいいのでしょう？

皇帝陛下に会えるのはすべての属性が終わってから、でしょうか？？

……今でももしかしたら観客席にいらっしゃるのかもしれないけど、

正直観客席をきょろきょろと見回すのは恥ずかしい。
マルシアルのせいで。そう、マルシアルの。
クルスさんにこの後どうすればいいか聞けばいいかな。
そんなことを悶々と考えていたら肩を掴まれた。

……誰でしょう？

「さっきの、術、何をやったのか教えていただきたい。」
「へ？」

そうですよね、会場にいたのは普通に考えてバルドメロさんですよね。

さっきの術って……あぁ。＞華炎（アレーヴ）＜のことですか。

「すみませんでした、オリジナルの術なのに、真似しちゃって……。」
「いや、そんなことはどうでも、いや、どうでもよくはないんだが、それより！！」

？　術を真似したことではないのですか。
じゃあ、……術を消しちゃったことですかね？？

「術を消したことについては、魔力をこめただけなんですけど……。」
「魔力をこめた？　それは、私の術のほうに、ということですか？？」
「はい。」
「人の術に？　……魔力移動の理論、……いや、構築式……」

答えたら、バルドメロさんがぶつぶつと悩みだしてしまった。
ちなみにバルドメロさんはひげを生やしたダンディーなおじさま、という感じだ。
そんな人がぶつぶつといっているのは、正直ちょっと変ですね。
いや、悩むのはいいのですが。手を離していただけないでしょうか。
私がそう考えているのが通じたのか、肩から手を離してもらえた。
けれど、今度は腕を掴まれた。

「確認したいことが多すぎる！　研究室に一緒に来ていただけないか！？？」
「え、や「ありがとう！　さあ、いこう！！」……」
ＯＫ、してないつもりなんですが。

今のでわかりました。根っからの真面目さんは確認したいことがあるとわが道を行く、と。
助けを求めてクルスさんのほうに目を向けたら目があった。
「バルドメロ、４時間したらティーアの迎えに行くからの。」
「わかった。４時間だな。……足りないかもしれない、急ごう。」
……助けてくれるんじゃないんですね。
恨みがこもった目でクルスさんを見たらウインクされた。
一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）って、クルスさんしかり、バルドメロさんしかり、

そしておばあさましかり。まともな人はいないのでしょうか？

馬鹿と天才は紙一重、ってかんじのものがあるのでしょうか？？

そのまま、バルドメロさんの研究室に連行されていくことになったのでした……。

＊4　試し（2）（後書き）

戦いの描写、てできません。

そして自分でつけたキャラの名前を覚えていることができない・・・・！！

何回も「バルドメロ」が「バルメドロ」になりました・・・。

5話は午後にUPしようと思います。

見ていただけるとうれしいです。

＊5　相性

ひっぱられてやってきました。

一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）、バルドメロ・インフォンティーノの研究室です。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊５）

さすが、一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）なだけある。

研究室の中にある本を見てそう思った。

おばあちゃんが持っていた魔術の本、魔装具（ディアブロ・コーシー）の本、構築式の本に加えて、

バルドメロさんの魔術が特化している火の本は私が読んだことのないものが半分くらいある。

……あとで貸してもらおう。

「私の魔術（オリジナル）には、相手が無理に魔力をこめたり、相殺させないようにするように

構築式を組んだつもりだったのだが……私の魔術のほうに魔力をこめた、

と言っていたが、どんな感じにこめたのだ??」

あぁ、なるほど。だからここまでひっぱってこられたわけですね。

研究室には1人、私と同じくらいの年齢の弟子さん？　もしくは部下さん？　がいた。

バルドメロさんと私が入ってきてバルドメロさんが私に質問をすると、

説明しやすいようにか、紙とペンを持ってきてくれた。気がききますね。

「逆向きに、流し込んだんです。」

「逆向き、とは？」

弟子さん（勝手に決定）がもってきてくれた紙にさっきの＞華炎（アレーヴ・チチェック）＜の構築式を描く。

「バルドメロさんはこう、この部分に……時計回りに魔力を流していましたから、

私は反時計回りに。そうするとバルドメロさんの魔力と私の魔力がぶつかりますよね？」

構築式をさしながらバルドメロさんに話す。目で続けろ、と促された。

「そこで、わたしがバルドメロさんの魔力を無理やり変換して……こっちのほうに

流れるようにしたんです。そうすれば構築式自体が駄目になって、

どかん、となったんですね。」

「……なるほど。そこの部分は考えていなかったな。」

その後もいろいろと質問された。

真面目……というか私が疲れるのですが。

矢継ぎ早な質問がやっと終わった、と思ったら。

「よし、じゃあ実験だ。もう一回会場に戻るぞ！！」

……はい？　いやいや、何で私も一緒に行かなきゃいけないんですか？？

「それは、私も強制的に、ですか？」

「もちろん！　ティーナに手伝ってもらったんだからティーナが行かなくてどうする！」

……

「わかりました。実験できる空間があればいいんですね？」

「だから行くんじゃないか。研究室（ここ）じゃあ狭すぎる。」

「作りますから。ちょっと待っててください。」

「作るって……空間魔法か！　さすが魔導師（マイブル）候補だな！」

バルドメロさんがまたいろいろと質問してきたが、答えないでおく。

さっき1個1個答えていたら2時間かかりましたから。これ以上はちょっと。

魔眼（ディアブロ・アイ）を使いながら空間の軸を設定しようと思った。

けれどそこで城（ここ）の座標なんて生活してもいないし、研究もしてないので

座標がわからないことに気づく。

……よし。

「すみません、お弟子さん？？」

「弟子、じゃない。息子だぞ。」

わお。バルドメロさんは結婚してたんですね。……年齢的にそうですよね。

「そうなんですか。すみません、お名前は？」

「俺、ですか？　マクシミリアン・インフォンティーノです。今は三級魔術師（テグナキヤ・マーゴ）の職についています。」

「年、いくつですか？」

「１６です。」

三級魔術師（テグナキヤ・マーゴ）、親子そろって魔術師（マーゴ）なんですか。

マクシミリアンさんは利休茶色の髪の毛にバルドメロさんと同じ深緋（こきひ）の目。

話を聞くとマクシミリアンさんは次男で、あと姉が1人いるそう

だ。

……質問に答えるのに必死で見てなかったけど、確かに親子、てかんじですね。

年が近いし、魔術師（マーゴ）だ。これから手伝ってもらうことも多いだろう。

ということで敬語をやめてもらってリアン、と呼ぶことにした。

おっと。目的から脱線してしまいました。

「リアン、そこでちょっとこれつけて立っていてもらえます？」

「ここでいいか？」

「うん。動かないでねー。」

私が腕につけていた魔装具（ディアブロ・コーシー）をリアンに渡す。

座標がわからないので人の魔力を媒介として空間をつなげることにする。

うん。これならできそう。

「＞天と地、海と陸、人と人の中にありし無限の空間よ＜」

空間魔法は光と闇からの派生魔法である。

失敗すると結構危ない魔法なので詠唱して発動する。

「＞開（アシック）け＜」

よし、開いた。

「バルドメロさん、ここの中に入ってください。リアン、ありがとう。動いていいよ。」

「おう！　じゃあこの中で実験だ！！」

「ん、ティーナ、腕輪(これ)返すよ。」

バルドメロさんが意気揚々と開いた空間の中に入っていく。

城(ここ)では初めてやったけどうまく開いたなぁ。

……ん？

「リアン、ちょっと手貸してね。」

リアンが腕輪を私に返すために伸ばしていた手を掴み、魔眼(ディアブロ・アイ)を発動する。

「……やっぱり。」

人の魔力には固有の波長、というか波紋、というものが存在する。

リアンと私、かなり相性がいいらしいです。

道理であまり「人」を媒介にしたのに魔力を取られず、安定して空間が開けたわけですね。

「……ティーナ、これ、は？　研究室(ここ)の中、魔法陣であふれてるぞ？？」

「あれ？　あ、もしかして……。」

今リアンの手には魔装具(ディアブロ・コーシー)がある。それによって私が発動している魔眼(ディアブロ・アイ)が

リアンにも伝わって発動しているみたいだ。

「かなり」じゃなくて「とても」相性がいいのだろうか？

決めました。

魔導師(マイブル)になるようだったら、バルドメロさんからリアンをもらっていきましょう。

一人でそう決定していると、開いた空間からバルドメロさんに呼ばれた。

忘れてました。すみません。

それから2時間、実験に実験を重ね……私が何回も実験台となり……完成しました。

「よしっ。これで＞華炎(アレーヴ・チチェック)＜はかなりの上級魔術(アダンツァダ・ステゴネリア)になったぞ！」

「はは、よかった、ですね、バルドさん。」

「ん？　……空間の維持に疲れたのか。すまないな。」

「いや……。」

「悪い、ティーナ……。（親父が。）」

リアン、君が言った（）の中身まで伝わったよ。

正直、疲労のパラメータとしては、

空間の維持＞　＞華炎（アレーヴ・チチェック）＜の開発　＞＞＞＞　バルドさんの相手、だ。

研究室に戻って空間を閉じてから、一息ついたところでノックがあった。

ドアを開けるとクルスさんでした。

「終わったかの。じゃあ行くぞ。」

「行くって、どこにですか？」

私、バルドさんの相手（新術の開発）で疲れたのですが。

「言ってなかったかの？　陛下との謁見じゃよ。」

「……冗談、じゃないですよね？」

「一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）を信用しなさい。」

いや、信用できるような一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）、知りませんから。

陛下に会ってみたい、とは思いましたが……。はぁ。

あきらめて研究室を出て行く前に魔眼（ディアブロ・アイ）で見たことを伝えるのを忘れていたのに気づく。

「リアン、あなた火使（シングル）いとして三級魔術師（テグナキヤ・マーゴ）に登録してる？」

「ああ。」

「訂正したほうがいいね。リアン、風（ダブル）も使えると思うよ。今度試してみて。」

私(ティーナ)とリアンの相性のよさはそこにもあったのです。
リアンの目の色には表れていないけれど……また研究してみよう。

リアンは驚いているけど、それ以上にバルドさんが驚いているように見えました。

……今日は驚いた人の顔、たくさん見てますね。

「ティーナ」
「はい、行きます。」

クルスさんに呼ばれたので、今度こそ研究室を出て行く。

皇帝陛下、どんな人何でしょう?

＊5　相性（後書き）

本日、２話目をＵＰです。１０話くらいまで一日2話ＵＰできればいいのですが・・・。

お気に入り登録してくださっている方、ありがとうございます。

だんだんティーナの性格が変わってきている気が・・・（汗）

色について活動報告のほうで出してあるので、気になる方は見てみてください。

＊6　陛下

「俺、こいつが気に入りました。父上、こいつ俺の部下にくださいよ。」
「……は？」

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊６）

時間は遡りまして。

クルスさんについて行って着きました、謁見の間。

……城って広いですよね、迷いますよね。１人で歩かないようにしましょう。
歩くなら方位の魔法でも使わないといけない気がします。

「連れてきました。」
「おお、待ってたぞ。入れ。」

クルスさんが謁見の間の外から声をかけるとすぐに返事が返ってきました。

……今の声の人が皇帝陛下、だろうか？

「失礼します。」

中に入るとＲＰＧ！　というかんじの部屋でした。
（ドラ〇エとかテ〇ルズとかの王様の部屋を想像してもらえればいいです。）

「私が１４代皇帝、オスワルド・ジル・ロジオンだ。
さっきの魔導師（マイブル・ブルーバ）の試し、見せてもらったぞ。こいつ（クルス）倒すとか、初めてみた。さすがだな。」
「ありがとうございます。フレドリカ・ファルコーネの書状によりここにきました、
フレドリカ・ファルコーネの孫、アルベルティーナ・ギラルディーニでございます。」

……私の王様のイメージ、ほぼそのままです。ありがとうございます。

オスワルド・ジル・ロジオン陛下（長いからやっぱりさっきまでと同じで陛下でいいか）は
玉蜀黍色（とうもろこしいろ）の髪の毛に群青色の目で、短髪。
今まであった人のように陛下も美形でした。

髪の色と目の色の組み合わせ、私の好みである。（あ、ここはまったく関係ないですよね。）

隣に座っていらっしゃる長い杏色（あんず）の髪の毛に新橋色の目の女の方は奥様だろう。
陛下にぴったりのお方で、すごくきれいな人でした。

反対隣、は空席だけど……王子さまかお姫さまがいらっしゃるのだろうか？

同じくらいの年、いや、もっと年下でもいい、だったら魔導師（マイブル）になれた後

お会いしておしゃべり相手、くらいにさせてもらえないだろうか。

この２人の子供だ、確実に私が好きな髪の色と目の色の方に違いない。

私がこんなくだらないことを数秒の間に考えていると、陛下がおもしろそうに笑っていた。

「そうか、魔女（ストレーガ）の孫、そうだったな。してティーナ、お前は何が得意だ？」

「得意、ですか？」

これは結構難しい質問だ。おばあちゃんに言われて全属性使い（オールユーザー）としして鍛えてはきたが、

私には「これが私の十八番！」というのがないんです。（古いですか？）

強いて言えば、よく使う魔眼（ディアブロ・アイ）だろうか。

いや、だけどそれは術といえるのか？

陛下が見たい、というつもりでおっしゃっているのなら地味すぎないか？

答えるのに時間がかかっていると陛下がまた口を開いた。

「魔導師（マイブル）候補だから、いろいろできるのだろう？　私の希望を聞いてもらえるか？」

「はい。」

可能な限り。と心の中で付け加える。

「ティーナ、城の防御魔法は見たか？」
「はい。城に入ってくるときに確認しました。」
「よし。じゃあそれをはりなおしてもらおう。」
「……今日来たばっかりの私がやっていいものですか？」

正直、そこの部分が問題だと思います。
もしこれで私が隣国のもので、防御魔法を手を抜くというつもりだとしたら、大変なことに
なるのではないのでしょうか？

「大丈夫だ。なあ、クルス？」
「はい。ティーナ、お前さんこの方が陛下だって今日はじめて知ったじゃろ？
わしの顔も今日始めてみたじゃろ？　フレドリカは何も教えていなかっただろ。
城の中を不思議そうにきょろきょろと見ていたお前さんが隣国のスパイ、と
いうことはまずないじゃろ。違うか？」
「……ありがとうございます。そうですよね。」

陛下もクルスさんも私を疑っていないみたいですね。

では、その信頼にこたえて防御魔法をはることにします。

外ではるのか、謁見（ここ）の間ではるのか、と陛下に聞こうと口を開いたとき、

後ろのドア（つまり私とクルスさんが入ってきたほうですね）が開いて人が入ってきた。

「お、ザール、ちょうどいい。こっちに座れ。」

「はい。」

入ってきた人は陛下の隣（空席だったほう）に座る。

そこに座った人を見、私は予想は間違っていなかった！と心の中でガッツポーズをする。

ザール殿下（ですよね？　多分。本名知らないのでこの呼び方では）

金糸雀色（かなりあいろ）の髪に瑠璃色の目で、やや長い髪の毛を後ろで結んでいる。

年齢は16～18歳、というところだろうか？　この世界の人はみんなはっきりと年齢がわからない。

「ティーナ、魔女（ストレーガ）は世間について全く教えてないんだって？

こいつはバルタザール・デオ・ロジオン。私の3番目の息子だ。」

教えてくださってありがとうございます。

バルタザール殿下、ですか。……それよりも3番目ってことは、まだ金髪青目の家族がいらっしゃるのか！　見てみたいですね。

「ザールよりも防御魔法だ。ティーナ、ここでできるか？

できれば私にもかけたのがわかるようにしてほしいのだが。」

「わかりました。何か金属、もしくは水をためるものはありますか？」

バルタザール殿下（私はバルタザール殿下しか知らないからそのまま殿下、でいいか）の扱いは
そんなかんじでいいのだろうか？

まあ、それはおいといて。

映像を出すなら純粋な物質の上のほうがいい。もしくは水鏡（スー・エスペシオ）ですかね。
陛下が水鏡（スー・エスペシオ）を見てみたい、とおっしゃったので持って来てもらった丸いお盆
みたいなところに水をはった。

「＞浄化（アルタ）＜」

ちょっと補正の魔法をかけて陛下達に見えるようにお盆を宙に浮かせる。
城の外の防御魔法がかかっているのがわかるように水鏡（スー・エスペシオ）に「視」える効果を加える。
何気にクルスさんも興味津々そうに見ていた。

「じゃあ、防御魔法かけますね。」

城の外で私が「視た」感じだと、今かかっているのは光と風の絡み合って網状にしてあるもので、
外からの攻撃、門ではないところから入ってくる人に反応するものみたいだ。
そして、それの維持に働いている魔力をもつ人が６人。

結構な魔力を取るものになっているみたいでした。

私がかけるのは同様に網目状のものではあるが、光・風・闇を混ぜる。

同様に外からの攻撃を防ぎ、門ではないところから入ってくる人に反応する、のに加え、

門での会話がわかるようにし、侵入者が入ってきたら「空間」に拘束するようにして、

構築式を組み替え、維持に働く人が４人でいいように変更した。

（２人分の魔力は私から取るようにしてある）

ついでにちょこちょこと開いていた穴も塞いでおく。

よし。これで（少なくとも私がいる間は）大丈夫だろう。

「こんなかんじでよろしいでしょうか？」

水鏡（スー・エスペシオ）をまじまじと見つめている陛下（達）に聞く。

「あぁ。・・・想像以上だ。」

「ありがとうございます。」

水鏡（スー・エスペシオ）を元に戻して水を払う。

美形にほめられるのはうれしい。と心の中で思っていると、殿下がこっちを見ているのに気づく。

殿下のほうに目を向けると目があった。

殿下がにやり、そう、にやり、と笑った。

既視感(デジャビュ)。

金髪青目なんて皇帝家以外見たことがないのに、なぜか今の顔に見覚えが……。

殿下はにやり、とこっちを向いて笑った後、陛下に声をかけた。

「俺、こいつが気に入りました。父上、こいつ俺の部下にくださいよ。」

「……は？」

……ここで、冒頭に戻るわけです。

「ああ。魔導師(マイブル・プルーバ)の試し終わっていないからティーナはまだ魔導師(マイブル)とは

名乗れないよな。風と土、は1週間のうちにできないこともないんだが……光、がなぁ。

光使(あいつ)いはかなり忙しいからな。」

「陛下、この調子だとティーナは魔導師(マイブル)になれるでしょうから、半年後の、

祝福祭のときにあわせて魔導師(マイブル・プルーバ)の試しを行うのはどうでしょう？」

「そうだな。じゃあ半年後まで、ティーナはザールの部下、てことでいいか。」

クルスさんが陛下に提案したのがあっさり通った。

って、え？　私、殿下の部下決定ですか？　クルスさんの部下とかではなく？

「とりあえずそれまでは一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）を名乗るようにしてくれ。
あ、クルスより水魔法、得意なようだから治癒術師（ヒーラー）でもいいぞ？」
「え、あの、クルスさんの部下、とかではいけないのでしょうか？」
「なんだ、俺の部下になるのは嫌か？」
さっきのにやり、がちょっと……嫌です！と答えようと思いましたが……殿下の、その、
顔がですね、悲しそうで、ですね……断れませんでした。

「わかりました。」
「そうか。じゃあ明日、とりあえず俺の部屋来いよ。」

私が了承した瞬間に顔が変わった。……殿下、私がその顔に弱いってわかってたんでしょうか。

ティーナ　は　一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）（仮）
治癒術師（ヒーラー）（仮）
に　なった！

＊6　陛下（後書き）

各話少しずつ訂正しました。

ティーナさんは金髪青目が好きです。

今日の夜にもう1話ＵＰしようと思います。

この後2話は番外編、というか閑話になると思います。

閑話　＊1　天色

天色をもつ者の場合。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊＊1）

フレドリカ・ファルコーネ――――その名前を聞いたのは何年ぶりだろうか。

彼女は、同期の魔術師（マーゴ）の中でも、群を抜いていた。

ベージュグレイの髪の毛に、インディゴ色の目。

その色からくる２属性（ダブル）使いで水と闇の使い手だった。

治癒術師（ヒーラー）としての才能があったのだが、何しろ性格が治癒術師（ヒーラー）には向かない。

一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）として、魔女（ストレーガ）、と呼ばれるような　――――　主には薬の研究をしていた。

自分の興味がわくところについてしか研究をせず、しかし、その分野にかけては天下一品。

機嫌がわるければ、研究室を抜け出し訓練所で暴れまわる。

自分も水使いではあったが彼女には及ばず、彼女の機嫌が悪いときには被害を受けていた。

そして、２０年前一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）をやめてから、探せど探せど行方は

知らず。

そんな彼女からの書状を持った者　――――――　一体何者だろうか？

門番の黒騎士（ブラック・ナイト）から話を聞いて、すぐに部下に向かわせた。

「君がフレドリカ・ファルコーネの書状を持ってきた子かい？」
「はい。フレドリカ・ファルコーネの孫、アルベルティーナ・ギラルディーニです。」

驚いた。彼女には家庭が……それはもちろん、あると思ってはいたが、
この子が孫、とは……。
正直全く、似ていなかった。

黒色の髪の毛は肩までの長さで、天鵞絨（びろうど）色の目。
彼女は、……なんというか、きつめの顔、をしていたが、この子にはそれはない。
彼女の容姿と全く似ているところがない。
あえていうならば、この、落ち着いた雰囲気、だろうか。
１０代の子どもとしては、少し、変な気がした。

ちなみにあとで、ティーナに聞いたら、

「私が祖母と似ていることはただ１つ、闇使いなことだけです。
祖母と似ている？　……私はまだ人です。鬼とかじゃありませ

ん。」

と否定された。……孫にも厳しかったのか。

ティーナがもってきた手紙を読んで驚いた。

全属性使い(オールユーザー)……本当にいるとは思っていなかった。

帝国の法の中で全属性使い(オールユーザー)は魔導師(マイブル)となれる、とは書いてあったが、

魔法が使える人は５０人に１人、いるかいないかなもので、しかもその１人ですら

１属性を極められることはあまりない、といっていいだろう。

歴史上でも４属性(クアトロ)使いが最高だ。

全属性使い(オールユーザー)は形式的に書いてあるだけだと思っていた。

魔眼(ディアブロ・ディアブロ・コーシー)に魔装具……頭が痛くなってきた。

全属性使い(オールユーザー)だとしても、まだ１０代の子どもだぞ？

使わせないようにする、という心はなかったのか……！

魔導師(マイブル・プルーバ)の試しを受けられるように手配する。

となると、水は自分がやることになるだろう。

ティーナに魔導師(マイブル・プルーバ)の試しと魔導師(マイブル)について簡単に説明する。

……魔術師(マーゴ)だったときからり興味のないことについては何も知らなかったが、

せめて自分の孫にくらい説明してやってくれ。

ティーナは全属性使いがいなかったことも、3属性使いでもほとんどいないことも、

……まず魔術師についても知らなかったようだ。

クアル、という名前だけでわしにたどり着くのにも苦労したかもしれん。

魔導師の試しでは驚いた。ほぼ一瞬で終わってしまった。

フレドリカの孫だから、水の魔術も使えるとは思っていたが……。

一級魔術師の自分でも構築式を手で描く、まではいかなくても詠唱が必要な上級魔術を短詠唱で一瞬で発動。

ちなみにフレドリカはティーナの修行に上級魔術を使っていたそうだ。

8歳のときからは上級魔術を打ち消す練習、というのをやっていたらしい。

……そんなこと、二級魔術師が一級魔術師にあがるときにできたらすごいくらいだ。

なんで短詠唱なのか？と聞いたら、きょとん、とした顔で

「祖母が長詠唱は修行に使うだけで、実践は無詠唱が当たり前、という風に言っていましたので……。」

とかえされた。頭が痛い。そんな風だったら大変なことになる。
ティーナはフレドリカのせいで常識が足りなくなっている、ということがわかった。

彼女の目に入っているだけあって闇は無詠唱（ノン・カント）。
火には少し手間取っていたが、それでもバルドメロの魔術を消して見事に3属性分の魔導師（マイブル・ブルーバ）の試しを成功させた。

それから、ティーナはバルタザール殿下に気に入られ、殿下直属の部下になったわけだが。

「おい、クルス。」
「おや、バルタザール殿下。なんでしょうかの？」
「なんでしょうか、じゃねえだろ！　なんだよ、あいつ常識がねえぞ！？」

殿下はお困りのようだ。

ティーナが一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）として城で生活し始めて3日目。
1日目には魔術師（マーゴ）の階級制度を知らず、マントでの見分け方を殿下がしょうがなく教えているのを見かけた。
2日目には朝、殿下が部屋にこないティーナを気にしていたからわしもさがしたら、
バルドメロの研究室で本を読んでいたのを発見した。
これは前日の夜からずっと読んでいたらしい。

日付が変わっていることも気にせずに読み続けていた。
（バルドメロの息子が殿下に八つ当たりされてたの）
今日は皇帝家について、帝位継承の仕組みをしらなかったから殿下が教えたらしい。

フレドリカがティーナに教えた知識は魔術・精霊術・魔装具（ディアブロ・コーシー）。
それだけについてだったら一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）も及ばない。
特に水についてはフレドリカの属性だったからか、かなりのものだった。
治癒術師（ヒーラー）がティーナが魔導師（マイブル）になれそうなことをとても残念がっていた。

そして闇。これは一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）には一人もいなかったので、
今後がんばってもらうことになるじゃろう。

殿下が文句をぶつぶつといっていると、ドアをノックしてティーナが入ってきた。
ティーナは殿下に軽く頭を下げるとわしのところまでやってきた。

「クルスさん、一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）って、部下、というか……
お手伝いさん？　仲間？、みたいなひとってつけることができるんですか？」
「ああ、そうじゃの。部下、という形になるかな。ん？　だれかほしいのかの？」
「はい。あの、リアン、……マクシミリアン・インフォンティーノ、を！」

ほう。バルドメロのところの次男か。
……そういえばティーナに言われて1属性使い《シングル》から2属性使い《ダブル》になることになった者だったかの。

「おい、ティーナ、聞いてねえぞ？」
「げっ、ザール殿下。……ザール殿下の許可が必要でしょうか？」
「当たり前だ！！　いいか？お前は俺の部下！　てことは
俺は上司だろうが！　っていうかお前、「げっ」てなんだよ！」
「声に出てました？　すみません。それでザール殿下、よろしいでしょうか？」

ティーナはバルドメロを「我が道を行く」タイプだと言ったが、ティーナもそうじゃの。
殿下はため息をついた。

「……マクシミリアン・インフォンティーノ、だな？　インフォンティーノ、てことは火使いか。」
「え？　苗字に何か関係があるんですか？」
「おま、……クルス、説明してやれ。」

ティーナにインフォンティーノ家について説明する。
・インフォンテエィーノの姓を継ぐものは火使いであること。
（子どもが火を使えないときはインフォンティーノではなかった方の姓を名乗る。）
・インフォンティーノ家の当主はその家の中で一番の火使いであること。
（今はティーナが勝ったバルドメロが当主じゃ。）
・インフォンティーノ家は帝国の中でも火使いの半分以上を占めること。
・それ故にインフォンティーノ家はかなりの名家と言われていること。
（ちなみに風使いの名家と呼ばれるシルヴェストリ家もあること。）

・バルドメロの子どもは3人、長男は騎士（ナイト）、次男は魔術師（マーゴ）、長女は現在留学中であること。などなどじゃの。

「なるほど。そうなんですか。」

「……俺が調べておくから、お前、俺の部屋行って本でも読んでろ。」

「いいんですか！？　ありがとうございます！　クルスさん、失礼しました。」

殿下が言った言葉に満面の笑みを向けてからティーナは部屋から出て行った。

「……クルス、ちょっと手伝え。」

「わかりました。」

殿下が少し疲れた様子でわしに声をかけてきた。

ん？　まだフォローするには早いですのぅ。

今まで殿下が人を振り回すことはあっても、殿下が振り回されるなんてなかったからの。

しばらく、ティーナに振り回される殿下を見てようと思ったんじゃよ。

閑話　＊1　天色（後書き）

閑話1話、クルス・ベナーリオさんの場合でした。

あともう1話閑話として入れてからまた本編に戻ります。

活動報告で出てきた色の紹介をしていますので、

気になったら見に来てください。

閑話　＊2　金糸雀

金糸雀色の髪の男の場合。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊＊2）

魔導師（マイブル・プルーバ）の試しが行われる。

そのことを聞いて驚いた。全属性使（オールユーザー）いって、本当にいたのか……。

魔導師（マイブル）になるためには皇帝の認証が必要だ。

父上が魔導師（マイブル・プルーバ）の試しを見にいくことになるから、俺もついていった。

さて、どんなやつが全属性使（オールユーザー）いなんだ？

訓練の会場――――正式には魔術師（マーゴ）が使う訓練所で訓練（グランテ・デ・マテンド）の間だが――――の見学席で待つ。

出てきたのは、クルスと、俺よりも年下だと思われる女、だった。

クルス＝全属性使（オールユーザー）いということはない。

じいさんとは長い付き合いだからな。
じいさんが2属性使いだっていうことは知っている。
ってことは、隣の女、だよな。
女だから、という理由でじいさんに勝てないとは思ってはいないが、一体どうやって勝つつもりなんだ？

魔導師の試しはすごかった。

特に火の試しだな。バルドメロも容赦ないな、オリジナルでくるとは思ってなかった。
彼女が始め火の壁でただ防いだだけだったから無理なんじゃないか？　と思ったが、まさかバルドメロのオリジナルの術をコピーするとは思わなかった。
しかもバルドメロのほうの火を消すとは。

俺には魔法の才能はほとんどない。
それでも一級魔術師のオリジナルの術は簡単にコピーできるものじゃないことくらいわかる。
……小さいころにじいさんに見せてもらったじいさんオリジナルの術は構築式の理解がまず俺にはできないものだと思ったし。

魔導師の試しが終わった後、バルドメロに彼女が連れて行かれるのが見えた。
……バルドメロは真面目だからな。俺が行ったら巻き添えをくらうだろう。
クルスのじいさんのところに行けば会えそうだ。後で行こう。

頃合をみてじいさんの部屋に行ってみたが、まずじいさんがいない。
じいさんの部下（浅緑色の目のほうな）に聞いたら父上との謁見、だそうだ。
魔導師(マイブル)候補と一緒に。

彼女の顔を見るのにもちょうどいい機会だ。

そう思って謁見の間に入るとちょうど彼女が城の防御魔法をかけるところだった。
俺達にも見えるように水鏡(スー・エスペシオ)を出す。……短詠唱(ブリーブ・カント)でできるのか。

魔導師(マイブル)候補も伊達じゃねえよな。

「＞大いなる光　敵を阻む風　敵を探す闇　捉えるもの　ここに仇なすものをとらえ
ここを守護する力　3つの力を持ちて　ここに守る力を成せ
大いなる(グラン)　光(ラシャーザ)　阻む(ブロッコ)　風(ベント)　探す(チーサ)　闇(ダイスタニマネスト)　力を(ヘットゲルト)　なせ＜」

さすがに防御魔法は長詠唱(ルンゴ・カント)だった。そりゃあそうだ。

だけどあとで聞いたら、

「それのほうが魔法かけてるってかんじで陛下もまわりにいた方々も安心するのでは
ないかと思ったので。……短詠唱(ブリーブ・カント)のほうがよかったですか？」

て言われた。ちょっとむかついた。

城の防御魔法かけるのを見て気に入った。彼女は腕がいいし、誰の部下でもない。

魔法が使える奴がほしかったところだ。

どうしようか、と思いながら彼女を見てると視線に気づいたのか、彼女が俺のほうをみた。

よし、今父上に言って彼女を部下にもらおう。

そう思って俺は彼女ににやり、と笑ったあと（にやりと笑ったのに気づいたのだろうか？）父上に声をかけた。

「俺、こいつが気に入りました。父上、こいつ俺の部下にくださいよ。」

「……は？」

父上は許可してくださるようだったが、彼女のほうが戸惑っている。

「え、あの、クルスさんの部下、とかではいけないのでしょうか？」

「なんだ、俺の部下になるのは嫌か？」

悲しそうな顔（しているつもり）で彼女を見る。

彼女は俺のことを知らないから、俺が本当に悲しいかなんてわか

らないだろう。
まあ、断られても強制的に部下にするつもりだが。
「わかりました。」
「そうか。じゃあ明日、とりあえず俺の部屋来いよ。」
お、了承したな。
とりあえず今日はこれでいいだろう。明日、また話すことにしよう。

◆　◆　◆　◆　◆

＞一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）　1日目＜

……まず、騎士団と魔術師（マーゴ）についての説明が必要らしい。
ティーナ（改めて自己紹介してこう呼ぶことにした）に騎士や魔術師（マーゴ）についてどれくらい知っているのか、と聞いたら昨日門番さんに聞きました、とすごく基本的なところを話された。
魔女（ストレーガ）は相当世俗から離れたところにいたのか？
しょうがないからティーナにもう少し説明することにした。
現在、帝国が抱えている軍隊は騎士団のみということになっている。
（有事の際には魔術師（マーゴ）も軍の一員だが。）
騎士団には白騎士（ホワイト・ナイト）と黒騎士（ブラック・ナイト）の二つの部隊があり、基本の隊の構成

は同じ。
まず一般騎士。もちろんこれが一番多い。一般的な騎士(ナイト)はこれのことだろう。
地方に派遣され、2年交代で派遣場所を白と黒を入れかえる。
（今北・南が白騎士(ホワイト・ナイト)だったら2年後は黒騎士(ブラック・ナイト)、というようにな。）
次に壮騎士(ニーバル・ナイト)。地方や大会での活躍によって一般騎士から昇進する。
壮騎士(ニーバル・ナイト)の半分は地方、半分は帝都だ。
ちなみに俺も今壮騎士(ニーバル・ナイト)である。
俺は「王子」だから普通の壮騎士(ニーバル・ナイト)よりちょっと上、てところだ。
ティーナは全く知らなかったが。
これより上に騎士隊長が白・黒に7人、あとは白騎士団長・黒騎士団長、騎士団全体を統べるのが騎士団長になっている。

黒騎士団長とは「試し」で戦ったじゃないか、といったらしばらく考えた後、顔を赤くした。
そういえば、闇の試しのあとなんかされてたよな。

「マルシアルは俺の従兄弟だ、苗字同じだろ？」
「気づいてませんでした……。だからあの時……。」

なんかぶつぶつと言っていた。
その後、ザール殿下（なぜかこう略された）と似てますね、と言われた。

……ティーナは自分が勝ったやつがどれくらいの地位にいるのか理解していなかったらしい。

魔術師(マーゴ)もまあ、人数はかなり少ないがおなじようなものだ。
一級魔術師(マーゴ・デ・プリメーラ)が一番えらい。現在、12人である。

これは2年に1度の二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）からの昇進試験、または大会での成績によって決まる。

服装としては、黒いマントをつけることが義務付けられており、黒いマントに魔力をこめた糸で一本の線が縫ってあり（それぞれ目と同じ色になるらしい）、首もとに帝国の釦がついている。

首もとの釦は魔術師（マーゴ）全体でマントの同じところにある。

二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）は1年半に1度の三級魔術師（テグナキヤ・マーゴ）からの昇進試験、2属性（ダブル）使い以上は魔術師（マーゴ）の試験に受かればはじめから二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）になれる。

服装は白いマントで魔力をこめた糸で3本線が引かれている。

三級魔術師（テグナキヤ・マーゴ）は1年に1回の試験によるものだ。

服装は白いマントで1本線のものである。

特に見分けるのが重要であるので、服装について説明した。

なんというか、どっと疲れた。

◆　◆　◆　◆　◆

＞一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）　3日目＜

昨日は大変だった。

……さすがにバルドメロの部屋で夜通し本を読んでるとは思わなかった。

むかついたからバルドメロの息子に少し八つ当たりしておいた。

え？なんでティーナにやらないのかって？

……仕返しされたら勝てる自信がないからだよ。俺が上司だからしてこないかもしれないけど。

仕事に関しては普通、いや優秀だが、常識がないのは困る。
魔法についての書類（さすがに魔導師候補なだけあってかなりの知識だ）を片付けていたら、ティーナが何か思い出した、という風に口を開いた。
「そういえば、ザール殿下って3男なんですよね？陛下の。だったら別に騎士団に
入らなくても王子様の生活していればよかったんじゃないですか？？」
……そうか、知らないんだよな。
2日もいろいろと説明をしてきたのでだんだんなれてきた。
「次の皇帝、15代皇帝だな、を兄上が継ぐとは決まってないんだ。まあ、第1継承権は
一番上の兄にあるけれどな。この帝国の帝位の継ぎ方は特殊でな、
一番下の子ども、今だと俺の妹だが、が25歳になるまで皇帝の子どもは
何かしらの職につき、騎士でもよし、魔術師でもよし、
とにかく成果をあげることが必要なんだ。帝位を継ぐ、てことだけではなく
自分の兄弟が帝位についたときにそれまでの成果によってその後の地位とかまで
決まるんだよ。俺は別に帝位につきたいわけじゃあないが。
父上も13代皇帝の長男じゃなく次男だったからな。あ、女でも帝位は継げるぞ？」
「そうなんですか……。なんていうか、実力主義、ですかね。」

ティーナは関心したように話を聞いていた。帝国は確かに特殊だからな。

クルスのじいさんのところで文句を言っていたら、ティーナが入ってきた。
俺に頭を下げてからじいさんに話し始めた。

……ん？　部下？

「おい、ティーナ、聞いてねえぞ？」
「げっ、ザール殿下。……ザール殿下の許可が必要でしょうか？」
「当たり前だ！　いいか？　お前は俺の部下！　てことは
俺は上司だろうが！　っていうかお前、「げっ」てなんだよ！」
「声に出てました？すみません。それで、ザール殿下、よろしいでしょうか？」

こいつが言うからには使える奴だろう。
ちょっと調べてからだったら問題ないに違いない。

「……マクシミリアン・インフォンティーノ、だな？　インフォンティーノ、てことは火使いか。」
「え？　苗字に何か関係があるんですか？」
「おま、……クルス、説明してやれ。」

クルスにインフォンティーノ家について説明するように言う。
……本当に基本的なところが抜けてる。

「なるほど。そうなんですか。」
「……俺が調べておくから、お前、俺の部屋行って本でも読んで

ろ。」
「いいんですか！？　ありがとうございます！　クルスさん、失礼しました。」
ティーナは満面の笑みを浮かべた後、部屋を出て行った。
いや、普通にかわいいけどよ、……なんか、疲れる。
「クルス、ちょっと手伝え。」
「わかりました。」
クルスは少し楽しそうだ。俺だって、別に嫌なわけじゃない。
が。……インフォンティーノの次男を入れたら違うだろうか？
とりあえず、会いにいってみるか。

閑話　＊2　金糸雀（後書き）

閑話2話、バルタザール・デオ・ロジオンの場合でした。

なんかリアンとザールの性格がかぶっているような気が……（汗）

午後に本編を1話UPしようと思っています。

＊7　任務（1）

「『子どもさらい事件』、ですか？」

私が行かないといけないものですか。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊7）

一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）として城で生活し始めてから1週間。

ザール殿下に怒られたり、本の山に埋もれたり、リアンを引っ張ってきたり……。

そんな中、殿下から言われたのは1つの任務だった。

「そうだ。これは西で起きているものらしくてな、派遣されている白騎士（ホワイト・ナイト）からの協力要請が来ている。」

そういって紙を渡された。

帝国の西のある村で、先月から子どもが消える事件が6件起きている。

時間はいずれも深夜。何日おきに、とかどこの家の子どもが次に

いなくなる、というのは
決まっていなく、規則性がわかっていないらしい。
今月に入って2件。今月に入ってからは村の住民からの希望で騎士(ナイト)が見張っていたが、
気がついたら朝になってしまい、子どもが1人消えてしまっていたらしい。
白騎士(ホワイト・ナイト)の光・火・風使いでは効果がなかった、ということだ。
「白騎士(ホワイト・ナイト)のバルタザール殿下のもとにこの任務が来たのはティーナが
いるからですか？」
「そうだ。俺たち3人と黒騎士(ブラック・ナイト)の数名が行くことになる。」

ザール殿下に質問を投げかけたのはリアンだ。
私との相性がいいので私と一緒にザール殿下直属の部下になりました。

「……つまり、この事件では事件が深夜に発生していて、犯人は白騎士(ホワイト・ナイト)の
魔法使いを眠らせるほどの実力があります。闇使い、それも三級(ナキヤ)や二級(シグナティオ)ではなく
一級魔術師(マーゴ・デ・プリメーラ)が必要。この条件を満たすのが私、てことでしょうか？」
「その通り。まあ、お前(ティーナ)の実力を見るのも兼ねているかもしれんが。
もしかしたら黒騎士(ブラック・ナイト)だったら耐性があるかもしれないから
俺が指揮官となって黒騎士(ブラック・ナイト)を連れて行くことになる。」
「わかりました。じゃあザール殿下とリアンに連絡用の魔装具(ディアブロ・コーシー)作っておきますね。」

通信機能と、魔法耐性。……魔力転送装置もつけたほうがいいのか？
眠らないために下級魔術（ポルニゴ・ステゴネリア）ができるようにしたほうがいいのかな？
魔装具（ディアブロ・コーシー）について考えていると、２人が驚いた顔をしていた。
「……やっぱり魔力転送装置までつけたほうがいいですかね？」
「お前、本当に……付けられるだけ付けといてくれ。供えあれば憂いなし、てことで。」
「規定外、てかんじですよね、殿下。流石魔導師候補（マイブル）……」
俺自分の才能のなさが悲しくなってくるよ、とリアンがつぶやいていた。
そんなことはないと思うのだけれど。急にどうしたのだろうか？

◆　◆　◆　◆　◆

「これです。」
西行きの馬車の中で殿下とリアンに魔装具（ディアブロ・コーシー）（指輪バージョン）を渡す。
馬車は2台でそれぞれ4人のりだ。
わたしが乗っているほうの馬車には殿下、リアン、私。
殿下がいらっしゃるからか、こっちの馬車は3人でのっている。
「魔装具（ディアブロ・コーシー）か。」
「はい。機能としては通信機能に魔力転送、魔法耐性、あ、あとここに魔力をこめると

下級魔術(ポルニゴ・ステゴネリア)が発動するようになっていてですね、2つの魔術が入ってます。
1つ目は＞拘束(モデラフィオン)＜、魔力をこめて作った闇の紐、見たいなものです。
2つ目は＞土の壁(スエロ・ウォール)＜言葉のままですね。防御に使ってください。
殿下は私の魔力を転送装置から使ってもらえればいいので。」
「お前は魔力がなくなる、てことはないのか？」
「ないと思うんですけど……、多分。祖母に『お前の魔力は底なしか』て言われたので
大丈夫だと思います。」
「……わかった。遠慮なく使おう。」

2人は私の説明を聞いた後中指にはめていた。
ちなみに私は一級魔術師(マーゴ・デ・ブリメーラ)の黒いマントを着ていて、リアンは二級魔術師(マーゴ・デ・シグナディオ)の白いマント、ザール殿下は白騎士(ホワイト・ナイト)の正式衣装らしい、背中に帝国の紋章がついた団服を着ている。
もう1つの馬車の黒騎士(ブラック・ナイト)さんとの違いを見るに、黒騎士(ブラック・ナイト)さんたちは一般騎士みたいだ。
帝国の正式な制服には白黒しかないのだろうか？

……と。

「殿下、魔物です。私が一気に退治しちゃっていいですか？」
「そうだな……黒騎士(ブラック・ナイト)たちにお前の実力を見せるのがいいだろう。
俺たちの目に見えるところで、退治してくれ。」
「わかりました。」

馬車をとめる。馬車の周りに2台とも守護の光魔法をかけておく。

「リアン、馬車の守りよろしく。」
「わかった。」

リアンに任せておけば大丈夫だろう。彼はまだ風魔法をやり始めたばかりだが、
私を介して時々魔眼（ディアブロ・アイ）をやりながら修行をしていて上達が早い。
黒騎士（ブラック・ナイト）さんたちは私の魔導師（マイブル・プルーバ）の試しを見ていない。
いきなり一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）と言われても新人だからあまり信用できないし、私の魔法を見なければいざというときの援護もできないだろう。
殿下はそれを考えておっしゃったのだろうから。

正面からイノシシみたいな魔物が3匹、上から鳥みたいなのが2匹、左右から狼みたいなのが4匹。
「一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）新人（ルーキー）アルベルティーナ、推して参る！」

すみません、ちょっと言ってみたかったんです。BAS○RA。

まず狼（1番距離が近かったので）。右手で氷の刃を4つ作ってまっぷたつ。
左手でイノシシの突進を防ぐために土の壁を出す。
そして上から突っ込んできた鳥の攻撃をひょい、と避け、今度は火の槍を作って鳥に向かって投げる。
お、ちゃんとあたった。
鳥2体に火の槍があたったことを見てから土の壁だったものを変形させて土の檻に変える。
水の剣を作ってイノシシをきる。

戦闘終了、ですね。

……なんか、弱すぎません？　一発で終わりなんて。
次からは黒騎士（ブラック・ナイト）さんたちに見せるつもりでもうちょっと時間かけるべきでしょうか。

ちなみに魔物の死体は5分くらいすると消える。
こういうところ、なんかＲＰＧっぽいですよね。

馬車に被害はなかったことを確認してから、また西に向けて走り出す。

「ティーナ、武器使えたのか。」
「まあ、一通り。」

祖母に対抗するために。と続ければ2人は不思議そうな顔をしていた。

「剣使えるんだな？　じゃあ帝都に帰ったらお前、俺の相手な。」
「げっ、殿下の相手ですか？　……手加減は？」
「なしだ！　ていうかさっきのを見た限りだとお前のほうが強い可能性もある！」
「……冗談ですよね？　リアン、あなたがぜひ、かわりに！」
「俺、剣使えないからな……ちょっとは練習すべきでしょうか？」
「やっておいて損はないだろう。魔法当てるのとかに役立たないのか？」

殿下に聞かれた。
うーん。微妙ですね。

「私の場合だと風で補正とかしちゃうので……あ、そうか。むしろリアン、
風補正の練習する？風使いでもあるからさ。」
「そんなことしてたのか。風補正なんて聞いたことな……全属性（オールユーザー）使いだもんな。
できないことはないよな。あぁ、じゃあ帝都に帰ってからやるか。」

「じゃあ殿下とリアンでペア組んだらどうです？　殿下は近距離、リアンは
長距離ですから、それで慣れればいい線いくと思いませんか？」
「お前1人で大丈夫なのか？」
「はい。伊達に7歳のころから祖母に言われて山賊狩りしてませんよ！」

そうやって言ったらひかれた。
……しょうがないじゃないですか、必要に迫られてですよ。必要に。

その後も魔物が襲ってきたが、殿下が「お前だったら馬車止める必要ないだろ」とおっしゃったので（確かに馬車からでも十分倒せるほどでしたが）馬車を止めることなく、西に向かった。

昼間に魔物の気配を感じるのは周りの森林と、風で感知するのが一番早い。
魔物が馬車から５０Ｍ以内に入ったら馬車の外に出、クナイの形にした氷や、火の槍を飛ばす。

一回ちょっと手ごわい敵がいたので、走っている馬車を降りて魔

物を倒してからまた走っている馬車に戻ったら驚かれた。

「どうやって戻ってきたんだ？　今、一回停車しようと思ってたところだったんだが。」

「精霊にちょっと風増ししてもらったんです。やろうと思えば私、馬車よりも早い

速度で走れますよ？」

「まてまて、色々聞きたいが取り合えず……精霊見せてくれ。」

殿下がそうおっしゃったので精霊を呼ぶ。

リアンも期待した目でこっちを見ていた。

「＞エーヴ＜」

「なんでしょう？　風向き変えます？」

「や、そうじゃなくてね。こっちの方々に挨拶してくれる？」

「ハイ。わかりました。はじめまして、ワタシ風の眷属でアルベルティーナ様と契約を

結んでおります、＞エーヴ＜と申します。」

「これ、は鳥、の形をとってるな。風の精霊はみんな鳥の形をしているものなのか？」

「イエ、ワタシたち精霊はもとは＞姿なき者（ズィ・イノセンテ）＜。我が主の魔力と、イメージによって

この形となりました。」

「ティーナ、これ触ってもいいか？」

リアンの目が期待に輝いている。精霊を見たことがなかったのだろう。

「リアンは風使いだから触れると思うよ。＞エーヴ＜、リアンの腕に止まっていてくれる？」

「ハイ。」

そういってリアンの腕に飛んでいった。リアンは嬉しそうに＞エーヴ＜をなでている。

＞エーヴ＜が言っていたようにこの世界で精霊は＞姿なき者（ズィ・イノセンテ）＜、言葉通り普通に生活していては見えないものである。

私は魔眼（ディアブロ・アイ）で「視」ている。先天的に精霊を見れる人もいるらしい。

私が＞エーヴ＜と契約を結んだのは5歳のとき。祖母の近くにいた水の精霊みたいに私にも契約を結んだ精霊がほしかったのだ。

イメージで姿を作り出せることがわかったので、私は＞エーヴ＜を緑色の鳥にした。

ちなみに私は闇の精霊とも契約しているが、闇の精霊の姿はポケ○ンのブラッキーだ。

もし火の精霊と契約することになったら不死鳥の形にしようと思っている。

たとえ精霊を私の魔力で具現化していても精霊に触れるのはその属性の魔法が使える人だけだ。

だから殿下は＞エーヴ＜を触れなくてちょっと不満気だった。

私は馬車の外をちら、と見た。今は夕方だ。

目的の村につくまで、この調子でいくとあと3時間はかかる。

「殿下、馬車の速度あげてもいいですか？」

「ああ、そうだな。このままだとまだかなりの時間がかかりそうだ。

……1時間くらい短縮できるか？」

「それ以上可能ですね。あと1時間でつくようにしましょう。

＞エーヴ＜」
「は？　あと1じか、」
「ハイ。」

＞エーヴ＜が返事をした瞬間に速度がぐんっと早くなる。
殿下がこっちをにらんでいる。舌をかんだらしく涙目だった。…
…すみません。

＊7　任務（1）（後書き）

やっと魔物を倒しました。精霊もちょこっとだけ。
「ファンタジー」っていったら、魔法だけじゃなくて色々出したいですよね！

明日からは1日1話の更新になると思います。
「任務」のところは1話1話を長くしていて大変なことになりそうです……。

お気に入り登録していただいた方、読んでくださっている方、ありがとうございます。

＊8　任務（2）

＞エーヴ＜の力をかりて、1時間で目的地までついたわけですが。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊８）

「……これから、精霊の力を借りて速度を上げるときは事前にいうこと。いいな？」

「はい。すみませんでした。」

殿下に怒られました。

リアンは私が＞エーヴ＜を消してしまったので残念がっていた。

黒騎士（ブラック・ナイト）の皆さんはこんなに早く着いたのに驚いていたが、馬車から荷物をおろしている。

「バルタザール殿下、ティーナの説教は後にしていただいて、とりあえず村にいる

白騎士（ホワイト・ナイト）の人たちに話を聞きに行きましょう。」

「そうだな。ああ、黒騎士（ブラック・ナイト）たち、荷物そこにおいていっていいぞ？

こいつ（ティーナ）が運ぶから。」

「ちょ、運ぶなんて言ってないんですけど……。」

「運んで、くれるよな？」

殿下が私の耳元で低い声（甘い声じゃあありません、脅している声です。）で言って微笑んだ。
……私の好みが金髪青目だってわかってやっているのだろうか。
ちょっと黒い笑みでも美形は美形。かっこいいじゃないですか。
逆らえないので光魔法で重力操作してから風魔法で運んだ。

宿に荷物を預けてから白騎士（ホワイト・ナイト）さんたちのもとに話を聞きに行ってきた殿下たちと合流する。

「ティーナ、お前はこの『子どもさらい事件』、どう思う？」
「そうですね、いくつか考えてみたんですけど……」

今回の事件に関わっている可能性のあるものは
・闇使い（かなりの魔力をもった）
・精霊（こっちはもしかしたら、ではあるが）
の２つだと思っている。

人を眠らせる魔法は闇属性のものだ。そして、騎士（ナイト）を眠らせることができるということはかなりの魔力を持っている可能性がある。
精霊であれば、魔法を使うことは人間が手や足を動かすことと同じくらい簡単だ。精霊は単独では人にちょっかいを出すことはまずないだろうから、精霊がいたらその精霊と契約している人間もいるだろう。

子どもさらいの目的はわからないですね。
山賊とかの仕業であれば子どもを売りに出していることが考えられる。
……さすがに悪魔を呼び出すための生贄、とかではないと思うのですが。

そのことを殿下たちに説明した。

「じゃあ、どうやって犯人を捜す気だ？」

「それが、ですね。犯人が犯行を起こしてくれない限り、無理ですね。」

殿下たちが白騎士（ホワイト・ナイト）の人たちからの話で、魔法の痕跡を探ろうとしたら消えていた、と言っていたのを聞いた。

痕跡を追えれば今からでも犯人にたどり着くことができるだろうが、消えてしまっているのなら追えないと思います。

「犯人を追う前にまず、ここの守護魔法が気になります。」

「何かおかしいのか？」

「おかしい、というか消えかかってますね。かけなおさなくていいんでしょうか？」

「わからないな。白騎士（ホワイト・ナイト）たちに聞きに行くか。」

「はい。」

犯人が何か仕掛けてくるようだったら「感知」の魔法を村にはったのでわかるだろう。

白騎士（ホワイト・ナイト）さんたちがいる家に行って、ドアをノックした。

「はい、何でしょう？」

中から白騎士（ホワイト・ナイト）が1人出てくる。私を見て不信そうな顔をする。

……人間、外見で判断するべきではないと思いますよ、お兄（きし）さん。

黒マントを見て一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）とは気づきませんか？
そんなことを考えているのは顔には見せず、にっこりと笑って言う。

「夜分にすみません、本日ここにやってきました、一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）に就いております、
アルベルティーナ・ギラルディーニと申します。白騎士（ホワイト・ナイト）の責任者さんは？」
「ここに。何か御用でしょうか？」
「この村の守護魔法は、いつはりなおすことになっているのかご存知でしょうか？」

出てきたおじさんに聞くと、おじさんは不思議そうな顔で私に聞き返してきた。

「守護魔法が弱くなっているのでしょうか？」
「……殿下。」
「俺に言われてもな。ここに魔眼（ディアブロ・アイ）を使える者はいないのか？」

守護魔法が弱くなっていることに気づいていなかったのですか！？
殿下が出てきて聞くと、その場にいた白騎士（ホワイト・ナイト）たちは姿勢を正した。
が、殿下の質問に答えるものはいない。
……ということは。

「殿下、ここの騎士（ナイト）さんたちが黒騎士（ブラック・ナイト）さんに変わるのは何年、何ヶ月後ですか？」
「ここの任期はあと1年だ。そうだよな？」
「はいっ。1年で交代となります！」
「次は魔眼（ディアブロ・アイ）使える人派遣してくださいよ？」
「……父上に言っておこう。」

1年、ですか。じゃあ今私がはるのがいいだろう。

「リアン、村の守護魔法はるから手伝ってくれる？　殿下も手伝っていただけますか？

リアンは村の北端、殿下は西端、白騎士（ホワイト・ナイト）さん1人東端に立っていてください。

魔力を使える必要はありません。目印なだけですから。

私は村の南に向かいますが、誰か村長さん連れてきてください。いいですか？」

それぞれに指示して私は南に向かう。リオンも殿下もすぐにうなずいて移動してくれた。

「殿下、着きましたか？」

「ああ。……ここに来て早速魔装具（ディアブロ・コーシー）が役に立ったな。」

「こんなことに使うとは思っていなかったんですけど。　リアンも着いた？」

「着いたぞ。」

「リアンは魔眼（ディアブロ・アイ）使ってくれる？　私が今使ってるから魔力をこめれば

すぐできると思う。」

「よし、視えるようになった。」

「じゃあ2人ともそこで待っていてください。今のところ気配を感じませんが、魔物に

気をつけていてください。」

守護魔法は城ではった防御魔法とは違う。言ってしまえば防御魔法は「人」を相手としての魔法であるが、守護魔法は「人ではないもの」を相手としている魔法だ。

私は白騎士（ホワイト・ナイト）さんが村長さんを連れてくるのを待っている間に水鏡（スー・エスペシオ）を作り、陛下達に見せたときのように「視」えるようにする。

「一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）殿、連れてまいりました！」

「ありがとうございます。　村長さん、夜分にすみません。私は一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）に

就いております、アルベルティーナ・ギラルディーニと申します。守護魔法をはるに

あたって、村長さんにお聞きしたいことがあって来ていただきました。」

丁寧な態度で。おばあさまに教えられたことだ。

この守護魔法の調子だと、魔物が村の中に入ってきてしまったことがあったに違いない。

きっと作物に被害が出ているだろう。

村長さんにどんな姿の魔物が村に入ってきたことがあるか聞いた。

「それでしたら、イノシシみたいなやつと、火をはく鳥が来たでさぁ。

守護魔法はってくれるだか？　助かるべ。」

「いえ、村に守護魔法をはるのは帝国の使いとして当然のことです。

夜分に失礼いたしました。ご協力ありがとうございました。

明日には魔物は入ってこれなくなります。これから1年単位ではりなおすので

安心してください。」

そう、これは魔法が使える者としては当然のことなのだ。

おばあさまも言っていたし、私もそう思う。

人を守ってこその魔法、人のためになってことの魔法だ。

白騎士（ホワイト・ナイト）さんに村長さんを家まで送り届けるように言ってから、早速守護魔法をはることにする。

イノシシ型のやつは大した問題ではないだろう。どの属性の魔法をはってもちゃんと守護魔法が作用するならば村に入ってくることはなくなる。

火をはく鳥はちょっとやっかいだが、これは水を守護魔法に組み込めば問題なくなるはず。

「いいですか？　これから村の外と空間を切り離します。
リアンはずっと東に立ってる白騎士（ホワイト・ナイト）に意識を集中させていて。
殿下はそのまま、動かないでくださいよ？」

2人に声をかけてから詠唱をはじめる。
私、リアン、殿下、白騎士（ホワイト・ナイト）さんを空間の軸として切り離す。
白騎士（ホワイト・ナイト）さんの魔力はわかりにくいのだがリアンがサポートしていてくれるので楽に見つけだせた。

「＞空と土　光と闇　我が存在せし空間
4つの印を持ち　ここに　我と汝とを隔てる　壁を＜」

詠唱しながら私とリアン、殿下と白騎士（ホワイト・ナイト）さんの間を魔力の紐でつなぐ。
よし、隔離成功。

「＞堅固なる守り　悪しきものを浄化する光　水の守護をもちてここに＜」

2本だった魔力の紐を更にこまかく網目状にし、そこに布をかぶ

せるように水の膜みたいなものを作る。
「＞防御（ディフィーサ）＜」
イノシシもどきは浄化、火をはく鳥は水の盾で防御、これでいいですかね。

空間を戻してから白騎士（ホワイト・ナイト）さんたちがいる家にまた行き、水鏡（スー・エスペシオ）を見せながら守護魔法について説明しておいた。
「お前、前にも守護魔法はったことがあるのか？」
「前にも、ていうか……1年に3回ははってますね。」
「そんなに！？　お前帝国の使いじゃなかっただろ？」
「そうなんですけど。私が住んでいた村と、両隣の村に。騎士（ナイト）さんは
いなかったんですよ。小さいころは祖母がはってたんですけど、9歳のときから
私がはることになってたんです。」
だからもう5年ものですよ？　と冗談っぽく言ってみる。
「騎士（ナイト）がいないのか！？　どこの村だ？　騎士（ナイト）を向かわせるぞ？」
「いや、必要ないと思います。祖母に鍛えられた魔術（マーゴ）師の卵たちがいるので。
私がはった守護魔法も、かなりの強度なはずですから。
魔術（マーゴ）師って村ではそうやって守護魔法はるためにいるんじゃないですか？」
「俺は帝都育ちだからよくは知らんが……多分、違うぞ。
守護魔法は騎士（ナイト）がはるものなはずだ。

殿下、ティーナがいた村に調査隊を送るのがいいんじゃないですか？
ティーナが言うなら間違いなく、魔法が使える人がいるはずですよ？
しかも魔女（ストレーガ）に鍛えられたなら、かなりの実力かもしれません。」
「そうだな……検討しておこう。」

あれ？　何か話がずれているような。

この村の守護魔法がこんな風になっているのを見ると不安になってきた。
近くの村の守護魔法も弱まっているのではないだろうか？
もしかしたら守護魔法がしっかりとしてなかったから子どもさらいが起きたのかもしれないですね……。

殿下に相談して、リアンが＞エーヴ＜を連れて近隣の村を回ることになった。
殿下はこの任務の隊長だから、村を離れることができない。
私は一応、この任務は主に私がやることになっているので昼間でも村にいなければいけないらしい。（面倒くさいですよね……。）
リアンだったら私が魔力を送れるし、魔眼（ディアブロ・アイ）が使えるし、魔術師（マーゴ）だからその他の問題があっても大丈夫そうだからだ。＞エーヴ＜がいれば移動速度は上昇、私が＞エーヴ＜と「視界共有」も可能だから困ったことがあれば私も手伝えばいい。
いざとなったらリアンに向かって転移魔法を使えばいいかな、と思ったので。

「いいな、精霊。俺も契約したい……」

＞エーヴ＜と一緒に行くことになったときのリアンは喜んで、＞エーヴ＜を腕に止まらせて撫でたり、ぼーっと見ていたりした。

「おい、リアンが怪しいやつになってるぞ。大丈夫なのか？　あれで。」

殿下に言われたけど、まあ、いいんじゃないですか、と答えておいた。

＊8　任務（2）（後書き）

ＰＶが１０００人越えしました……！
見てくださっているかた、ありがとうございます。

＊9　任務（3）

「子どもさらい」の事件の任務についてから、5日間経ちました。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊9）

一言で言うと進展なし、ですね。

毎日夜は暗闇を通じて不審な人物や魔物がいないかを見張って、昼間には連れ去られた子どもの家に行って手がかりがないか探索したり、村に子どもたちに何か知らないかを聞いたり……色々としましたが、犯人につながるものが全くないんですよね。

夜に来るのは村長さんが言っていたイノシシとか火をはく鳥とかですし（守護魔法にかかる前に私が撃退しました）、子どもの家には魔法の痕跡がないし（「魔法が使われた」ことがわかっただけでした）、子どもたちは怖がっているし（一人ひとりに追跡の魔法をつけさせてもらいました）。

……逆に手がかりがないことが手がかり、というか。

もうかなりの魔力をもった人が関わっているとしか考えられないんですが、探索の範囲を広げても目立った魔力は感じられませんし。

や、任務ではない部分ではかなり役立っていると思いますよ？

私。

白騎士（ホワイト・ナイト）さんたちに訓練をつけたり、村の荒れていた畑をなおしたり、リアンが近隣の村に行って弱まっていた守護魔法をかけなおしたり。

……リアンに真剣な顔で「＞エーヴ＜みたいな精霊はどこに行ったら契約できるのか」と聞かれたので「魔眼（ディアブロ・アイ）が使えれば、森林に行けば精霊に会うことはできると思う」と答えたら、今までの倍くらい魔眼（ディアブロ・アイ）の練習をはじめてしまった。

契約できるかできないかはまた違う話だから言わないでおいたんだけど。

リアン、動物好きなのかな。

＞ノーテ＜（私が契約している闇の精霊の名前です。姿はブラッキーです。）を見せたら飛びついてくるかもしれない。

「殿下、この任務の『達成』は何ができたらですか？」

「この場合は『犯人を捕まえること』と『子どもたちの行方を追い、子どもたちを

連れ戻すこと』の2つじゃないか？」

「……つまり、2つが達成できるまで帝都には戻れない、と。」

「そうだな。」

昼間、感知・探索の魔法を村で何か変わっているものがないか確かめながら、殿下と会話する。

帝都自体に帰りたいわけではないのです。城にある本が読みたいんです。

バルドさんに教えてもらった「炎の構築式　――　ろうそくレベルから大砲レベルまで」とか、クルスさんの研究室で発見した「光の補助　上級編」とか！

おばあちゃんのところにあった本とは違うジャンルがあるんですよ！
魔装具（ディアブロ・コーシー）の新しいのも作りたいですし。

「……え？」

一瞬だけ、巨大な魔力が網に引っかかった。急いで探索範囲を魔力が引っかかったほうに大きく伸ばし、魔法の痕跡を探る。

「見つけました。……これは、精霊、ですね。契約はしていないようです。
ですが、具現化が可能なもののようです。契約はしていませんが、……人の気配を
感じます。人と精霊が一緒にいることは間違いないでしょう。
闇の精霊であることは確かです。＞ノーテ＜と同じ感じがしますから。
私の探索網に引っかかったことに気づいてすぐに引き返してしまったようです。
追跡は不可能ですが、魔法の痕跡から見るとこんなかんじですね。
今日、この村の子どもをさらいに来るでしょう。殿下、明日には帰れますよ？」
「魔法の痕跡だけでそこまでたどれるのか、お前は。」
「こんなもんじゃないんですか？」
「普通はお前が見つけた痕跡くらいだとたどれるのは精霊がいたことと人がいたかくらい
だぞ？　しかも、自信満々だな。」
「自信がある、というか……精霊にもレベルがありますから。元

のレベルが高いので
人から魔力を少しもらったくらいでも色々できるようですが、
＞ノーテ＜には
及ばないくらいのものです。それぐらいでしたら、大丈夫ですよ。」
「……まあ、いい。リアン、騎士（ナイト）たち全員に伝えろ、『子どもさらい』は
今日起きる。各自、入り口と子どもの家に1人ずつ配置につくように、てな。」
「わかりました。」

今村に残っている子どもは5人。誰が狙われるかはわからないのでとりあえず一番魔力が多い子の部屋で待機する。
精霊が狙うわけですから、魔力の多い順にさらっていくか、少ない順にさらっていくかだと思うんですね。……わからなんですけど。
ということで一番魔力が少ない子のところにはリアンに行ってもらう。
リアンに向かって転移するのが一番やりやすいからだ。
「いいか？　ティーナが精霊を感知した時点で黒騎士（ブラック・ナイト）と
ティーナは精霊を追え。白騎士（ホワイト・ナイト）は俺と他の子どもたちに異常がないか確認。リアンは魔眼（ディアブロ・アイ）で村の守護と警備をしろ。
他におかしいところがあったら騎士（ナイト）たちはティーナ、リアン、俺の
誰かに報告しろ。これ以上の被害はごめんだし、今日逃がしたら俺の面子にも関わる。
早く帝都に戻りたがっているやつがいるからな。最善をつくせ。」
「はっ。」

殿下が最後のほうは冗談っぽく言う。……そんなに帰りたがっているように見えました？

「俺の面子、て何ですか殿下。」

「別に気にするなよ、プレッシャーをかけただけだ。」

「誰に？　騎士（ナイト）さんたちにですか？」

「お前だよ。期待してるからな？　魔導師（マイブル）候補。」

さっさと終わらせるんだろ？

そういって殿下が私に微笑んだ。

……本当に私が金髪青目が好きなのを知っていてやっているのではないのだろうか？

知っているか聞いて墓穴をほりたくないので言いませんが。

きっと私の顔が赤くなっているに違いない。

悪魔の微笑みですよ、悪魔の。

「1時ですね。」

そろそろ現れるんじゃないだろうか？

＞ノーテ＜に手伝ってもらい、今感知範囲は最大にしてある。蟻1匹レベル、とは言えないけれど、ウサギ1匹レベルの大きさなら完全にどこに、どんな姿のものがいるのかはっきりとわかる。

不意に空間がゆがむのを感じた。

転移。
移動先は　――――　私のいる、この子どもの部屋。
予想大当たり、ですね。
睡眠魔法をかけてくるのがわかるが、相手の精霊のレベルは＞ノーテ＜よりも低い。
魔法の威力は魔力の量、自分の使える属性では耐性があるものだ。
私は自分がいる子どもの部屋を除いてすべての家の睡眠魔法をはらう。

私が見ている子どもは、言ってしまえば囮だ。追跡魔法をかけてあるし、危なくなったら防御魔法が発動するようにしてある。
黒騎士（ブラック・ナイト）さんたちに転移の魔法をかけるために魔力の糸をつなぎながら、子どものもとにくるであろう精霊に警戒する。（私は寝ているフリだ。起きていたら精霊逃げてしまうと思うので。）

――――――――――　来た！
精霊の姿を感知して確認する。
……これは、人、型。おんなの、ひと　……　？
なぜ、人のかたちをとっているのだろうか？
自分で？　それとも犯人に言われて？

子どもを抱えて精霊がどこかへ転移しようとした瞬間に精霊の魔術に私の転移の魔法をひっかけるようにして精霊についていくように「飛ぶ」。

飛んだ先は、たくさんの木が覆い茂り、花の甘い香りがするところだった。
ここは、森？　黒騎士（ブラック・ナイト）さんたちがまわりをきょろきょろと見回し

ていた。

「主がいた村から北東に15キロ、……精霊の加護がよく感じられる。

さっきの精霊の加護かと。」

「ありがとう。1人村に戻すから殿下たちに報告を。1人はここで待機。

2人ついてきてください。」

15キロ先か。さすがに私の探索の魔法はそこまでの広さがないから、この魔力を感じることができなかったわけですか。

うなずくのを確認してから1人を村に送り、ついて来る2人に念のため睡眠魔法がかからないようにする。

ここに着いてから巨大な魔力を感じる。精霊も一緒にいるみたいだ。（巨大、といっても一般人に比べると巨大、という意味だ。この量だと魔術師（マーゴ）の魔力の平均の量くらいはあるだろう。）

それに、複数の人の気配。さらわれていった子どもたちだろうか？

魔力を感じるほうに歩いていくと家（普通の家よりは小さい。小屋以上家未満、て大きさだ）があった。

黒騎士（ブラック・ナイト）さんたちには家の前で待っていてもらう。

私は「壁抜け」をして家の中に入った。（空間魔法と土魔法と闇魔法の応用だ。）

私が入った部屋にはだれもいない。

子どもにかけた追跡の魔法をたどると、同じ1階の部屋にいることがわかった。その部屋に感じる人数は　――――　全部で、7人。正解、ですかね。

今日さらわれていった子どもより、みんな魔力が多い。どうやら、

魔力の量が多い子からさらっていったみたいだ。精霊の加護が感じられるこの森にずっといることを考えると、魔力がすくないと体に影響があるからかもしれない。

言われている任務は殿下曰く、「犯人を捕まえること」と「子どもたちの行方を追い、子どもたちを連れ戻すこと」の2つだ。

後者をやってしまおう。犯人だと思われる魔力と、精霊には2階の1室から動く気配がない。

子どもたちを私が今いる部屋に移動させる。

怪我は、なし。夜だからか、ずっと眠らされているのかわからないが、みんな寝ている。先月さらわれてきた子どももいるはずだが、病気も、栄養失調でもなさそうだ。

……一体何が目的で連れ去ってきたのかさっぱりわからない。

健康状態が悪いわけでもないし、犯人が単独犯なこともわかった。魔法陣が書いてある部屋があるわけでもないから、悪魔を呼び出すための生贄、という可能性もないだろう。

「＞ノーテ＜」

「はい。」

「＞彼の者達に　闇の守護を＜」

子どもたちには申し訳ないが、鳥かごみたいなかたちをしたものを作り、子どもたちを全員いれて、闇の防御魔法をはっておく。これでもし建物が倒壊したとしても、危険はないだろう。

子どもたちがいる部屋（私が侵入してきた部屋）のドアの鍵をかけて2階へ向かう。

精霊がこんな近くにいる私に気づかないなんてことはないだろう。

入ってきたときに攻撃がなかったから、犯人のところまで来ても

いいよ、ということだと思う。……罠かもしれませんが。魔力の量からしても、精霊のレベルからしても、負けることはないだろうと思う。

家の中を「視」ながら進む。

この森に入ってから精霊の加護がかなり濃いと感じでいましたが……この家、特に2階の今犯人と精霊がいる部屋に向かうにつれて更に濃くなってきていますね。

精霊がここにいるのも4、5年なんてものではないだろう。

もっと長く……15、いや20年はここにいるのではないだろうか？

よし。逃げる気配がないから部屋を探らせてもらいましょう。

2階に部屋は2室。2階の犯人と精霊がいる部屋ではないほうの部屋のドアをあける。

そこにあったのは、2つの棺だった。

……

余談だが、私は幽霊がこわい。転生前でも、今でも。というか今のほうが幽霊がいそうで私は闇使いでもあるので見えそうでこわい。

何もいませんように、と思いながら部屋に入って棺を見る。開けてゾンビが出てきましたー、とかだと私がショック死してしまう。開けない。

……ん？　棺に何か書いてある？

じっくり見ると文字が書いてあった。……精霊語だな。隣の部屋にいる精霊が書いたのでしょうか？

二人が、愛、する、…あらん、ことを、共に

「愛する二人が共にあらんことを祈り、ここに記す」

……

棺、か。

おばあ、ちゃん。火葬にしたけれど、それで良かったのだろうか？

……まだ、1ヶ月もたってないのか。色々あったからなぁ。

「主、大丈夫か？」

「あ、ごめんね。行こう。」

いけないな、任務中でした。

部屋を出、隣の部屋に向かう。

よし、任務を終わらせます。行きますよ！

ドアを開けると、そこにいたのは、2人。

まるで、子どもを見守る母のように精霊が寝ている子どもの隣に座っていた。

＊9　任務（3）（後書き）

表現が下手ですみません……。
わかりにくいところが多々あると思います。
「任務」もあと1話で終わる（予定）です！

＊１０　任務（４）

子どもをさらい、家にとどまらせる。
２つの、棺。書いてあった言葉。
子を見守る、母のようにある姿。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊１０）

「……こんばんは、闇の精霊さん。その子は契約、してないですよね？」
「ムゲンの魔力を持つ子よ。確かに、ワタクシはこの子と契約していません。
ですが、この子を傷つけるようでしたら、ワタクシはあなたを敵と見なしましょう。」
「敵わないと、わかっていても？」
「この子の両親の願いです。」

犯人は、子ども？　どうすればいいですかね。

精霊は話しを聞いてくれるかんじではない。

うーん。手ごわいですね。子どもを起こすのが一番いいでしょうか？

眠っている子どもに向けて魔力の糸をのばし、子どもの魔力と接触する。

お、反応しました？

「この子にナニをしましたか？」

「安心してください。危害は加えていませんから。」

今にも攻撃してやる！　ていう顔でこっちを見ないでくださいよ。＞ノーテ＜が攻撃を仕掛けたら、その子にも被害が及びますよ？

「……おねえちゃん、だあれ？」

「私はティーナ。あなたに用があってきたの。起こしちゃってごめんね？」

「エメ、おねえちゃん見るの初めて！　おねえちゃんの隣にいるの、精霊さん？

モデロが連れてきてくれたの？」

エメちゃん、はネービーブルーの髪に、黒い、目。この魔力からして純粋な闇使いだろう。そして、今の言葉。５歳で魔眼（ディアブロ・アイ）は使えないだろうから、精霊が見えるのは先天的なもの？

「＞モデロ＜？　この精霊は＞モデロ＜、て名前なのかしら？」

「うん。エメの、お姉さん！　美人でしょ！」

確かに具現している姿は美人だけど……警戒心ばりばりで目つきが悪いですね。

「エメ様、この人はワタクシが連れてきたわけではありません。
新しい友達、下に連れてきましたよ？」
「そうなのー？　おねえちゃん、すぐ帰っちゃう？
お父さんとお母さんね、いなくなっちゃったの。
それで、泣いてたらモデロがお友達連れてきてくれたの。
お家に呼んだ子、みんなエメがモデロと話してるとエメのこと気味悪そうにみるの。
モデロが見えてないみたいなの。だから、エメはモデロが見えますように、って
お願いしたの。おねえちゃん、モデロのこと見えるよね？」

子どもさらい、そういう理由でしたか。
２つの棺と、今の話。両親がなくなっているのですね。

「うん。見えるから、安心して？　……＞ノーテ＜、この子と部屋の外に。」
「御意。」
「エメちゃん、ちょっとお部屋の外で待っててくれる？
私、＞モデロ＜さんとお話があるから。」
「うん！　ノーテ、ていうの？　うさぎさん、かな？」

＞ノーテ＜が近くにいればエメちゃんは大丈夫だろう。闇使いだから触ることもできるし。
エメちゃんが＞ノーテ＜の近くにいるわけだから、話を聞いてくれないかな？

「さて、＞モデロ＜さん。私は帝国からの任務を受けてここに来ています。
ここでやるべきことは２つ。『犯人の確保』と『子どもの保護』。

それでですね……」
「エメ様に、危害を加えさせはしません！　それが今亡き主との約束！」
「っわ、」
＞モデロ＜の魔力が膨れ上がる。待ってくださいよ、私、話している途中でしたから。危害を加えるなんて一言も言ってないですよ。
「ムゲンの魔力を持つ子よ、ワタクシはアナタには敵いません。
しかし、一時拘束するコトでしたら、何とかカノウでしょう。」
「ちょ、待ってくださいよ。」

どんっ

＞モデロ＜が私を拘束しようとして闇の手を伸ばしてきたのがわかったので思わず防御壁を作って弾き飛ばしてしまった。
「この量のマリョクではアナタを倒すことはできませんか……
もっと、チカラを！」
え、私を「拘束する」ことから「倒す」ことに変わってませんか？
この森は＞モデロ＜の加護によって半分くらい成り立っている。その力を無理やり取り込もうとしている。
まずいですね、このままだと＞モデロ＜は無理に魔力を取り込もうとしていますから、失敗して魔物化する可能性が高いですね。……私のせいだろうか？

「おねえちゃん！　モデロ、どうしたの？　おかしいよ！」
「！　エメちゃん」

ちゃんと部屋の外で見張っててくださいよ、と＞ノーレ＜に言うと、一瞬魔力が押し負けたのだ、とかえってきた。

「モデロ！　モデロ！　どうしたの？　聞こえる？？」

……守ろうとした対象の声も聞こえていないみたいだ。＞モデロ＜は精霊。魔物化するとしたら、かなりのレベルの魔物になってしまうだろう。

「エメ、＞モデロ＜を、元に戻したいですか？」
「うん。　ちゃんとお話したいよ！」
「そうですか。では、私が今から言う言葉を後に続いていってください。
＞ノーテ＜、＞モデロ＜の力の取り込みを妨害していて。」
「御意。」

一番手っ取り早い方法をとらせてもらいましょう。精霊と人との契約だ。契約をすれば、主の命令で魔力の量は変えられるし、主とのつながりによって自我を取り戻すだろう。
私がしてもいいのだが、私がエメにやらせようと思ったのはエメの魔力の量が理由だ。＞ノーテ＜を一瞬でも上回ったならかなりのものだ。一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）になる素質は十分ある。幼いうちにコントロールを身に着けるのは難しいだろう。だったら魔力の一定量を精霊に預けていたほうがいい。
そして、精霊が見える目がある。精霊のことは精霊に教えてもらうことが一番だから、精霊との契約を結んでおいたほうがエメにとってはいいでしょう。

＞我の力　尽きるまで　汝に　与え続けることを＜
「＞われの力　つきるまで　汝に　あたえつづけることを＜」
＞汝の力　我の　刃となり　盾となりて　具現することを＜
「＞汝のちから　われの　やいばとなり　たてとなりて　ぐげんすることを＜」

悪くないですね。私はエメの片手を握ってエメの魔力を＞モデロ＜に向ける。
これで、最後です。

＞ここに　誓い　契約す＜
「＞ここに　ちかい　契約す＜」

「＞ノーテ＜、どいていいよ」

エメの片手で契約の魔法陣を描いて＞モデロ＜に飛ばした。
＞モデロ＜は力の取り込みをやめた瞬間、女の人だった姿から、黒いウサギの形になった。

エメは知らないが、精霊との契約の中で一番強く、重い契約をさせてもらった。
この契約は主の魔力がなくなるまで消えることはない。魔力がなくなるまでということはほぼ死ぬまで、と同等だ。本来は精霊の同意もなければいけないのだが、何しろ魔物化していて自我がほぼなかったので同意がなくても契約ができた。

「モデロ！　大丈夫？　怪我してない？」
「エメ、様、……いえ、主……？」

「あるじ？　お母さんのこと？」

＞モデロ＜の前の契約主は、エメの母親ですか。だからエメが生きている年数よりも長く、精霊の加護がここにあるんですね。

「エメ様の母様に約束、したのです。母様がもう、エメ様と一緒にいられないから

ワタクシがお傍にいることを、願われたのです。」

「エメ、モデロがいるからもうさびしくないよ？　泣いちゃってごめんね。

ほら！　おねえちゃんが手伝ってくれたし、エメはげんき！」

そこにあったのは、母親の愛情だったのだ。

子どもを1人にしたくない、さびしい思いをさせたくない、「契約」ではなく「約束」だったでしょう。それを＞モデロ＜が受け入れ、今までエメを守っていたんですね。

エメが＞モデロ＜のことを気にかけていたから魔力を＞モデロ＜にあげる形となったのではないでしょうか。

母親、ですか。私をおばあさまのところへおいていったのは何故だったのでしょう。

私を育てるのが嫌になったのか？　私が異質だったから？

……今更そんなこと考えても、母が私をおいていった理由なんて、わからないのに。

「ティーナ様、でしたか？　無礼を働きました。申し訳ございません。」

「それはおいておきましょう。エメとあなたには一緒に帝都に来てもらうことになると
思います。他の子どもたちは村に返しましょう。」
「わかりました。ワタクシは主とともにありましょう。」

私に向けて攻撃しようとしたことは気にしないでおきましょう。怪我１つしたわけではないですし。
それよりも、やっと言おうと思っていたことが言えましたよ。
朝にならないうちに村に行きましょうか。
＞モデロ＜が使っていた村に行く転移の魔法の痕跡が残っていたので、それを利用して全員一緒に転移することにしよう。

村に戻ると騎士（ナイト）の皆さんが出迎えてくれた。
……さすがに１０人以上の転移は疲れました。

「殿下、すみません。さすがに疲れました。後任せて部屋戻ってもいいですか？」
「……顔色、わるいぞ。無理すんなよ。」

殿下が何か言いたそうに口を開いたけど何も言わず、私の頭を撫でて子どもたちのほうに歩いていった。
……顔にでるほど疲れがたまっていたのだろうか？

部屋に行こうと歩いていると、リアンが立っていた。

「リアン、どうしたの？」
「どうした、て聞くのはこっちの方だ。」
「？　任務のこと？　それはあし「じゃなくて。」

任務の報告なら明日するよ、と言おうとしたら途中で言葉をさえぎられ、リアンに手を引かれてリアンの部屋の中に入ってしまう。

リアンさん、ここ、あなたの部屋ですけど。

部屋の中に入って何するんですか、と聞こうと思ったらリアンが真剣な表情で私のほうを見ていたので黙っておく。

「泣きそうな顔してるぞ？　何かあったのか？」

「何もないよ、だいじょ「大丈夫、ていう顔じゃない。」

私が大丈夫、といったら大丈夫なんです。気にしないでください。

……そうしないと、今日は色々思い出して泣いちゃいそうですから。

「泣きたいなら泣け。そんな顔でいるなよ。」

リアンが私を抱きしめる。

「見てほしくないから、見ないから。

泣かないようにするくらいなら、今ここで泣いちゃえよ。」

……

「精霊と、あの子がいたところで何かあったんだろ？

聞かないから。言わなくてもいいからさ。」

リアンが優しく、私に話しかけてくる。

やさしく、しないでほしい。

涙が出てくるじゃないか。
今まで考えないようにしてきたことを、考えてしまう。

「……っふ、……ごめ、」
「いいから。」

おばあちゃん、私、がんばってますから。
おばあちゃんがいなくても、あなたのように、みんなの、支えになるように。

父さん、母さん、私をおいて何処かへ行ったのは、何故？
父さん、母さん、……どこに、行ったんですか？

◆　◆　◆　◆　◆

「おねえちゃーん！　あれ、何？」
「どれですか？……あれは風の妖精ですね。声をかけると風で挨拶してくれると思いますよ？」
「ほんとに？　こんにちはー！」

風がエメのところに吹く。風に吹かれてエメの髪の毛がぼさぼさになった。
エメは帝都で魔力のコントロールと魔術の勉強をすることになった。闇使いは魔術師（マーゴ）にあまりいなく、しかも精霊が見えるので、試験が受けられるくらいになったら魔術師（マーゴ）になるのだと思う。

アレベルティーナ・ギラルディーニ、完全復活です！

昨日（というか今日の朝、だったのでしょうか）のことがあってリアンの顔がまともに見れない。恥ずかしすぎます。目があうと顔、赤くなります。

だって！　リアンに抱きしめられる時点でいつもなら魔法で吹き飛ばすのに！　いや、まあ、色々、あったからですけど、そのまま泣いてしまうとは！！　仮にも（精神）年齢は年上なのに……しかも朝起きたらちゃんと自分のベットでしたし……運んでくれたんだろうけど……重力操作とかしておけばよかった……。

「ティーナ」

「な、何？」

悶々と考えていたらリアンに声をかけられた。けど、顔は見れない。無理です。返事だけ。

「重くなかったから、安心しろよ。」

「……」

重くない＝軽い、なんでしょうか！？　いや、違う気がするような……でも、「不味くない＝旨い」と同じように？　だけど、私自分で軽いと思える体重じゃないことは分かってるので……あ、「見た目よりは重くない」的な？

「……殿下？　何でわらってるんですか？」

「いや？　天下の魔導師（マイプル）候補でも悩み事があるんだなぁ、と。」

「私、人ですから！　悩み事の１つや２つ、ありますよ。」

「そうですよ、バルタザール殿下。悩み事の１つにきっと親父の扱いが

入っていると思います。」

「そうですよ！　バルドさん実験実験、て姿を見かけるとおいかけ……ではなくて、

リアンも私のことからかってるんですか？」

こうして、私の一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）としての初任務は成功と恥ずかしさを残して終わったのでした。（成功だけ残すつもりだったんですが……）

……こんな任務がずっと続くようだったら帝国の使いって相当大変ですよね。

＊１０　任務（４）（後書き）

表現力のなさが悲しくなる今日この頃です。
わかりにくくてすみません。

閑話　＊3　深緋色

深緋色の目を持つ魔術師の場合。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊＊３）

「火使い」の当主の息子、１属性（シングル）使いの魔術（マーゴ）師。

俺に関して言われることはこれだけだった。兄は魔法を使えないが、槍の使い手。騎士（ナイト）として帝国に仕えている。（騎士（ナイト）は剣じゃないか？　……俺にはよくわからない。）姉は所謂「天才」。新しい魔術の構築式の理論を立てて、その構築式は親父（バルドメロ）の新術の材料となっている。

俺は別に１属性（シングル）使いという肩書きに不満があったわけではない。インフォンティーノは１属性（シングル）使いだからこそ、純粋に火の魔術を極められることが多い。

兄弟の中でインフォンティーノの姓を継いだのは俺だけだから、魔術（マーゴ）師としてレベルが上がるように親父の下で勉強していた。

ティーナは不思議な少女だった。

魔導師の試し(マイブル・プルーバ)の後、親父に（無理やり）連れてこられた少女。
親父のオリジナルの術を一回見ただけで理解し、その弱点をついて親父に勝った。

魔眼(ディアブロ・アイ)を体験できるとは思わなかった。身に付けてみたいとは思っていたが、彼女を介してできるとは……。
彼女に他意はないだろうが、俺の手を握ったまま考え事を始められるのは落ち着かない。自分が顔にでないタイプでよかったと思った。
（後でこれは俺とティーナの相性のよさについてティーナが考えていたということがわかった。）

それにも驚いたが、本当に驚いたのは彼女が陛下への謁見をするということで部屋を出て行こうとしたそのときにいった言葉。

「訂正したほうがいいね。リアン、風(ダブル)も使えると思うよ。今度試してみて。」

実際この後、ティーナに教えてもらって初歩的な風魔法を使ったら発動できた。インフォンティーノ＝火使いだから風を使おうと思ったことがなかった。

◆　◆　◆　◆　◆

2属(ダブル)性使いということから二級魔術師(マーゴ・デ・シグナディオ)になった。それから1週間もしないうちに「バルタザール殿下直属、ティーナの同僚（ティーナの部下だったはずだが、ティーナが部下じゃなくて仲間がほしい！と抗議したらしい。）」というポジションになった。

どうやら、仕事をするときに相性がいい俺が一番よかったらしい。親父の研究室にずっといるというのもどうかと思っていたのでまあいいか。

「いいか？　あいつ（ティーナ）は自分が気になることがあるととことん熱中するタイプだ。

仕事に１０分遅れる、なんてもんじゃないことはこの前（ティーナの一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）２日目）のことでお前も十分わかってるだろうが、あいつの行動には気をつけておけ。」

という殿下からのお言葉（めいれい）があった。

……その後に殿下一人でティーナにいかに振り回されたかを話された。

そういう常識はずれなところを除けば、ティーナはすごい。１４だというのに魔導師（マイブル）候補なだけある。ほぼすべての魔術を無詠唱（ノン・カント）、本人曰く「危ないもの」（普通の魔術師（マーゴ）だったら４人がかりの長詠唱（ルンゴ・カント）でやっとというもの）を短詠唱（ブリーブ・カント）でぱっとやってしまう。

彼女が俺に風の魔法を教えてくれるのだが、正直、自分でもこんなに早く上達するとは思わなかったほどだ。……火の魔法も教えてもらうべきだろうか。（年上のプライド？　魔導師（マイブル）候補相手にそんなものは無駄だということが初日にわかっている。わからないものは聞けばすぐ教えてくれるしな。）

◆　◆　◆　◆　◆

バルタザール殿下の下についてからはじめての任務。

魔装具（ディアブロ・コーシー）を２つ作りました、というかんじで作れるって本当にわからない。下級魔術（ポルニゴ・ステゴネリア）とは言えど、２つも魔術が入っているし。……俺が使える属性じゃないから、あとで使ってみよう。どんなかんじなのだろうか。

殿下が魔力は大丈夫か、とティーナに聞いたらかえってきた答え。底なし、って。魔女（ストレーガ）に言われるなら間違えなく底なしなんだろう。俺が自分の魔力ではなくティーナの魔力を使っても気づかないに違いない。

ティーナが魔物の気配を感じたというのでティーナの戦っているところを黒騎士（ブラック・ナイト）にも見せるつもりで馬車を止めた。

一応助けに入ることも考えて、遠距離でも使える魔法を考えていた。

正面からイノシシみたいな魔物が３匹、上から鳥みたいなのが２匹、左右から狼みたいなのが４匹。

まず狼を右手で氷の刃を４つ作ってまっぷたつ。

左手でイノシシに向かって土の壁を出す。

そして上から突っ込んできた鳥の攻撃を避け、今度は火の槍を作って鳥に向かって投げる。

イノシシに向かって作り出した土の壁だったものを変形させて土の檻に変える。

水の剣を作ってイノシシをきる。

……

ティーナ、口、動いてないよな？　全部無詠唱（ノン・カント）だったよな？

（戦う前に何か言ってたみたいだけど、こっちまでは聞こえなかったし。）
ていうか一気にいろんな属性、使いすぎだろ。……全属性使いだから、日常茶飯事か？　「援護」とかティーナには無縁の言葉だな。
1分も戦っていないだろう。
ティーナが強すぎるのか、魔物が弱すぎるのか……。
「リアン、俺は魔物が今度襲ってきても馬車を止めるだけ無駄な気がしてきた。
大丈夫、というか余裕だよな？　あいつだと。」
「余裕でしょう。俺もそう思います。」
馬車が走り出してから武器を使えたか聞くと、祖母に対抗するために一通り使えるようにしました、という答えが返ってきた。……一体どういう意味だ？
「剣使えるんだな？　じゃあ帝都に帰ったらお前、俺の相手な。」
「げっ、殿下の相手ですか？　……手加減は？」
「なしだ！　ていうかさっきのを見た限りだとお前のほうが強い可能性もある！」
「……冗談ですよね？　リアン、あなたがぜひ、かわりに！」
「俺、剣使えないからな……ちょっとは練習すべきでしょうか？」
「やっておいて損はないだろう。魔法当てるのとかに役立たないのか？」
確かにさっきティーナがやっていた火の槍を投げるときにコントロールが必要かもしれないな。いや、その前にあの術は＞火の槍＜の無詠唱で発動するものなのか？
色々考えていたときティーナからかえってきた答えは、……ティ

ーナらしい答えだった。

「私の場合だと風で補正とかしちゃうので……あ、そうか。むしろリアン、

風補正の練習する？　風使いでもあるからさ。」

「そんなことしてたのか。風補正なんて聞いたことな……全属性（オールユーザー）使いだもんな。

できないことはないよな。あぁ、じゃあ帝都に帰ってからやるか。」

風で補正するのか？　どうやって？

考えたこともない。ティーナとの会話は常に新しいことの発見な気がする。

「じゃあ殿下とリアンでペア組んだらどうです？　殿下は近距離、リアンは

長距離ですから、それで慣れればいい線いくと思いませんか？」

「お前1人で大丈夫なのか？」

「はい。伊達に7歳のころから祖母に言われて山賊狩りしてませんよ！」

正直、ちょっと引いた。山賊狩りって……。

必要に迫られてですよ。と付け加えられたが、……さすが魔導師（マイブル）候補、というべきか？

それから襲ってきた（といっても近くに来る前にティーナが撃退してしまうので実際よくはわからない）魔物は時々ティーナが外に出て倒すことになった。

精霊は感動ものだった。親父も精霊は従えていない。初めて見た。

「＞エーヴ＜」

「なんでしょう？　風向き変えます？」

「や、そうじゃなくてね。こっちの方々に挨拶してくれる？」

「ハイ。わかりました。はじめまして、ワタシ風の眷属でアルベルティーナ様と契約を

結んでおります、＞エーヴ＜と申します。」

「これ、は鳥、の形をとってるな。風の精霊はみんな鳥の形をしているものなのか？」

「イエ、ワタシたち精霊はもとは＞姿なき者（ズィ・イノセンテ）＜。我が主の魔力と、イメージによって

この形となりました。」

触ってもいいか、と聞いたらティーナは許可してくれて、＞エーヴ＜は俺の腕に止まった。

本物の鳥みたいだ……！

ティーナはすごい。本当に、すごい。

村について早速（任務ではないが）仕事。

……守護魔法、て騎士（ナイト）の分野だから魔術師（マーゴ）は勉強しないのだが。

しかも、普段は3、4人でやるところじゃないか？　騎士（ナイト）がはる守護魔法より高度で2属性付加？

ティーナが他の村も心配していたので俺と＞エーヴ＜とで近隣の村の守護魔法を確認しに行くことになった。さすが精霊だ。俺が普段歩くよりも何倍の速度で移動できるし、しかも風の魔法についても教えてくれた。

ティーナに真剣にどうしたら契約できるか、と聞いたらまず魔眼（ディアブロ・アイ）

ができないと、と言われた。俺も精霊と契約したい。がんばろう。

◆　◆　◆　◆　◆

任務は実際「子どもさらい」が起きたらあっさりと解決するものだった。ティーナの活躍によってだが。

黒騎士（ブラック・ナイト）は来なくてもよかったんじゃないか？　まあこれでティーナの万能さが騎士（ナイト）のほうにも伝わるだろう。

「犯人」だった子ども＋精霊＋今までさらわれていた子どもを連れて帰ってきたティーナだが、何か様子がおかしい。疲れてる、だけじゃないようだ。何かを我慢しているような。

そのまま部屋に戻ろうとするティーナをとめて、俺の部屋に入れる。

「泣きそうな顔してるぞ？　何かあったのか？」

「何もないよ、だいじょ「大丈夫、ていう顔じゃない。」

ティーナは俺が口をはさむと、黙ってうつむいてしまう。

「泣きたいなら泣け。そんな顔でいるなよ。」

ティーナを抱きしめる。

そんな1人で抱え込む必要はないのに。

「見てほしくないから、見ないから。

泣かないようにするくらいなら、今ここで泣いちゃえよ。」

俺に抱きしめられたティーナはそのまま抵抗しない。
「精霊と、あの子がいたところで何かあったんだろ？
聞かないから。言わなくてもいいからさ。」
できるだけ優しく声をかける。
両親については聞いていないが、もう身内がいないんだろ？　甘える相手がいないんだろ？
1人でがんばって、1人で抱えこむ必要はないから。
「……っふ、……ごめ、」
「いいから。」
ティーナはしばらく、声を押し殺すように泣いていた。
俺はただ、抱きしめているだけ。
ティーナは確かに俺なんかより、はるかに強い。
だけどまだ14歳で、身内をなくしたばかりの、女の子だ。
強いけどどこか脆い。
誰かを頼ればいいのに。
任務の疲れもあっただろう、しばらくするとティーナはそのまま寝てしまった。
俺の部屋、ていうと駄目な気がする。流石に。
ティーナの部屋に運ぼうと抱き上げて部屋の外にでると、殿下が立っていた。
「……泣いてたか？」
「はい。まあ、やっと、と言いますか……」
「そうか。魔導師候補（マイブル）といってもまだ『候補』。完璧が望まれているわけではない。

それに14歳の子ども、だ。もっと周りに甘えればいいのにな。
」
頼んだぞ、と行って殿下は部屋に入っていった。
殿下も帰ってきた彼女の様子がおかしかったことに気づいていたんだろう。
ティーナをベットに寝かせて部屋を出る。起きたら、元に戻ってるといいのだが。

◆　◆　◆　◆　◆

帰りの馬車の中。ティーナは朝から俺と目があうと顔を赤くして目をそらす。
……そうやっていると普通の女の子、てかんじでかわいいんだけどな。普段が魔術師（マーゴ）としてのレベルからか、あまりそういう風には見えない。
「ティーナ」
「な、何？」
こっちを見ないままティーナが返事をする。
「重くなかったから、安心しろよ。」
「……」
ん？　何か更に悩んでる？
俺が首をかしげていると、殿下が隣で笑っていた。

「……殿下？　何でわらってるんですか？」
「いや？　天下の魔導師候補でも悩み事があるんだなぁ、と。」
「私、人ですから！　悩み事の１つや２つ、ありますよ。」
「そうですよ、バルタザール殿下。悩み事の１つにきっと親父の扱いが
入っていると思います。」
「そうですよ！　バルドさん実験実験、て姿を見かけるとおいかけ……ではなくて、
リアンも私のことからかってるんですか？」

俺は君の仲間なんだろう？
君は強いから、俺に何も求めていないかもしれないが、俺にできることは何でもやることにしよう。

閑話　＊3　深緋色（後書き）

……甘くなんてできません。すみません。
「恋愛要素、ほぼなし」なのでこれで。

お気に入り登録件数が５０件を越えていました。
ありがとうございます。

＊11　訓練と……（前書き）

毎日更新、といいながら間があいてしまってすみません。

＊11　訓練と……

「よし、修行だ！　ティーナ、剣の稽古付き合えよ。」

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊１１）

「子どもさらい」事件から、数日。
あれから、事件報告を書き、エメの待遇を考え、エメの部屋を用意し、……ｅｔｃ、ｅｔｃ。
エメはクルスさんにお世話になりながら魔術師（マーゴ）としての勉強をすることになりました。

一段落つきました。……と思って、「今日の仕事が終わったらバルドさんから『炎の構築式　――　ろうそくレベルから大砲レベルまで』を借りて読もうかな」と考えながら、執務室（といっても殿下の仕事部屋なんですけど）を開けたら、殿下から冒頭の一言。

「殿下、冗談はいいですから、今日の書類はどれですか？」
「冗談じゃない！　今日は……やることがあってな。
書類を処理することはしなくていいから。　で、その『やること』までは
まだ時間がある。せっかくだから、お前の剣の腕前を見ようと思う。」

「……その、『やること』って何ですか？」
「まあ、それについてはまたあとで。おい、リアン、お前も行くぞ。」
色々とつっこみたいことがありますが、質問は受け付けない、てかんじですか？
今まで部屋の端のほうでこちらの会話をスルーしていたリアンがぎょっとしてこっちを見た。自分も行くとは思っていなかったらしい。
「……バルタザール殿下。俺、剣使えないのですが。」
「これからやらなきゃいけない時がくるかもしれないだろ！
形だけでもいいから、やっとけ。上司命令。ティーナも。」
「「……はい。」」

白騎士（ホワイト・ナイト）の訓練所。
殿下が「場所を貸してくれないか？」といったら、2人が剣を交えるのには十分すぎるほどの場所を開けてくれた。……殿下だから？　それとも後ろにいたのが私だからだろうか？　それともただの好意であけてくれたのでしょうか？
……2番目ではないことを祈ろう。そうだったらへこみます。
「よし、剣は持ったな！　リアン、取り合えず見とけ。
魔法はなしだぞ？　使われたら俺じゃ相手にならないからな。
ティーナ、準備はいいか？」
「よくないです。全く準備できてません。ていうか殿下とやりあうなんて無理です。
殿下が怪我されたらやばいじゃないですか。」

「お前治癒術師（ヒーラー）でもあるんだろ？
俺が怪我したらお前が治せよ。」
「いや、……わかりました。どうぞ。」
殿下は私が何て言っても剣の稽古に付き合わせる気だろう。
しょうがないから剣をかまえる。
殿下は一息ついてから、私に攻撃を仕掛けてきた。
結構鋭い攻撃ですね。さすが壮騎士（ニーバル・ナイト）様、てかんじです。
任務で行ったところで稽古をつけた白騎士（ホワイト・ナイト）の皆さんよりも上手いです。
殿下の攻撃を分析しながら攻撃を右に、左に、下に、後ろに、と受け流したり避けたり。
殿下が怪我をされないように終わらせるには、私が殿下の剣を取るのが1番いいんじゃないでしょうかね？
カンッ
殿下の動きを見て剣を弾き飛ばした。
「……お前、手加減しただろ？　攻撃しかけてこいよ。」
「手加減なんてしてないですよ。私が『剣を扱う』と言うことに関して
1番得意なのは、『攻撃』じゃなくて『防御』なんです。
私、攻撃すごく下手です。祖母相手に攻撃なんて仕掛けられませんでしたから。」
「そうか。……そうだったな。」
殿下がなぜか同情するような目でこっちを見てきた。……祖母の

ことですか？いや、彼女はやばいですよ。祖母の修行についていくためにはまず防御を完璧としないといけませんでしたから。

「武器全般一通り使えるんだっけ？　じゃあ、次。
リアンはまず剣の持ち方から怪しい。そこらへんの騎士（ナイト）捕まえて稽古つけてもらえ。」
「は、はい。」

私は殿下に「次は弓、かな。」とか言われながらひっぱられていく。
魔術師（マーゴ）は運動が必要とされている職業ではないから、間違えなくリアンは明日筋肉痛だろう。
私は心の中でリアンに合掌しておいた。

「まず魔法なしで１回。」
「はい。」

的を狙って放つ。真ん中。弓をやったのは久しぶりですが、上手くいきましたね。

「……お前、補正なしでもそれかよ？いや、まあいい。次は魔法で補正してみろよ。」

あれと、あれ、それと、さっきのやつ。と言っていったのは私が当てた的より２０Ｍくらい奥でちょっと左右にある的。１，２，３。よし。全本命中。

「……魔導師（マイブル）になるまで騎士（ナイト）でもよかったよな？お前。」

そう見えますか？

その後は、槍とか、ナイフとか、武器を一通りやらされて、その後ヘトヘトになったリアンを後衛にして殿下が前衛になって訓練しまして……いや、やってみますか？　とは言いましたけど、色々やったあとっていうのは疲れますよ。

２時間くらいでしたかね。気がついたら観客がまわりにたくさんいました。最近人に見られるのも慣れてきましたよ。慣れようと思っていたわけではないんですけど。

「そろそろだな。２人とも、行くぞ。姉上が会いたいそうだ。」

「……聞いてないんですけど。」

「言ってないからな。今日の『やること』はそれ。姉上に会うこと。」

確かに会ってみたいとは思っていましたけど……！　何で皇帝家の人たちに会う時って疲れているときなんでしょう？　嫌がらせですか？

「ティーナは姉上について……俺は説明してないが、他の誰かから聞いたか？」

「いえ。殿下にお姉さまがいらっしゃることも今はじめて聞きました。

妹さんもいらっしゃるんですよね？……何人兄弟ですか？」

「５人だ。兄が２人、姉が１人、妹が１人。つまり、俺は４番目の子どもってこと。」

そうだったんですか。ザール殿下は１７歳でしたっけ？

頭の中に皇帝家について記憶しながら殿下のはなしを聞く。

「長兄　――――　オビディオ・ルツ・ロジオン。

俺より8つ上だな。俺の兄弟は長兄と妹で12離れてる。
長兄は父上が帝位を退くまで父上に何かあったときは皇帝となることが
義務付けられている。長兄は体がそんなに強くなくて武道には向かないが、
政治の関係の仕事には頭がまわるからな。父上が頼りにしている。
次兄　――――　ブノア・レク・ロジオン。
長兄と年子だ。何でかは知らないが、長兄と仲が悪い。
皇帝家はあまり魔力が多くない。次兄が一番魔力があって、多少だったら
魔術も可能だ。……一番腹黒い。
長女　――――　レオーヌ・ドイ・ロジオン。
今年成人を迎えるから、20歳だな。
姉上は『魔法に関わるもの』……魔眼（ディアブロ・アイ）とか魔装具（ディアブロ・コーシー）とかの
研究が好きで留学してる。今は休みだから久しぶりに帰ってきたそうだ。
それで俺、バルタザール・デオ・ロジオン。
で、妹　――――　パメレシア・オザ・ロジオン。
今13歳。パメラって呼んでんだけど、パメラは弓使いだ。
来年あたりに騎士（ナイト）の入隊試験を受けて多分騎士（ナイト）になるな。」

カタカナが多すぎます……！すみません、殿下の兄弟一気に覚えられません。今から会うっていうレオーヌ様のことだけしっかり覚えます。

「普段はみんな城にいないことが多い。帝国の統括地は広いから、俺たち兄弟や
親戚が視察というか、その土地を見てまわる。全員そろうのは……そうだな、

一番近くて祝福祭だ。ティーナの魔導師（マイブル・プルーバ）の試しをやる時。
で、ティーナの事が帰ってきた姉上の耳に入ったわけだ。
今日次兄も帰ってくるから、多分明日次兄にも呼び出されるぞ？
何しろ、歴史上初めての魔導師（マイブル）候補だからな。」

うわぁ……なんか、面倒くさ……おほん。大変ですね。

「辞退できませんか？」
「無理。姉上は昨日帰ってきたんだが、本当は昨日ティーナに会わせろ、って
うるさかったんだ。夜だったのに。なんとか説得して今日にしたんだぞ？」
「今日、疲れてるんですよ……それにお姫様と会うなんて……」

無理です。お願いします。
無言で殿下に訴えていると、殿下がしばらく考えてから口を開いた。

「そういえばお前マルシアル苦手だよな？」
「苦手、というか……会いたいとは思いませんね。」
「任務から帰ってきてから時々ティーナに会わせろって言ってくるんだよなー。
今日ティーナがこのまま帰るなら、ティーナに黒騎士団長のもとまで
書類を届けてもらう仕事が近いうちにできるかもしれないな……。」
「……わかりました。今日の『やること』やりましょう。」

脅し、ですよね？　マルシアルと会うのは嫌ですから。

「姉上、バルタザールです。魔導師候補（マイブル）、アルベルティーナ・ギラルディーニと
二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）、マクシミリアン・インフォンティーノを連れてきました。」
「遅いわ！　もう。早く入って！」

お姫様に会うのは初めてです……と緊張しながら入った途端、中にいた女の人（多分姫様。侍女みたいな人はみんな壁際で同じ服装してる）がこっちに歩いてきた。
姫様は……陛下と同じ髪の色と目で、顔立ちもどこか陛下に似ている。そして、美人。

「あなたがアルベルティーナ・ギラルディーニ？
魔眼（ディアブロ・アイ）が可能で魔装具（ディアブロ・コーシー）が作れるってザールから聞いたわ。
全属性使い（オールユーザー）なのよね？　それから……ああもう！
聞きたいことが多すぎるわ！　どれから聞こう？」
「姉上……2人とも、この人がレオーヌ・ドイ・ロジオン。俺の姉だ。」
「姫ではなくレオーヌ、と呼んでほしいわ。姫だとパメラもいるから。
そっちはインフォンティーノの当主の子、てことは火使いね？
あなたの姉とは学院で時々話すわ！　彼女の話、おもしろいの。
ティーナとリアンってザールが呼んでるわよね？　私もそう呼ばせてもらうわ。
そう、それでティーナは他人に魔眼（ディアブロ・アイ）を発動させることができる、て聞いたの。私に魔眼（ディアブロ・アイ）ができるようにしてもらえないかしら？」
すごいマシンガントークですね。レオーヌ様……。

それから魔眼（ディアブロ・アイ）を発動させたり、任務の時に作った魔装具（ディアブロ・コーシー）について性能を聞かれたり、矢継ぎ早に質問されるのはバルドさんで慣れたかな、と自分では思っていたけどレオーヌ様から聞かれることは脈略がなく、次から次へと。

ザール殿下が時々レオーヌ様を止めようとしても、レオーヌ様に睨まれると、口を閉じてしまう。……レオーヌ様、強い。

一番すごかったのは私とリアンの相性がいいと聞いたときだった。

「確かに、二人の魔力の波長、すごくぴったりで相性がいいみたい。

その『相性』ていうのもどういう風に決まっているか研究したいわ。

ティーナ、あなたなら魔導師（マイブル）になるのは確実！

実力だけじゃなくて、知識もしっかりとあって……ザールはずるいわ。

わたくしも魔導師の試し（マイブル・プルーバ）の日に城に居たらわたくしの部下にしたのに！　いえ、今からでも遅くないと思うの。

ティーナ、わたくしと一緒に学院に行って勉強しましょう？」

「姉上！　ティーナは俺の部下です。渡しませんよ。

ティーナ、姉上について行くってことは……ないよな？」

そういって殿下はレオーヌ様の隣に座っていた（座らされていた）私を自分のほうに引き寄せ、耳元で囁いた。マルシアル。……私の弱点か何かですか！　そうですけど。

「は、はい！

レオーヌ様、すみません。私殿下の部下なので……。」

「あら、ザールに愛されてるのね。残念。しょうがないわね。

ザール、彼女明日の予定は？　空いてるでしょ？　というか空けなさい！」

レオーヌ様は前半の言葉を私にふふっと笑って言った後、後半の言葉は殿下に向かって言う。

「無理ですよ。姉上、今日次兄が帰ってくるの忘れてます？
明日は空いてますけど、むしろ次兄のために空けてるって言ったほうが正しいですから。」

「城に帰ってくる時期が重なるなんて……珍しいわね。
ブノア兄にはわたくしは勝てないわ。ティーナと話したいことはまだたくさんあるのに！」

今度帰ってきたときは相性論について話しましょう、と約束をすることになったのでした。
明日、殿下の兄様に会うのは確定なんですか……がんばりましょう。

＊11　訓練と……（後書き）

色々とあって間があいてしまいました……。
これから忙しくて毎日更新は無理になると思います。
読んでいただければうれしいです。

＊12　次兄と……

帝国2番目の皇子。……どんな人でしょうか？

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊１２）

レオーヌ様に会った次の日。
本当にブノア殿下に呼び出されてしまいました。今日はリアンは仕事をしているので、私とザール殿下の2人でブノア殿下のもとに行くことに。
ブノア殿下の部屋に入ると、金髪青目の男の人の左隣に……藤鼠（ふじねず）色の髪に、紫黒（しこく）色の目の男が立っていた。左側のほうをなるべく見ないようにして、ブノア殿下のところに行く。

「へえ、君が魔導師（マイブル）候補の女の子？
ザールからは聞いてたけど若いね。僕より１０こも年下かぁ。
はじめまして、アルベルティーナ・ギラルディーニちゃん。
僕はブノア・レク・ロジオン。マルシアルにはもう会ったことあるんだよね？」
「はい、ブノア殿下。」

ブノア殿下の目の色は正確に言うとザール殿下の目の色より少し紫に近いような……ウルトラマリン色の目の色。青で魔法使いって

ことは水使いでしょうか？

「久しぶり。」

「オヒサシブリデス。黒騎士団長サマ。」

マルシアルに声をかけられたので（しょうがないので）返事を返しておく。その後ザール殿下に小声で聞いた。

「今日黒騎士団長サマがいるの知ってたんですか？」

「いや、次兄と一緒にいるのは知らなかった。」

「そうですか。」

じゃあしょうがないですか。と心の中で思っていたら、「あ、だけど次兄はマルシアルと仲がいいってこと話してなかったっけ？」と言われた。……聞いていませんよ。知ってたらなんとかしてマルシアルと会わない方法があったかもしれないのに。

「ザール、いいかい？」

「あ、すみません兄上。」

ブノア殿下がにっこりと笑顔でザール殿下に話しかけたけど……なんていうか、普通に笑っているわけではなくて何かあります、という顔ですね。なるほど、腹黒い。

「今日ティーナちゃんを呼んだのは、ただ魔導師候補（マイブル）が見てみたかった、てわけじゃなくて

……まあそれも少しはあるんだけど、君に聞きたいとこがあったんだよ。」

「何でしょう？」

「単刀直入に聞くと、君、帝国の人間かい？」

「……は？」

私が突然の意味がよく分からない質問に思わずは？と言ってしまったけれど、そのことは予測していたみたいで、ブノア殿下はそのあとに言葉をすらすらとつなげる。

「アルベルティーナ・ギラルディーニ。１４歳。全属性使い（オールユーザー）。
祖母であるフレドリカ・ファルコーネに育てられた。フレドリカ・ファルコーネは
元この帝国の一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）、通称魔女（ストレーガ）。
祖母の死後、一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）のクルス・ベナーリオへの書状を持って
帝都にあるこの城を訪れる。そこで魔導師（マイブル）の才能があることがわかり、
魔導師（マイブル・プルーバ）の試しを受けることになる。
現在、火、水、闇の試しは終了していて、今度の祝福祭で残りの試しを受けることになっている。今は一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）の任に就いている。
……てことであってるよね？」
「はい。間違っていないです。」
「うん。僕も別にこれについて嘘をつく必要性を感じないから、正しいと思ってる。
だけどね、疑っている人もいるんだよ。」
「……つまり、私が祖母の孫ではなく祖母の孫であると語ってクルスさんをだまして、
私は帝国の人間ではなくほかの国から来たスパイみたいなものだと
考えていらっしゃる方がいて、私が帝国に害をなすと？」
「そうなんだよね。馬鹿だよね。
君が嘘をついてここに居続けることで何の得があるんだい？
君が全属性使（オールユーザー）いであること、魔導師（マイブル）としての才能があることは

魔導師（マイブル・プルーバ）の試しで父たちと魔術師（マーゴ）が見てるし、そしてこの前ザールと
いったらしい任務の結果から見ても、騎士（ナイト）たちだって才能を認めるはず。
普段ザールと仕事していることから見ても、君が帝国に害をなしているわけでは
ないことくらいわかるはずなのにね。
害をなすつもりなら君1人で城に来た初日に城を壊すくらいできたはずだ。
だけど、頭の固い連中は自分より優れた才能をそう簡単には認められないんだ。
王国からのものじゃないか？　とか昨日帰ってきた僕に言う奴がいたんだよ？
ありえないのにね。」

そういってブノア殿下はため息をついた。……毒吐きまくりじゃないですか？
ブノア殿下が言った言葉に対し、ザール殿下が驚いた後にすこし怒ったようにブノア殿下に言葉を返す。

「俺にはなんとも言ってこないですよ！……ティーナは俺の部下だってこと知ってるはずなのに。」
「だからこそだよ。ザールはティーナちゃんの才能を認めてるからね。
ティーナちゃんを疑うような人物、それこそ帝国の領地の中を歩き回っていて
ティーナちゃんについてほとんど知らないような人物に疑わしいと
思わせたかったんだろうね。
レオーヌは研究熱心な子だから王国だろうが帝国だろうが気に

しない、
研究できればそれでよし、で疑おうと思わないって予測したんでしょ。
馬鹿兄とパメラはまだ帰ってこないからね。だから、僕。
僕、そんなに連中のいうこと鵜呑みにする人間だと思われてるのかな？
……今度潰してやろ。」

なんか、私が疑われているということよりも最後ににこにこと言った言葉のほうがはるかに恐ろしかった。馬鹿兄って。……ブノア殿下の上……オビディオ殿下、でしたっけ？
それに、とブノア殿下が言葉を続ける。

「マルシアルが君に興味を持ったのも気になったしね。」
「いえいえ、黒騎士だんちょ「ティーナ、俺のことさっきから無視してるでしょ。」

おいおい、私が話している途中で口を出さないでくださいよ。あ（マ）なた（ルシアル）のことを無視しているのはあってますけど。

「マルシアルの闇魔法って結構いやらしい感じじゃないか。
それに勝ったのが、14歳の女の子！　僕、かなり笑ったよ。」
「いやらしいって表現はおかしいんじゃないかい？
別に一番俺の勝てるような形で闇を使っただけなのに……。」
「その『一番勝てる形』がいやらしいんだよ。君は。」

ありがとう。と言われましたが……いや、お礼を言われることでも……ない、と……。
2人の会話を聞いているとなんか、全力で逃げたくなってくる。
2人とも笑顔なんだけど、目が笑ってない。

ちら、と横を見るとザール殿下が部屋から出るタイミングをうかがっているかんじだった。
そうですよね、こんな腹黒い方々の腹の探りあいなんて見ていたくないですよね。

「ティーナのことすごいと思っていたからこその行動だよ。目の色から見て闇使いだとは
思ってたけど、無詠唱（ノン・カント）で俺が出した術消しちゃうんだよ？
あっさりと。だからどんな性格なのか気になってね。ちょっと。」

ちょっと、じゃないですよ！
マルシアルの言葉には答えず、ギロリと睨む。

「いや、初心（うぶ）だったんだね。ごめん。」
「ティーナって見かけよりももっと年上なかんじに落ち着いてるんだよな。
だから14歳てこと忘れるのはわかる。」

すみませんね！　どうせ前の人生でも彼氏の居ない暦＝生きていた年齢ですから！
そういう関係のことは苦手ですよ！
……とまあ反論するのはできないので2人の言葉には返事をしないでおいた。

「僕は別に、君を特別信頼しているわけでもないけど……疑っているわけでもないから。
だけど君を疑っている人がいることは覚えておいたほうがいいと思うよ。

じゃあ、祝福祭の魔導師（マイブル・プルーバ）の試し楽しみにしてるから。」
「はい。ありがとうございます。」

出て行くタイミングがなかなかつかめず、途中で私も会話の中で発言を求められ、……部屋を無事出ることができたのはそれからかなり後のことでした。
あれ？　私、精神年齢はあの方々より高いんですよね？　城に来てからこういうパターン多くありませんか？？
まあ、だけど無理なことってありますよね。なにしろ、前世のときにこの世界にいるような人たちの性格の人たちに会ったこと、ありませんから。あんなに腹黒い人たちと話した経験なんてありませんから。

……そういえば。

「殿下、殿下。」
「何だ？」
「ブノア殿下が私が王国のものってことはありえないって言ったのは
何か理由があるんですか？
それとも、殿下の勘とかそういうものでしょうか？」
「ああ、そのことか。兄上が言ったのは王国の決まりがあるからだろう。
王国では2属性（ダブル）使い以上の女の魔法使いのことを聖女っていうんだよ。」
「聖女？」
「これまでの研究で、統計学的に2属性（ダブル）使い以上の女の魔法使いから生まれる
子どもは普通の子どもよりも魔力の量が多く、魔法使いになれることが多い。

魔法使いが貴重なことはどこでも同じ。聖女は生活についてのすべてを王国から
援助され一生をすごすことができるが、王都に永住し、子どもを最低でも４人、
だったかな、産むことが義務付けられているんだ。
もしお前が王国のものだったら確実に聖女だろ？王国の外に出してもらえるはずがない。
いくら帝国の事情が知りたくたって、お前が全属性使いだからって、
王国の人たちがお前を送ることはしない。聖女はそれくらいの存在だからな。」
「……私、帝国でよかったです。帝国はそんな決まりないですよね？」
「ああ。」
王国で全属性使いだとばれていたら私の生活はかなり違っていたに違いない。……きっとつまらないのだろう。

ザール殿下と一緒に執務室に戻ると、１人で仕事をしていたリアン（書類と格闘中）が顔をあげた。
「お疲れ様です。殿下、さっき白騎士の方がまた書類を持ってきてそこの書類の上に重ねていきましたよ。
ティーナ、これお前宛の手紙だって。」
「うわ、昨日姉上に言われてできなかった分もあるのに兄上のもとに行って来たら
書類が倍かよ……2人とも、後で手伝え。上司命令。」
「今日こそバルドさんから借りた本読みたかったんですけど……しょうがないですよね。

私宛の手紙？　リアン、ありがとう。」

リアンから手紙を受け取り、中身を読む。

……あー……

「殿下、私2日くらい休みを取りたいんですけど、私が休みを取れる日って

どこかありますか？」

「休み？　その手紙、何かあったのか？」

「ちょっと……私が作った魔装具（ディアブロ・コーシー）の修理に行かなくてはならなくて。

出来るだけ早めに直しに行きたいんですけど、何日後になりますか？」

直しに行くのは冷蔵庫もどきのものだ。この世界は魔法があるからかわからないけれど、科学みたいなものは発展していない。食料を保存するのは冷暗所、ということになっている。

祖母は水使いだったし、私も水、氷と使うことができたので、食料の保存にはあまり困っていなかったけれど、魔法が使えない村の人たちにはどうにもならない。時々無料で野菜をもらって来たこともあったので、どうにかしてお礼をしたいと思って作ったのが冷蔵庫もどきなんです。

冷蔵庫もどきは村に1つしか作ってきていないし、私が時々メンテナンスをお願いしておいた子から来た手紙なので、製作者である私以外は誰も直せないと思う。

「お前が作った魔装具（ディアブロ・コーシー）を直しに行くってことは……お前が住んでいた

村にか？」

「いえ。隣村です。」

「よし。じゃあ1週間待て。そうすれば行けるな。」
「ありがとうございます。」
1週間か。それだったら何とかがんばってもらえるだろう。……ん？　『行ける』？
「行けるって……殿下がついてくるわけではないですよね？」
「俺も行くに決まってるだろ。そうしないと1週間後じゃなくて1ヵ月後くらいになるぞ？
お前が住んでいた村には前の任務の時から行ってみたいと思っていたんだ。
お前が作った魔装具（ディアブロ・コーシー）があるだろうし。」
「いや、殿下がついていくのは無理かと……」

書類、たまってますよ。
当然のように私の言葉にザール殿下が答えると、リアンがつっこんだ。

「……そうだったな。」

書類に目を向けて殿下がため息をついた。そしてしばらく考えた後、リアンの方を向いた。

「リアン、お前ティーナについて行って来い。2日間休み取れるようにしておくから。
考えてみれば、俺は魔眼使（ディアブロ・アイ）えないけどお前は使えるから、魔眼（ディアブロ・アイ）使って
ティーナがはった結界の様子とか見て来い。で、使えそうな奴居たら城へ勧誘。
勧誘の前には俺に報告するように。」

「……は？　俺、ですか。でもお「行ってきたら城にある精霊関係の本、
全部確保しておいてやるぞ？」……行きます。」

別についてくるつもりではなかったリアンだけれど、殿下の言葉であっさりとついて行くことに決まった。
城の本の量って多いし、色々なところに分散してますからね。自分の調べたい分野の本を探すのにも一苦労しますもんね。
任務から帰ってきてからはリアンは精霊と契約するために調べているので殿下の言葉はありがたいだろう。私も、その言葉につられるのは、わかります。

……というわけで、冷蔵庫もどきを直しに行くのには私1人ではなく、＋αで行くことになりました。
村の人たちに1週間はがんばってもらうことができますが、1ヶ月は無理ですからね……。
リアンと行く修理の旅、ということにしましょうか。

＊12　次兄と……（後書き）

次はリアンと2人旅～と行きます。
が、その前に閑話を1話入れたいと思います。

閑話　＊4　3人

それぞれの場合。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊＊４）

※ある黒騎士（ブラック・ナイト）の場合

『門以外のどこからでもいい。城の中に入って来い。
城に入る方法は何でもいい。何を壊してもよし。
ただし、自分の身には細心の注意を払うように。』

簡単に言うと、こういう任務内容でしたね。たしか。
僕のいる小隊だけの任務だったんだけど、みんな首をかしげるわけですよ、何で？　って。

疑問に思っても任務は任務ですから、城の外に出る。
入ってくる方法は指定されていなかったのでみんなばらばらになったあと考える。
よくわかんないですけど、魔法使って入るってことしてもいいですよね？　僕、土使いなので。
城に防御魔法がはられていることは知ってますから、城が損害を受けることはないでしょう。
そう思って門から適当に離れた場所の城壁の前に立って、詠唱を

する。

「＞激しき嵐　彼の物を打ち砕かん！＜」

詠唱をしながら剣で基本構築式を描く。僕は騎士（ナイト）ですから、魔術師（マーゴ）のようにぱっと魔術が発動しないんですが、別に城に入るのに時間制限はなかったので時間をかけて城内に入っても大丈夫でしょう。

「＞砂嵐（ザンド・トンメニア）＜！」

城壁に向かって魔術を発動……てあれ？　城壁にあたる寸前で魔術が消えてしまった。

威力を弱めたわけでも方向を変えたわけでもないのに……。防御魔法って城壁まで有効でしたっけ？　詠唱は間違ってないはずなんだけどなあ。

疑問に思いながらも城壁を魔術で壊せないことがわかったので、城壁をよじのぼり（任務だからやってますけど、こんなことして入る人物はいないと思う。だってかなり目立ちますから。僕が騎士（ナイト）の格好してなければ絶対に門番に知らせが行ってつかまってると思います。）城の敷地内に入る。

これで城の中に入れば任務終了ですよね？　一体何の目的でしょうか？

そう思って一歩踏み出した瞬間に悪寒が走った。何か変じゃないかと思って足を止めた次の瞬間、黒い穴が足元にできる。

……え？

僕がいまいち状況がわからなくて混乱しているうちに黒い穴から何本か紐状のものが出てきて僕を拘束して、一瞬視界が真っ白になったと思ったら、どこかの部屋の中。

同じ小隊の人たちも同様に拘束されている。

みんな訳がわからないみたいで戸惑っていると（勿論拘束はされたままだ。）部屋にあったドアから今回の任務を指示した小隊長と白いマントを着た黒髪、深緑色の目の女の子が入ってくる。

「全員……いるな。魔術師（マーゴ）さん、陛下からの任務だってことはわかってるんですけど……これだけでいいんですか？」

「はい。これで有事の際には対応できると思います。みなさん、すみませんでした。今拘束ときますね。ご協力ありがとうございました。」

そう言って女の子が指でくるっと円を宙に描くと拘束がとけた。魔術師（マーゴ）ですか。しかも、無詠唱（ノン・カント）で今の？

「城壁を乗り越えた後のことお聞きしたいんですけど、いいですか？」

その後、いくつか質問を受けた後に今回の任務について説明してくれた。

どうやら、城の防御魔法は女の子が張り替えたらしく、侵入者対策や魔法対策が施されていたらしい。魔術が消えたのはそれが理由だったのか。よかった。魔法が使えなくなったのかと思った。

それと、侵入者を拘束したまま転移させてこの場所にくるようにするということが本当にできているかどうかを調べるための実験だったとか。

この女の子は防御魔法をはっている魔術師（マーゴ）？　勿論女の魔術師（マーゴ）だっているのは知ってるし、見かけることはあるけれど……こんな若い女の子、いたっけ？

その日はその任務だけで仕事は終わり。そんなに大変じゃなくてよかった。

僕たちに聞きにきた女の子が帝国初めての魔導師候補で今は一級魔術師、そして僕たちが拘束された防御魔法を1人でかけたということを知ったのはそれからしばらく経った後の日のことだった。

◆　◆　◆　◆　◆

※調理場で働いている女の場合

私は調理場で料理師さんたちのお手伝い（雑用みたいなもの）をしています。

調理場で作られた料理は城の食堂　――――　騎士様たちがよく使われているところと、魔術師様たちが多く利用されているところと2箇所ありますが　――――　に転移魔法を使ったり、私たち下働きの者が運んだりしています。

食堂は基本的に24時間体制です。騎士様たちは騎士棟で、魔術師様たちは城の専用棟で生活されてますから、自分でご飯を作られる、ということがないのです。

騎士様も、魔術師様も、一人ひとりかなりの量の食事を食べられます。小食の方というのは見かけませんね。お手伝いしている身として、残らず食べていただけてうれしいです。

いつものように働いていたのですが、ある日のお昼過ぎ。食事が終わった後のお皿を持って調理場の中に入ろうと思ったのですが、入る前に声をかけられました。

「いきなり声をかけてしまってすみません。
ここって食堂で出すお食事作ってますよね？」

そうやって私に声をかけたのは黒い髪に深緑色の目、そして、黒いマントのまだ女性、というよりは女の子というかんじの人でした。
そう、黒いマントでこの城の中を歩いているということは一級魔術師(マーゴ・デ・プリメーラ)様なのです！
私のような下働きの人間としては初めてのことでちょっとかたまってしまった記憶があります。

「は、はい！　ここです。」
「ありがとうございます。」

緊張しながら返事をすると、魔術師(マーゴ)様は中に入っていかれました。
……一体何の用でしょうか？
私はお皿を運んでいたわけですから、魔術師(マーゴ)様の後に続いて調理場の中に入っていきました。

私はお皿を洗って、洗ったお皿を拭いて、またお皿を取りに行って、他の人が持ってきたお皿も一緒に洗って……という作業を繰り返して、一段落着いたとき。
途中から魔術師(マーゴ)様が行かれたほうにたくさん人が行くようになっていました。何があったのでしょう？

私も気になったのですこしのぞいてみようと思い、そっちの方角へと歩いていきました。
たくさんの料理を作るわけですから、この調理場は広いのです。
私がいたのはわかるかもしれませんが、食器を洗うスペースですが、魔術師(マーゴ)様がいらっしゃったのは火を使うところでした。
そこで魔術師(マーゴ)様が近くにいる料理師さんたちと話をしながら、何かを作っているところでした。
魔術師(マーゴ)様は料理を作るような立場ではありません。それなのに、

慣れた手つきで何かを作られている魔術師様の姿を見て驚きました。
そこで、私と同じように様子を見に来ている知り合いに話を聞きました。

どうやら魔術師様は食べたいものがあったらしく、調理場に来られたそうですが、火を扱う道具を見てしばらく呆然とした後に『おーぶん』というものを開発されたそうです。作っている途中で「冷蔵庫と同じ要領で温度維持……？　それでいいのかな？」とか「温度調節ができないといけないわけだけど……１５０℃と１８０℃と２００℃だけでも……いや、自分で……」とか色々とつぶやいていたそうです。『れいぞうこ』って何ですかね？
帝国の首都、帝都の陛下の住まわれる城の調理場です。最新の技術の魔装具がそろっていると思います。そんな城の調理場にない新しいものを作られたということは驚きです。魔装具屋の方ではないのでしょうか？

そうして新しく開発された『おーぶん』によって作られた『けえき』というものを私も一口味わうことができました。
食べたことのないものです！　甘くて、ふわふわしていて。
魔術師様は「失敗だなぁ、これ。」とおっしゃられていたそうですが、これで十分おいしいと思います。
魔術師様が帰られた後、作り方を見ていた料理師の方が「『おーぶん』というものはすばらしい……」と感動していました。
魔術だけではなくて料理にも詳しい魔術師様がいらっしゃるんですね！

◆　◆　◆　◆　◆

※ある白騎士（ホワイト・ナイト）の場合

あの日、丁度訓練所で剣の練習をしていた時。訓練しようと思ったのはたまたまだったんだけどよ、偶然に感謝したね。

丁度バルタザール殿下がいらっしゃったんだよ。2人の人を連れてな。連れていた2人は2人とも魔術師（マーゴ）。マントから見て一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）と二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）。一級魔術師が若い嬢ちゃんだった。

殿下が訓練所に来るのは最近はなかったからちょっと驚いたな。殿下は結構真面目だから、一般騎士のときはよく来て模擬試合みたいなのしてたんだけどよ、壮騎士（ニーバル・ナイト）になってからは外で剣を振り回すよりも部屋の中でペンを片手に書類整理が多かったそうだからな。壮騎士（ニーバル・ナイト）でも普通はそんな書類整理とか多いわけじゃあないらしいんだが……殿下は何しろ『殿下』だからな普通の壮騎士（ニーバル・ナイト）より書類の処理の仕事が多いらしい。皇帝家って大変だよな。

そういえば、最近部下をとったんだっけ。後ろに居るのはその部下ってわけか。でも、何で魔術師（マーゴ）を訓練所に連れてくるんだ？

まあ、その疑問はすぐに解決。

殿下が嬢ちゃんと向きあって打ち合いを始めたのを見ればな。

いや、嬢ちゃん相手に殿下が打ち合いするとは思わなかったよ、さすがに。もう1人の男のほうとすると思ったんだけどな。

殿下は壮騎士（ニーバル・ナイト）。『殿下』だからその位についているわけじゃなくて、一般の騎士（ナイト）より強いからこその壮騎士（ニーバル・ナイト）となっている。はず、なんだけどね。

嬢ちゃんは殿下の攻撃を避ける、受け流す、跳ね返す。

魔術師（マーゴ）、なんだよな？　殿下の攻撃を全部防いでるけど。

俺、あの連中は肉体派じゃなくて頭脳派だと思ってるんだけど。ヒョロヒョロしてて、運動は無理。ましてや、剣なんて使えないん

じゃなかったのか？
でも嬢ちゃんは1回も殿下に攻撃を仕掛けない。なんでだ？
攻撃を仕掛けないにしても嬢ちゃんの剣さばきはあざやか。すげえなあ。

カンッ

嬢ちゃんの剣が殿下に攻撃を仕掛けたと思ったら、殿下の剣が宙に飛んだ。殿下の剣を取ったのか。そんなこと、俺できねえよ。
殿下と嬢ちゃんはすこし話した後、殿下は嬢ちゃんを引きずるようにして剣の練習場から違うところに移動していった。
俺は剣が専門だが、殿下が連れてきた人物　――　しかも殿下から剣を取り上げられるような腕のある　――　が気になったからな、殿下がどこに行かれるのか、見に行くことにした。まあ、野次馬、っていえば野次馬だな。他の連中も結構ついて来てたよ。

次に嬢ちゃんがやったのは弓。
嬢ちゃんが始めの1本を弓に番えて矢を放つ。……真ん中。
殿下に何か言われた後、次は1、2、3本と連続で別々のところを狙って矢を放つ。……真ん中。
見ていた奴らはみんなぽかん、としている。俺もぽかんとしていたに違いない。
はじめの1本はおいといてよ、次に放った3本、何だよ？
騎士（ナイト）の中で弓を使う奴もそりゃあ、いるけどさ。そんなにひょいひょいと放てる物じゃないんじゃないか？
矢を番えて狙いを定めて放つ。この動作が速すぎだろ！
殿下がまた嬢ちゃんを引っ張って次のところに去っていった。
去っていった後に嬢ちゃんの真似をして矢を放とうとしている人が多々いた。……おいおい、そこの奴、ちゃんと狙い定めろよ。的から大きく外れてるぜ。

もしかしたら怪我をするかもしれないここにいるよりも、さっきの殿下たちの後に続いて嬢ちゃんが他に何が出来るか見てみよう。殿下たちの後を追いかける。

槍。2本構えたかと思ったら何故だか槍から火が出ていた。……術を使ったのか？　でも何で火？

ナイフ。はじめに殿下の剣と手合わせをする。ナイフで殿下の剣をすべて防御した後、バチッという音がしたと思ったら殿下の剣がまっぷたつだった。……練習用の剣だってことは知ってるけどよ、そんなに簡単に割れるものなのか？　隣で話していた話を聞いていたら、どうやらナイフが一瞬雷の属性を帯びたらしい。だからバチッて音がして割れたらしいが。

次に投げナイフ。弓と同じように的の中心に百発百中の腕前。……ｅｔｃ，ｅｔｃ．

一体どんな訓練をしたらできるようになるんだよ？

そういえば、魔導師（マイブル）候補は黒髪だって聞いた。もしかして……この色々とすごい嬢ちゃんのことじゃないか？　だったら普通の魔術師（マーゴ）じゃないことも納得できる気がする。

そして1番すごかったのは2対1での模擬試合だ。

2人のほうは殿下と二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）。1人は嬢ちゃん。

殿下は剣、魔術師（マーゴ）の男は後方から魔術、嬢ちゃんは素手。

殿下が切りかかってきたのを光の盾を作って受け止めたり、1歩後ろにさがって避けたり、ありえないくらいの高さまでジャンプしたり。魔術師（マーゴ）が放った火の玉は嬢ちゃんにぶつかる前に手をかざしただけで消える、次に発動した風の魔術は嬢ちゃんが跳ね返す、火の滝はさすがにやべえんじゃないか！？　と思ったら水の盾を出して防いでいた。

模擬試合やる前にいろんな武器をやってたからな、疲れたみたいで途中で殿下たち2人の勝ちということで終わったが……すげえな。

殿下たちが訓練所を出て行った後しばらくは嬢ちゃんの真似ができるかと試す騎士(ナイト)が多くいた。

さて、俺も訓練するとしますか。

嬢ちゃんの腕前には遠く及ばないが、帝国の騎士(ナイト)として剣の腕前をあげることに専念しよう。

閑話　＊４　３人（後書き）

閑話＊４　３人の方のお話でした。

お気に入り登録１００件を越えていました。

ありがとうございます。

未熟者ですが、これからもがんばります。

＊13　修理（1）

さて、帝都を出発して村へ冷蔵庫（もどき）を直しに行きましょう！

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊１３）

リアンと一緒に城を出て帝都を歩く。

「馬車は使わないで行くって言ったって……どうやって行くんだ？まさか徒歩？」

「ん、まあ徒歩みたいなもの。」

そうやって答えるとリアンがげっ、という顔をする。

魔術師（マーゴ）に機敏な動きとか、体力って求められていないかもしれないですけど……結構大切だと思いますよ？

今回は自分の力だけで行くわけじゃないですから。徒歩『みたいな』ものですよ。

「リアンはまだ自分の体に風の能力付加ってしたことないよね？」

「風の能力付加っていうと……エーヴがしたみたいな？」

「そう。それを自分でかけて行けば時間短縮で、練習になると思って。」

「確かにやったことないな。今までやってきたのは対魔物、とい

うか……
相手にかける魔法だけだった。」
「今回は練習も兼ねて行きましょう！　もし途中で無理そうだったら私が
リアンに魔法かけるから。」
そう言ってリアンに魔法の説明をすることにした。今回は初めてだからしっかりと段階を踏んでやってみたほうがいいだろう。
「私がやってみるね。まずはじめは構築式。基本構築式を地面に描いて……。」
地面に自分の体のが入る大きさの円を描く。
基本構築式は各属性ごとに違っていて、その属性を決めるものになっている。この場合は風属性の基本構築式の形　――――　円の中に二重線を横に引いたもの。（〇＋＝）
基本構築式はとても簡単なものになっているけれど、新しく開発された魔術とか上級魔術（アダンツァダ・ステゴネリア）になると構築式は複雑なものになる。
「それで、その中に立って詠唱する。
今回の場合は……うん、体の回りに薄い膜を張るイメージかな？」
詠唱はその属性を帯びた魔力を魔術に変換するためのものだと思えばいいとおばあちゃんに習った。詠唱することによってその魔術のイメージとかどんな形のものなのかを決めるそうだ。
今回の場合、そんなに複雑なことをやるわけではないので詠唱は短い。
「＞疾き風　我がもとに風の加護を＜　……とまあこんなかんじ

？」

「わかった。やってみるか。」

リアンが私が簡単に説明したとおりに基本構築式を描き、その中に立って詠唱する。

「もうちょっと足に方に魔力をこめる感じ……あ、もう少し左足、……

うん、そんな感じかな。」

今回この魔術を使ってしたいことは村への移動速度をあげることだ。だから足に効果があるように魔術をかける。

「ずっと維持してるの疲れるから途中で休憩を入れながら行こうか。」

「わるいな。ティーナ1人だったら休みなしで行けるだろ？」

「いいよいいよ、気にしないで。命令したのはザール殿下だし。」

村に着いたのはお昼すぎでした。

リアンが村にはられている守護魔法の確認をした後、私に話しかけてきた。

「すぐに魔装具直（ディアブロ・コーシー）すのか？」

「うん。今日直せるようなことだったら直して、明日まで様子見かな。

今日すぐに直せないものだったら作り直すために材料を集めないといけないし……。」

「わかった。じゃあ行くか。」

どんな様子なのか見てきたほうがいいだろう。
そう思って冷蔵庫が設置されている倉庫のほうに歩き出す。（村で1つしかないものなので、村人全員共通の倉庫に大きな冷蔵庫が作ってあるんです。）
倉庫の前まで来たら、中から人が出てきた。
あ。

「姉さまっ！」
「っ、久しぶりだね。ヘリナ。ひとまず、離れてもらえる？」
「えー、久しぶりなのに！」
「今日はあなたの手紙で冷蔵庫の様子見に来たからさ。ね？」
「はぁい。」

倉庫の中から出てきた人　――――　ヘリナは私の姿を見るや勢いよく私に抱きついてきた。それだと動けないのでどいてもらう。
ヘリナはこの世界で一番一般的な髪と目の色　――――　つまり焦茶色の髪、葡萄色（えびいろ）の目をした女の子で、私より2歳年下の12歳。地球でいうなら欧米の人みたいに日本人に比べると大人っぽくみえるのでヘリナは15歳くらいに見える。
リアンが隣で「何だこいつ？」という顔をしているのを見てヘリナは挨拶をした。

「えーっと。魔術師（マーゴ）様？　ヘリナ・クレメンティです。
あたし、姉さまに言われて姉さまの留守中は魔装具（ディアブロ・コーシー）の整備をしています。」
「そうなのか。俺はマクシミリアン・インフォンティーノ。ティーナの同僚、かな。」
「姉さまの！？　いいですね、うらやましいですっ！
あたしも姉さまと同じところに行きたいです！　お城ですよね？

1度は入ってみたいなぁ。
姉さま、後で家に来てね！　というか泊まってね！　お父さんもお母さんも
姉さまが来るって聞いてから楽しみにしてたから！！　」
「え、……」

ヘリナは前半をリアンに、後半を私に向かって言ってから私が言葉を返す前に家に帰ってしまった。

「……懐かれてるんだな。」
「た、多分。昔からあの調子で。」

彼女は魔術が使えないからかもしれないけど、魔術を使うたびにきらきらとした目で後をついて来られ、おばあちゃんが亡くなって城に行くときに冷蔵庫など魔装具（ディアブロ・コーシー）の整備を頼みに来たら自分も城についていく！　と言われたし……。

倉庫の中に入り、冷蔵庫の状態を確認する。
外側のどこかが壊れているわけではないんだけど……「冷蔵庫」としての働きをしてないなぁ。
見ているだけではわからなかったので分解する。
この部分は作ったときのまま。ここは大丈夫。……ん？　これかな？
中に入っていた私の魔力を貯めて、「冷蔵庫」としての効果を維持するための石が入れたときはきれいな青い石だったのが、今は透明な石になっている。
なるほど。これじゃあヘリナが見てもわかんないよね。
私が分解していた手を止めて石を見ていたのをリアンが見て声をかけてきた。

「それが原因？」
「うん。もう魔力を貯めて維持するってことが出来なくなってたみたい。
これを新しいのに変えればまた使えると思う。
何処かが壊れてるわけじゃなくてよかった。石の寿命だね。……4年か。」

私の住んでいた村でも冷蔵庫は作っておいてある。この村と同じ時期に作ったからそっちでもそろそろ寿命だなぁ。また交換しに行こう。

「……10歳のときに作ったのか？　コレ。」
「うん。」

作り始めたのは9歳のときだけれど完成するまでに時間がかかってしまい、10歳のときに完成となったんです。
長時間半永久的に保温させるやり方とか、冷蔵庫の適正温度なんてわかんなかったから何度がいいのか何回もいろんな温度で確かめたりとか、「冷蔵」したかったのに失敗して何故か全部食材が「冷凍」された状態になっちゃったりとか……。

「……また直したらどんな効果があるのか見せてもらおう。」
「？　石取りに行って来るね。」
「わかった。俺、この村歩き回っても大丈夫か？」
「問題ないと思う。だけど田舎の村だからつまらないと思うよ？」
「それこそ、問題ないから。」

いってらっしゃい。とリアンに見送られた。
何故かリアンがすごく深刻そうな顔をしていた。何かあったっけ？
とりあえず今日は変わりになる新しい石を取りに行こう。取って

来たら、新しく魔術をかけて、温度維持をできるようにして……。

それから石のある森まで取りに行く。

ここに来るのも久しぶりですね～。最後に来たのは……半年くらい前？

はじめこの森に来ていたのは石が目的じゃなくておばあちゃんのよく使っている薬草などがこの森で取れるから来ていたんです。それで何回も来ているうちに洞窟を発見し、そこで石を見つけたんです。

「あら？　ティーナ、久しぶりね。」
「こんにちは。お久しぶりですね。」
「あっ、ニンゲンがいる～。」
「初めまして。」
「よお、元気だったか？」
「あなたを見るのも久しぶりね～。」

「主、全部を相手にしなくてもいいですよ。」
「話し込むわけじゃないから。挨拶だけだよ。」

この森はよく来ていたので見かけたことのある精霊や、私の名前を覚えてくれて話す程度に仲のいい精霊もいる。

精霊はあまり人間に見えなくて会わないので私のように「視」える人がいると話しかけてくるので、森に入ってからは精霊を見かけるたびに挨拶をしていたら＞エーヴ＜が出てきて精霊たちを遠くにやってしまった。

「ですが、来てないうちに精霊のカズが増えています。その全部

に挨拶をしていると
　イシを取って帰るまでにどれくらい時間がかかるかわかりませんよ？」
「本当に？　じゃあしょうがないね。ありがと、エーヴ。」
　私には精霊が「いる」ということは感じられるけど、どれくらいの数の精霊がこの森にいるのかはよくわからない。精霊である＞エーヴ＜が言っているということはかなりの多さなんだろう。
　＞エーヴ＜が精霊を遠くに飛ばしたうちに急いで行くことにしましょう。
　その前に……、この草は……火傷治しに使うやつだ。取っていこう。あ、こっちのは熱を下げる薬を作るのに必要な……もう残りが少なくなってた。これも取っていこう。ん？これは……

「……主。」
「ごめんね、行きます行きます。」

　思わず薬草取りに気がそれてしまった。まだ取り足りない気がするけど、冷蔵庫の修理が終わったら明日にでも取りにくるとしましょう。

　洞窟の中で石を探す。
　これは私が自分で探すと勘で選ぶことになるので、私の魔力と相性がよさそうで長い期間魔力を溜め込めそうな石を＞ノーテ＜に探してもらう。

「主、これはいいと思うのだが。１つでいいのか？」
「ありがとう。……んー、もう１つ取ってきてもらえる？」
「承知。」

この村で修理に使うための石と、私が住んでいた村のほうでも石が駄目になっていたら交換が必要になるので、２つ取ってきてもらう。

取ってきてもらってから村に戻り、倉庫の中に入って座る。

えーっと……どの魔法からやるんだっけ？　冷却？　温度は確か……５℃だと低かったっけ？

私が作る魔装具（ディアブロ・コーシー）はちゃんとした魔装具（ディアブロ・コーシー）ではないんですね。これが。魔装具屋が作る魔装具（ディアブロ・コーシー）は魔力をこめることもするとは思うけれど、１番重要なのは文字を刻みこんだり、構築式を刻み込んだりすること。かなり細かい作業になる。……正直、私は書けない。

そういうものを刻み込むことによって魔術師（マーゴ）が使うような魔術を使えるようにするそうだ。

一方、私が作る魔装具（ディアブロ・コーシー）は魔力をこめられる石や宝石があればよくて、そこに魔術を埋め込む形をとっている。

冷蔵庫のようなものの場合だと魔術の重ねがけ、重ねがけ。

ちゃんと魔装具（ディアブロ・コーシー）として役立つようにするためには魔術を重ねる順序が重要になってくるんです。

冷蔵庫を作るとき時間がかかりましたね。失敗すると石が壊れることもあって。

そうやっているとリアンからの［遠話］が魔装具（ディアブロ・コーシー）から入った。

［ティーナ！　村の外に魔物が！　俺１人だと無理そうなんだが……来れるか？］

村の近くですかね？……珍しい。村に守護魔法がはってあるから

あまり魔物は近づいて来ないのに。
リアンの援護に行きましょう。

＊13　修理（1）（後書き）

はじめ1話で修理の話を終わらせようと思ったんですが、思った以上に長くなっていつもの2倍くらいの長さになってしまったので半分にして2話でＵＰします。

＊14　修理（2）

［ティーナ！　村の外に魔物が！　俺1人だと無理そうなんだが……来れるか？］

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊１４）

「わかった。行くね。」
［ありがとう。場所は……］

リアンが場所を言う前にリアンの魔力をたどりリアンのもとに向かって転移する。

「ティーナ！」　「姉さまっ！」
「は？」

私はリアンの前に転移した。リアンの後ろには４人の人が見えた。
次の瞬間リアンが私を引っ張って私をリアンの横に移動させた。

え？　何で？
状況がよく読めないけど前を向くとそこには盾をもってリアンの前に立っているヘリナの姿があり、ヘリナの前には火の壁ができていて、火の壁越しに馬に似た形の魔物が見えた。

……あー……私、来たタイミング悪かったですかね？
とりあえず魔物を倒すことが先決だよね。
即席武器として剣を作り、火の壁をすり抜け、魔物を切り、そのまま火葬。
倒してリアンの方を向くと……怒って、いっらしゃる？

「ティーナ！　来てくれとは頼んだけどな、今みたいに転移してくるなよ！
今回はヘリナが助けてくれたから怪我がなかったけどな、ヘリナがいなかったら
確実に魔物の攻撃くらってたぞ！？　ていうかな、俺が……」

リアンに叱られながらも話を聞くと、リアンの後ろにいた４人は物売りで村で商品を売って次の村に移動しようとしていたところ、魔物が出てきたらしい。ヘリナは次の村まで案内することになっていたので一緒にいたとか。
村の周りと探索していたリアンがそれを見て助けに入ったんだけど、リアンは魔術師（マーゴ）なので後衛。前衛が居なくて詠唱ができない。そこで私を呼んだわけなんですが、場所を言う前に転移してきたと思ったら魔物の前に出てきて、魔物は丁度リアンに向かってきていた。いや、タイミング悪くてすみません。
それでリアンは私を横に移動させて（間に合うかはわからなかったんだけど）魔物の攻撃を避けるようにした。ヘリナは私が転移してきた瞬間に前に出て魔装具（ディアブロ・コーシー）を使って攻撃を防いだとか。

「今度からこういうときには転移してくるんじゃなくて走ってきてくれ。
もしかしたら俺が怪我するかもしれないけどさ、転移してきた状況が分からないほうが

やばいから。いいな？」
「……はい。」
最後の「いいな？」って言うときの顔、……断れない怖さでした。
今回は私が全面的に悪いですよね。すみませんでした。今度から場所を聞いて飛んでくるようにしますから。
「そうですわ、姉さま。姉さまにもしものことがあったら……あたし……」
「ごめんね、ヘリナ。……ところでその魔装具（ディアブロ・コーシー）どうしたの？
私、それ作ってないよね？　貰い物？」
「いえ、あたしが作ったんです！　姉さまみたいに何回も使えるやつじゃなくて
使い捨ての形になってしまったんですけど……どうでしたか！？」
ヘリナが泣きそうな顔をしていたので慌てて話題を変えると、ヘリナはぱあっと顔を明るくして答えてくれた。
……んん？　作ったんですか？
「ヘリナ、魔装具（ディアブロ・コーシー）作れたっけ？」
「作れるようになったんです！　姉さまに魔装具（ディアブロ・コーシー）の整備をお願いされてから
勉強したんです！　まだ今の＞火の壁（ブラウド・バデロ）＜しか刻めないんですけど……。」
姉さま、どうでしたか？　ときらきらした目で聞かれる。リアンに引っ張られて小声で話しをする。
「魔装具（ディアブロ・コーシー）の作り方、教えてたのか？」

「いえ。あの子、手先が器用だったのでちょっとしたことだったら直してくれるかな、と
思ってお願いしただけだったんですけど……。」

正直、かなり驚きです。文字を刻むといってもかなり小さいものだ。……ヘリナがそこまで器用だったとは予想外です。
魔装具（ディアブロ・コーシー）の作り方なんて全く知らなかっただろうに、こんな田舎で魔装具（ディアブロ・コーシー）についての本を入手して勉強するのはかなりの手間だ。

「……確実にティーナの影響だな。」

そういってリアンはため息をついた。
いや、ため息をつかれても……こんな展開予測してませんから！

「姉さま？　マクシミリアン様？」
「あ、ごめんね。とりあえずヘリナの家に戻ろうか。いいですか？」
「はい。ご迷惑をおかけしてすみません。」

最後は物売りの方々に向かって聞く。魔物が襲ってきて驚いただろうから、一息ついてから次の村に行ったほうがいいでしょう。私が連れて行けばヘリナが連れて行くより時間がかからなくてすぐに行けるだろうし。

◆　◆　◆　◆　◆

「……これで大丈夫。」
「姉さま、お疲れ様です。お茶どうぞ！」
「ありがとう。」

次の日。　今、冷蔵庫が置いてある倉庫の中。
昨日は物売りの方々を転移して送って（ここらへんは慣れているので近くの村だったら転移可能だ）、石に魔術を込め、冷蔵庫を組み立てた後ヘリナの家で夜泊まらせてもらった。
夜はヘリナと同じ部屋で眠ることになったのだけど、しばらく魔装具（ブロ・コーシー）の本のわからないところがある、とヘリナに質問攻めされた。
……質問攻めされることが多い気がする。

私は無事魔術を込めるた石が正常に冷蔵庫としての役割を果たしていることを確認した。
これで前回と同じように４年はもつでしょう。

「これ、すごいな。帝都にもないぞ？」
「……え？　じゃあ城にも？」

リアンが冷蔵庫の効果を見て驚いていた。
帝都はたくさんの人がいるから冷蔵庫みたいなもののアイディアを思いついて製品としている人がいると思ってました。
城の食料も冷蔵保存とかじゃないのか。大変だなぁ。
以前ケーキが食べたくなってお邪魔した調理場を思い出す。……今度１個くらい作ろうかな。だけど、他の人が作れないとなると争いの元になると嫌だしな……。

「城にもないだろ。今度作る……ていっても材料がないか。」
「材料は大して問題じゃないけど、作ったものが普及できないから……」

私1人しか作れないとなると、色々と大変じゃないですか。
そういうとリアンがなるほど、と頷いてくれる。
「それもそうだけど、……これに関しては城に戻ってからにしよう。
バルタザール殿下だったら何か思いつかれるかもしれないし。」
「そうですね。」
冷蔵庫は城みたいにたくさんの人が食事を食べるところには必要になると思う。非常事態にも便利だろうし。
勿論、各家庭にもあったら便利なんだけど、それは魔装具屋が作れるようになってからかな。

「姉さま、今日帝都に行ってしまうんですよね？」
「うん。今日帰るよ。明日からまた仕事あるしね。」

ヘリナがこうやって私に聞いてくるということは……

「あたしも姉さまについて行きたいです！
ここだと魔装具（ディアブロ・コーシー）について詳しく学ぶことができないですし……。
」
「まあ……確かに……難しいんだけどさ……」

やっぱり帝都についてくるということでしたか。
ヘリナの魔装具（ディアブロ・コーシー）の勉強に関してだと帝都で勉強することはいいことだと思う。田舎の村じゃ学べることは限られてくる。私みたいに祖母がとても詳しい、ということがあれば話は別なんですけど。
だけどなぁ……私はヘリナに残ってもらってこのまま魔装具（ディアブロ・コーシー）の整備続けてもらいたいんだけどなぁ……。

「そのことなんだが、ヘリナさん。」
「魔術師（マーゴ）であるマクシミリアン様に『さん』付けされるなんて！
ヘリナって呼んでもらえればいいです。」
「帝都に来て魔装具（ディアブロ・コーシー）を学ぶっていうことはどうだ？」
「本当ですか！　是非！　姉さまと近いところで生活できるなんて……。」

……は？
いや、帝都ですから、広いですから。『帝都＝私と近い』わけじゃないんだけど……この村よりは近いか。しかも、貴女が帝都に来るのは魔装具（ディアブロ・コーシー）について勉強するためじゃないんですか。……じゃなくて。

「リアン、何で？」
「バルタザール殿下に今回のことを報告したら是非帝都に来て勉強すればいい、と
仰ってた。」
「だけど帝都に行くってことは帝都で生活するわけでしょう？
お金のこともあると思うんだけど……ヘリナ、あきらめたほうが……」
「いや、お金は将来帝国付の魔装具屋になる契約で問題がなくなるそうだ。
ただし、作った魔装具（ディアブロ・コーシー）はすこし安い値段で売られることになるそうだが。」
「住むところもないんじゃ？」
「それも大丈夫なはず。そうやって勉強しに帝都に来る人たちのための寮があるそうだ。」
「問題ないです！　姉さま、あたし帝都に行くわ！
姉さまも魔術師（マーゴ）様も出発のときはあたしを呼んでくださいね！

あたし、今から両親に話して、準備してきますから！」

そう言ってヘリナは倉庫を出ていった。

本人がああやって言っていたということはヘリナの帝都行きは決定だろう。そして私たちと一緒に行くんですね。

私は村に向かって歩き出す。

「どこ行くんだ？」

「ほかの人に魔装具（ディアブロ・コーシー）の整備頼みに行きます……。」

しょうがない。ヘリナみたいに器用な人、他に誰がいたかなぁ……。

＊14　修理（2）（後書き）

ヘリナさんが帝都についてくることになりました。

＊15　パーティー（1）

今日の分の仕事が終わり、執務室を出るとリアンに声をかけられた。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊１５）

「ティーナ、親父が呼んでるから一緒に来てくれないか？」
「バルドさんが？……術関係？」

そうすると確実に帰るのが遅くなるんだけど。

「いや、術関係じゃない。」
「それ以外で？……何の用事だろう。」

疑問に思いながらもバルドさんの研究室（城に来た初日から始まり、しょっちゅう呼ばれている。）に入ると、バルドさんが迎えてくれた。

「ティーナにお願いがあってな。」
「術のことじゃないんですよね？　何のことです？」
「ああ。今日は術のことじゃない。……そういえばこの前やった術がな、」

「父さん。」
「おっと、そうだ、術のことじゃなくて。俺の伯父主催のパーティーのことだ。
ティーナに是非とも来てもらいたいのだが。」
「バルドさんの、伯父？　何で私？」
「前当主が親父に勝った魔術師（マーゴ）……しかも魔導師（マイブル）候補だってことを知ったら会いたいとうるさいらしい。」

前当主＝バルドさんの伯父ですか。そんなすごい人の誕生日会ということは……

「大きな規模のものですか？」
「そうだな。インフォンティーノ全体が来るわけだから。……どれくらいだ？」
「大体１００人くらいの規模だと思う。」

かなりのものじゃないですか！　しかもそのパーティーのメインの人に呼ばれているということは行くのは強制じゃないですか？

「ちょっと待ってください。」
「？　ああ。」

バルドさんに聞こえないようにリアンを部屋の隅のほうに引っ張っていく。

「術関係じゃないって言ってたけど、私が誘われてること知ってたよね？」

リアンが頷く。

「私がそういうところ好きじゃないってこと知ってるよね？」
リアンがこれにも頷く。
「パーティーの衣装って魔術師（マーゴ）のマントが正式の衣装？」
「いや、インフォンティーノの半分が魔術師（マーゴ）、そのほかも魔法関係の仕事が多いから
似たような格好が多くならないようにマントは駄目だ。」
「……一応、聞きたいんだけど断っていい？」
「駄目。というか無理。親父がうるさいぞ。」
「……あきらめないといけません？」
「そうだな。断ることをあきらめたほうがいい。」

２つの質問には即答された。
ドレス、着たこともないけど着ると考えるだけで嫌になる。似合わないし、動きにくいし！
はぁ。
バルドさんの前のソファにまた座りなおす。

「パーティー、行きます。いつですか？」
「ありがとな！　じゃあリアン、お前がエスコートしろよ？
パーティーは５日後の夜だ。」

バルドさんの言葉にリアンが頷く。
私はそういったところに行ったことがないので、恥ずかしいけれど当日はリアン任せになるかもしれない。

あ、重要なことが！

「バルドさん、私ドレス持ってないんですけど……」

「あ、そうか。ティーナはそういうところに行ったことないのか。じゃあジスレーヌのを貸そう。当日の昼、ここに来てくれ。ティーナに似合うの探しておくから。」
「すみません。」
ジスレーヌさんって誰でしょう？　バルドさんの奥さん？

◆　◆　◆　◆　◆

「……これ、私が着るんですか？」
「はい。当主様から仰せつかっております。」

パーティー当日。バルドさんに言われていた通りに部屋に行くと侍女さんとドレスが５つ。

「すべて試着していただいて、気に入ったのにを着ていただければと当主様から。」
「……全て、ですか。」

ドレスはそれぞれ黒（私の髪の色に合わせたのだろうか）のＡラインドレス、深緑（これは目の色だ）のＡラインドレス、緋色（これはインフォンティーノの色ですかね）のショートラインドレス。緋色のドレスがショートラインなのはやっぱり年齢を考慮しているかんじですかね？
うーん。……とりあえず着てみないとわかんないですかね。

「よくお似合いですよ。」
「あ、ありがとうございます。」

準備してもらったお礼を言って部屋を出る。
私が選んだのは深緑色のドレス。ショートラインドレスは足を出したくなかったので却下。黒色のドレスはなんというか……パーティーぽくなかったのでやめた。
ドレスを決めたら髪の毛とかネックレスを準備してくれた。
ちょっと着せ替え人形っぽくなったのは気のせいだと思いたい。

うー……ヒールがあるのは慣れてない。前の世界以来だ。
ドレスを踏まないように、足を気にしながら下を向いて歩く。

「……ティーナ？」
「あ、リアン。ごめんね、前向いてなかった。」

足元に集中してリアンが前に立ってたのも気づかなかった。危なかったです。
リアンはカーキ色の軍服みたいな服を着ている。
いやー、美形は何着てても似合っててていいですよね。目の保養です、今回のパーティーは。

「似合ってるじゃないか。」
「ありがとうございま、……殿下？」

リアンだけかと思っていたら後ろからザール殿下も現れた。
ザール殿下は学ランみたいな服の白と青バージョン、というか……軍服、というか……いや、語彙が少なくてごめんなさい。皇子様っぽい衣装をイメージしていただければ……。

あれ？　どうして殿下がここに？　……てそりゃあパーティーに参加するんですよね。

「そうやってると１６くらいに見えるんじゃないか？」

「そうですか？……じゃなくて。今日のパーティーってインフォンティーノの家の

人たちだけじゃないんですか？」

「違うぞ？　他にも魔術師（マーゴ）の上の人だとか、皇帝家は、……まあ俺だけだけどな。」

父上の名代だ。

そういって殿下は不満そうな顔をする。

「別に来たくなかったわけじゃあないんだが……前当主、ていうと、な？」

「……すみません、殿下。」

リアンが申し訳なさそうにしてる。前当主がどうかしたの？

「いや、リアンが謝ることじゃあないぞ？」

「しかし、」

「まあいい。行くか。」

「本日はインフォンティーノ前当主、エルモ・インフォンティーノ主催のパーティーに

おこしいただきありがとうございます。ごゆっくりお楽しみください。」

バルドさんが壇上で挨拶する。
「俺は前当主に会ってくる。父上の名代だからさ。」
「……気をつけてくださいね。」
「ああ。わかってる。」
リアンが殿下に小声でそういったけど、……ほんとに前当主がどうかしたのだろうか？
殿下が会場であるホールから出ていった。

「私はいつ会いに行くことになるかわかる？」
「親父がティーナを連れて行くことになるから、それまで待っててくれ。」
「うん。」

じゃあ殿下が戻ってきた後に行くことになるかな？
バルドさんのほうを見たら随分と人に囲まれていた。
バルドさん、インフォンティーノの当主ですもんね。挨拶に時間がかかりそうだ。

そういえば、とリアンが私に取ってきた飲み物を渡して口を開く。
「俺の兄と姉。会ったことないよな？　紹介しとくよ。」
「今日来てるの？」
「前当主のパーティーだから……来てないと困るんだけど、来てるかな……」
え、来ないようなタイプの人なんですか？

リアンは会場の中を見回して誰かを探して、私を引っ張っていく。
リアンが引っ張っていった先に居たのは、地味（といっても私が選んだドレスと同じくらいの装飾だ。他の人が派手だからそう思える。）な装飾できれいなフランボワーズ色（ピンクと紫の間くらいの色）のドレスを着て、キャラメル色の長い髪をきれいにまとめている美人なお姉さん。目の色は葡萄色（えびいろ）だ。

「姉さん」
「、リアン。」

来ててよかったよ。とリアンが小声で言うのが聞こえた。
じゃあさっき言ってたのはお姉さんのことなのかな？

「ジスレーヌ・モニチェリ。俺の姉だ。」
「初めまして。」
「初めまして、アルベルティーナ・ギラルディーニです。」
「魔導師（マイブル）候補？」
「はい。今は一級魔術師（マーゴ・デ・ブリメーラ）として仕えています。」
「そう。」

ジスレーヌさん、と言うと私が借りたこのドレスはジスレーヌさんの物ですよね。
ジスレーヌさんにお礼を言った。

「姉さんレオーヌ様と仲がいいのか？」
「レオーヌ？……ああ、時々図書館で会って話すわね。」
「専攻が違うんじゃないか？」
「違うんだけど、彼女は話すのは楽ね。
他の人と比べると余計に説明しなくていいから。」
「そっか。ところで兄さんは……」

「リアン！　ジスレーヌ！　それと、アルベルティーナちゃんで合ってるかい？」

2人の会話を聞いていたら、明るい声で声をかけてきた人がいた。利休茶色の髪にココア色の目。リアンと同じようなデザインで色違いの服。……ということは。

「はい。アルベルティーナ・ギラルディーニと申します。ティーナと呼んでください。」

「やっぱりそっか！　俺、ヴァランタン・モニチェリ。ヴァラン、て呼んでくれ！

この2人の兄で騎士（ナイト）やってる。ティーナちゃんには会ったことないよな。

リアンが世話になってるみたいで。」

「いえ。私こ「噂で聞いたんだけど、槍使えるんだって？」

「はい。でもそこ「今度時間作って見せてくれないか？」

「……あの、私ザー……バルタザール殿下の部下とな「じゃあ殿下に頼んでおくな！」

「……兄さん、もうちょっと音量下げてくれないか？」

「ヴァランは相変わらずね。」

あと、ティーナの話を聞いてやってくれ。

リアンがヴァランさんに突っ込みを入れる。ジスレーヌさんは苦笑している。

私もそう思います。お願いします。

バルドさんのあの性格がヴァランさんに引き継がれてる、てかんじがします。下2人には全くしないのになぁ。

「ヴァルドさんは白騎士（ホワイト・ナイト）なんですか？」
「そうだ！　バルタザール殿下と同じ壮騎士（ニーバル・ナイト）だぞ。
殿下とは得意分野が違うけどな。殿下は剣、俺は槍。
殿下も俺も魔法が使えないのは同じだな！　槍、といってもな、」
「……兄さんの槍についてはまた今度でいいから。」

リアンがヴァランさんを止める。
バルドさんと同じようにヴァランさんも語りだしたら止まらない感じに見える。
止めてくれてありがとうございます。

そうやって話していたらリアンと同じくらいの年齢のお姉さんが私たちのほうに向かって歩いてきているのが見えた。
赤毛に茜色の目。
目の色からしてインフォンティーノの人かな？

「マクシミリアン！」
「……ドロテア」
「お久しぶり、かしら？　あなた二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）になったのよね。」
「ああ。」
「だからと言ってあなたが私より有利なわけじゃないわ！　わかってる？」
「……別に俺は次期当主について興味ないから。ドロテアがなるのなら、それはそれでいい。」
「そんなこと言って、本当は違うでしょう？　……まあいいわ。
次の昇級試験で私も二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）になるんだから！
あなたの優位もそれまでね。」

そういってお姉さん――――ドロテアさんは去っていった。

私、ヴァランさん、ジスレーヌさんことは完璧に無視ですね。……私は別にいいんですけど、驚きました。
ヴァランさんたち2人には挨拶をしていけばいいと思うんですけど。面識がないのでしょうか？

「悪いな。あいつ、昔からあんなかんじだから。」
「いや、別に良いけど……。」

2人の様子を見ても、さっきと変わらない。ドロテアさんのことは全く気にしてないみたいだ。
昔からってことはいつもあの態度ですか？　バルドさんとかヴァランさんとかのタイプとはまた別で疲れそう……。

ドロテアさんについてリアンが簡単に説明してくれた。

「あいつはドロテア・インフォンティーノ。俺の従姉妹。
俺と同期で三級魔術師（テグナキヤ・マーゴ）になった火使いだよ。
インフォンティーノの次期当主になりたいみたいでさ、今の当主である親父の子供の中で
俺だけがインフォンティーノの姓だから俺がライバルみたいに思ってるらしい。」
「ドロテアははっきりと物を言うタイプでな。
確かに次期当主として候補にあがってるんだけど、どっちかっていうと
俺はリアンだと思うな！　あいつ、自分が選ばれた人間だと思ってるかんじで
どうかと思うし。な、ジスレーヌ。」
「そうね。今の最有力候補はリアンだと思うわ。あのインフォンティーノの姓を
継がなかった私たちをどうでもいいように無視するふざけた態

度は駄目よね。
しかも、ティーナに挨拶なかったわ。ティーナが魔導師(マイブル)候補だってこと
知らないのかしら？　それとも自分よりすごい魔術師(マーゴ)に嫉妬してあえての無視なのかしら？」

ドロテアさんの評価はよろしくないみたいですね。
私は魔術師(マーゴ)の人と同じ食堂でご飯食べたり同じ棟で生活していると思うんですけど……ドロテアさんとは会わないですね。

「まあ、あいつのことはいいだろ。
兄さん、あの肉好きだろ？　とってくれれば？
姉さんはこれ。アルコールに強くないんだからあんま飲むなよ。
ティーナ、これ食べたことないんじゃないか？」

はい。これ。

リアンが私たちに会場にある食べ物を渡してくれた。

「うん、ありがと。」
「お、さすがリアン！　じゃあ俺、リアンの分も一緒にとってくる。」
「ありがとう。兄さん、私にも一口。」
「おう！」

おいしい料理ばっかりですね～。
……リアンが2人と話しているのを聞いて、すこし母親っぽいなと思ったのは秘密です。

＊15　パーティー（1）（後書き）

リアンとザールの服について語彙がなくてすみません……ご自由に想像してください。

＊16　パーティー（2）

ジスレーヌさんとヴァランさん2人と別れてから会場の人にリアンが話しかけられて、私も挨拶をして……を繰り返した。
すみません。名前言われてもさっぱり覚えられないと思います。

周りにいた人がぱっと2つに分かれて私たち2人のところまできれいに道ができた。
そこに歩いてくる男の人が1人。鶯茶色（うぐいすちゃ）の髪の毛にリーフグリーン色の目で、短髪でゆるい波みたいな天然パーマだ。

……？

導くもの（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊１６）

「はじめまして、魔導師（マイブル）候補さん。僕はセリノ・シルヴェストリ。今のシルヴェストリの当主で君と同じ一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）だよ。」
「初めまして。アルベルティーナ・ギラルディーニです。」

『シルヴェストリ』は確か……インフォンティーノと同じように古くからある風使いの一族だったっけ？
当主っていうとバルドメロさんくらいの世代だと思っていたんだけど……彼は若い。２５歳にもなっていないんじゃないだろうか。

「僕が魔導師（マイブル・プルーバ）の試しでは相手になるよ。」
「よろしくお願いします。」
一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）を見るのはこれで3人目だ。確か、私を入れないで12人居るはずだから、あと9人、いるんですよね？
魔導師（マイブル・プルーバ）の試しの『風』の試しをさっきのシルヴェストリの当主様がやるなら、あと『光』と『土』の試しをやる人に会ってないですよね。……祝福祭？　とやらまでに会うことができるのでしょうか。
そこで私の隣にいるリアンにさも今気づいたかのように目を向けた。（隣にいたのはわかってたと思うんですけど……）
「……おや？　隣にいるのはインフォンティーノの当主の息子さんかい？
二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）になったんだっけ？」
「シルヴェストリの当主自らインフォンティーノの前当主のパーティーに来ていただき、
ありがとうございます。」
「いえいえ。これも僕の役目だからね。
聞いているよ、君が二級魔術師（マーゴ・デ・シグナディオ）になったのは風使いだったからだって？」
「……はい。」
リアンがどことなく答えにくそうにしている。　どうしたんだろう？
「あの事件に何か関係があるんじゃないかい？」
「、！」
リアンの顔色が変わった。

……怒ってる？　驚いてる？

「私の弟であることからあの事件に関係はないということはわかっておられるのでは？

あの血族はそのときに……シルヴェストリの当主様である彼方が一番知っておられることと思いますけど？」

「あれ？　君も来ていたのかい？　いつも通りバックれるかと思ったよ。

弟君を庇うとは、さすがの氷の姫君もそれくらいの情はあったんだね。」

リアンがシルヴェストリさんに答える前にジスレーヌさんが私たちのもとに歩いてきてシルヴェストリさんに言葉を返した。

シルヴェストリさんはおどけた感じで言葉を返した。

シルヴェストリさんとジスレーヌさん、２人はお知り合いですかね？

ジスレーヌさんはシルヴェストリさんを冷ややかな目で見ている。

「冗談も程々にしていただけませんか。

彼方がこの場に来たのはそれを話すためだと仰られるのですか？

そのことを持ち出すというのは……それ相応の覚悟が、おありですか？」

「いや、やめておくよ。今日ここに来たのはそのためじゃなく、魔導師（マイブル）候補さんに

会おうと思ってここに挨拶しに来たからね。君が相変わらずだとわかってよかったよ。

アルベルティーナさん。」

「、はい。」

「僕は前君がやった魔導師（マイブル・ブルーバ）の試しを見ていないから、君の実力は

噂で聞くしか知らない。魔導師（マイブル・プルーバ）の試し、楽しみにしてるよ。
君の実力が僕が期待しているくらいあるといいな。」

そういってシルヴェストリさんは去っていった。
『僕が期待しているくらい』って……なんか嫌味なかんじですね。

――あの事件、て何？　と聞きたいところだけど、リアンとジスレーヌさんの態度から見て好奇心で聞いてよさそうなものじゃないように思える。
わかるのは、風と火の2属性（ダブル）使いが何か関係がある、てことだけだ。

「わるいな、ティーナ。」
「あのバカはほっといて。」
「いえ。」

シルヴェストリの当主様に向かって『バカ』って……。
来たのがジスレーヌさんでよかった。
私のところにシルヴェストリの当主様が来たということだけでちょっと注目を浴びていたのにヴァランさんの声でなんか言われたらかなりの注目を浴びているところだった。

「リアン、ティーナ。」
「殿下。」

パーティーに出されている料理を食べていたらザール殿下が来た。
殿下は会場で別れる前よりもくたびれている感じだ。

「やっと終わったぜ。ったく、話が長いったらありゃしねえ。」
「……お疲れ様です。」
「次行かなきゃいけないのはリアンかティーナのどっちか、……いや、まずティーナかな。
俺と話しているときも時々魔導師候補（マイプル）がどうたら、て言ってたから。」

殿下が私たちとここに来てから今まで話していた、てことは私が行ってもかなり時間がかかるんじゃないでしょうか。
さっきまでみんなそれぞれに談笑していた会場が急に静かになる。
会場内でステージみたいに一段上がっているところに車椅子に座っているおじいさんが現れた。

「あれがインフォンティーノの前当主――――エルモ・インフォンティーノだ。」

リアンが私に小声で教えてくれた。
あの人ですか。私、この後直接会いに行かなきゃいけないんですよね？

「本日は私が主催したパーティーに来てくださってありがとうございます。
私は今はもうインフォンティーノの当主ではございませんが、以前と変わらずこのようにたくさんの方々にパーティーにお越しいただけて
うれしく思っております……」

……長かったので省略しますが、要するに今後ともインフォンティーノが火使いの筆頭として火使いのレベルを高め、帝国の魔術レベルを上げていきましょう、というかんじのお話でした。

エルモさんがお話をした後はまた会場から出て行った。
殿下の向こうに見えたバルドさんがこっちに向かってきているのが見える。
「お呼び、だな。」
「……一体どんな人なんですか。」
「まあそれは会ってからのお楽しみ、ということで。」
そういって殿下がニヤリ、と笑った。殿下がそうやって笑うのを見るのは久しぶりだ。……そして、その顔で笑うときは大抵私にとってそんなにいいことではない。
「ティーナ、悪いな伯父のところまで一緒に来てくれ。」
「はい。」
正直今日は前当主様に会う前にたくさんの人に挨拶されて、話をして、とやっていて結構疲れました。
リアンと殿下の会話を聞いていただけどあまり会いたくないんですけど、そんなことは言ってられませんよね。
バルドさんについて行く。
会場になってるホールから結構離れたお部屋にいらっしゃるみたいだ。
バルドさんがある部屋の前で止まり、部屋をノックした。
「バルドメロか？」
「はい。」
「入れ。」

「魔導師候補（マイブル）のお嬢さん、こんばんは。私が開いたパーティーに来ていただけて
うれしいですよ。」
「いえ、こちらこそ、インフォンティーノのパーティーに招待していただき、
ありがとうございます。」
「それでね、お嬢さんに見てもらいたいものがあるんだよ……こっちに。」

最後の言葉は部屋の中にいた男の人に向かって言った。
男の人はエルモさんに言われて、指輪を持ってきた。

「先日、私の友人から解析してほしいと頼まれたものでねぇ……私は魔装具（ディアブロ・コーシー）に
ついて詳しくないから困っているところなんだ。
お嬢さんに解析してもらってもいいかい？魔眼（ディアブロ・アイ）を使ってくれていいよ。」
「わかりました。」

指輪を視る。
指輪に刻まれている効果を発動する術式の上にその効果を打ち消して違う効果……「呪い」と言えばいいだろうか、そういう類の術が施されている。
「＞解除（リベラフィリオン）＜」
変な術式をかけていると思われたら嫌だから無詠唱（ノン・カント）ではなく口に出して詠唱する。

これで呪いは解除ですね。

「指輪に刻まれている術式とは別にこの指輪には呪い――この場合はこの指輪をはめた者に

対してですが――がかけられています。呪いの効果ははめた者の魔力を吸い取ることと、

指輪を一度はめたらもう取れないようにする呪い、そして指輪の効果を無効に

するものですね。

解除はできますが、この術式がまず視えないと呪いがかかっていることを

確認するのも難しいと思います。

指輪の効果は魔術の安定化と構築式の読み取りですね。」

指輪の効果自体は魔術師（マーゴ）向けの効果だから持ち主は魔術師（マーゴ）だろう。呪いがかけられているって……死ぬようなことはないけれど（魔力を吸い取られると死に近づくことにはなってしまうかもしれませんが）一体何をしたんでしょうか？

指輪について説明すると、エルモさんは笑みを深めて私に言った。

「いや、すばらしい！　想像以上だよ。」

「ありがとうございます。」

さっきの顔からして私が指輪を解析する前にこういうことを得意としている魔術師（マーゴ）に解析させたに違いない。解析をした上でもう一回呪いをかけなおして、私を試すためにこの指輪を出した……と思う。

私が魔装具（ディアブロ・コーシー）に詳しいということも魔眼（ディアブロ・アイ）が使えるということも調べたのだと思う。

「さすが帝国初めての魔導師（マイブル）候補だね。
君がこんなに解析するのが早いならはじめから君にお願いすればよかったね。
その呪いをかけ直すのにかかった時間がむなしくなるくらい早く呪いの解除が
早いよ。そして、指輪の効果の読みとりも視ただけですぐにわかったんだねぇ。」

……やっぱり。

「聞くところによると、お嬢さんはマクシミリアンと同じところで働いているとか？
あいつは君から見て、どうかね？」
「どうか、というと？」
「インフォンティーノの名を継げるような実力のあるものかという意味でね。
……ああ、君がもしマクシミリアンと結婚することがあるならば、
君が次期当主だね。このバルドメロに勝っていることだし。」
「……は？」
「叔父上！　冗談はやめていただきたい。」
「バルドメロ、私は冗談なんて言ってない。本気だ。」

おっと、思わず「は？」と言ってしまいました。

殿下たちが前当主が……と言っていたのはきっとこの本気と冗談の境目がさっぱり分からないかんじが話しているのに大変だからということかもしれない。
今の発言も本気、とは言ってるけど、私は本気だとは思えないし

……。

「まあそれはともかく、今日こうやって会うことができてよかったよ。

祝福祭の魔導師（マイブル・ブルーバ）の試しは私も見に行こうかな。

これからもマクシミリアンと仲良くやってくれよ。」

そう言われて答える前にバルドさんが私を連れて部屋の外に出ることになった。

殿下が相当な時間がかかったみたいだったので私もかなりの時間かかるかな、と思ってたんですけど……前当主様と会っていたのって殿下と比べるとかなり短い時間でしたよね？　ちょっと拍子抜けなかんじです。

まあ、『陛下の名代』と『魔導師（マイブル）候補』の違いですかね？

この部屋に来たときと同じようにバルドさんに連れられてホールに戻ると殿下たちが大勢の女の人に囲まれているのが見えた。

……。あっちに戻るのはやめておこう。

このパーティーの中で私の知り合いはバルドさんとリアンとザール殿下とジスレーヌさんとヴァランさん。（シルヴェストリの当主の方も自己紹介はしましたが。）バルドさんは無理、殿下たち2人も今の様子じゃ近づきたくない。（お姉さま方に睨まれたくないですからね。）

ということでジスレーヌさんを探す。（ヴァランさんも女の人に囲まれているかもしれないし、そうじゃなくてももし私1人で行ったら話に暴走しだしたときに止められないので。）

バルドさんがこの後リアンが前当主様に呼ばれていると言っていたので殿下1人であの大勢のお姉さま方の相手をするんだろう。

お疲れ様です。美形って大変ですね。
心の中で殿下に合掌しておいた。

＊16　パーティー（2）（後書き）

リアルタイムで読んでくださっている方、更新が遅くてすみません。
次回から祝福祭編に入れると思います。

一体いつになったらティーナが魔導師になれるのでしょうか……（汗）

＊17　祝福祭とは？

「今日は勉強してこい。」
「……何でですか？　何のですか？」
「殿下、俺たち休んでいた間の書類が溜まってるんですけど……。」
殿下が突然言い出した『勉強』。こういうパターンが多い……げふん、すみません。
「安心しろ。リアンは知っていることだからティーナだけだ。」
「何についてなんですか？　私も知っていることかもしれませんよ？」
私が知っていることだったら大助かりです。書類が片付けられます。
私の知らないことだったらリアンも知らないことであってください。そうしたら道連れです！
「祝福祭についてだな。」
「……シッテマスヨ。」
「俺は流石に帝都育ちなのでそれはわかります。」
「よし、ティーナはクルスのところで勉強な。」
私の発言はあっさりと流された。
いや、知っていることには知ってますよ！　魔導師の試し（マイブル・ブルーバ）をやるのは祝福祭のときですよね？

「その他には？　詳しく説明できるか？」

殿下がにこにこ（というよりにやにや）笑いながら私に問いかけてくる。

おばあちゃんは魔法については詳しく教えてくれたけど、世間の習慣とか行事とかについてはほとんど教えてくれていないっていうこと……殿下知ってますよね？

その態度はあえてですよね？

ああ、書類が……たまっていきますね……。

「クルスさんの所に、行って、きます。」

「よし。」

導くもの（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊１７）

「じゃあ祝福祭について簡単に説明するかの。」

「はーい！」

「お願いします。」

クルスさんの研究室に行くとエメがいた。

エメも村……というか田舎育ちで祝福祭については知らないので私と一緒に話を聞くことになった。

クルスさんが祝福祭について話してくれたことをまとめると、こんなかんじだ。

昔（４００年くらい前）、帝国はなく、今の帝国の領地は王国のものだった。

王国の身分制度は厳しく、貴族は平民からとったお金や食べ物で贅沢な暮らしをし、王家は貴族以上に贅沢に、そしてその王家に気に入られるように貴族は賄賂を送る――ということが当たり前のようにあったらしい。

その身分制度に疑問を持ったのが当時王国の１つの領土の管理官として領土を治めていた１人の男――エーリアル・ロジオン――後の初代皇帝だ。

彼は平民出身であり、貴族だけが贅沢な暮らしをすることをよしとしていなかった。

彼は彼の仲間たちとともに王国に反旗を翻し、帝国を建国するに至ったという。

さて、そこで疑問に思うのが「なぜ彼が帝国を建国できたのか？」である。

彼は貴族といってもただの人。王家に歯向かってすぐに新しい国が作れるというような能力があるわけではなかった。

彼が行ったのは唯一（アリ・イスピリフ）の精霊との契約である。

唯一（アリ・イスピリフ）の精霊はその国の自然の加護を司る最上級の位の精霊のことらしい。唯一（アリ・イスピリフ）の精霊が居ない国は植物が上手く育たないし、魔法を使うのに多くの魔力が必要となるらしい。

「唯一」とつくのはその精霊は自分が契約した人――今回の場合で言えばエーリアル・ロジオンだが――の血筋が存在する限りその国の加護を司り続け、その血筋以外の人とは契約をしないから。

それに対して皇帝家の人間が差し出すものは魔力。それだから今

も皇帝家からは自分で魔術ができるほど強大な魔力を持つ人はとても珍しい。
唯一の精霊（アリ・イスピリフ）と契約できたエーリアル・ロジオンは王家の人と約束をしていたらしく、無事に帝国を建国できたというわけだ。
その唯一の精霊（アリ・イスピリフ）が帝国を「祝福した」（こういう言い方をしているが、意味としてはエーリアル・ロジオンと契約したことを指しているらしい。）ことから祝福祭が始まったらしい。

「今は祝福祭で行われているのは唯一の精霊（アリ・イスピリフ）に感謝を示しての踊りや
武道大会だの。それに今年はティーナの魔導師（マイブル・ブルーバ）の試しが入るわけじゃ。
城下では出店が出るんじゃぞ。」

……そういえば、この季節の前後には村でお祭りがあった気がする。
祝福祭があったからこの季節に村でお祭りをしてたのか。

「唯一の精霊（アリ・イスピリフ）の姿はどんな形なんですか？」
「エメは会える？　精霊さんなんでしょ？」
「一説としては翼を持つ光の精霊だと言われておるし、また他の説では女性の形をして
絶世の美女とも言われておるの。
残念ながら今わしが知っている限りでは唯一の精霊（アリ・イスピリフ）の姿を見たものはいないんのじゃ。」

え？　何で？

私とエメはクルスさんの答えに頭の上に「？」を浮かべ、次の言葉を待った。

「唯一の精霊（アリ・イスピリフ）との契約を行ったことについては帝国建国の歴史書に載っておるし、

王国の歴史書でもその部分を見れば今話した流れはおおまかじゃが載っておる。

だけど唯一の精霊（アリ・イスピリフ）そのものについての記述が全くと言っていいほどないんじゃよ。」

魔術師（マーゴ）で精霊に興味を持っている人も、精霊使いの人たちもそこの部分については歴史書を調べ、その契約について行った人たちが書いた本を調べ、当時書かれた本全般を読みあさったらしいが、それでわかったことはほとんどなく、唯一の精霊（アリ・イスピリフ）の姿は仮説の中でしか存在しないことになっているみたい。

唯一の精霊（アリ・イスピリフ）の姿を見てみたいという人はこれまでも多くいたけれど、どんな方法を使えば見ることが出来るのか、どこに行けばいいのかなど全く分からないらしい。

「おねえちゃんなら見れるかなっ？　ね、見たらエメにも教えてね！」

「う、うん……。

（姿わかんないのに？　っていうか誰も見たことないんじゃ私も無理かな。）」

「祝福祭の起こりはこれでいいかの。

ティーナを呼んだのには他に話すことがあるからじゃ。

エメはモデロと一緒に字の練習してくれるかの？」

「ほかの事？」

あれ？　殿下は祝福祭について教わって来いしか言ってなかった気がするんですけど……。

「おじーちゃん、後で本読んでね！」

「分かりました。」

エメとモデロはもうひとつの部屋のほうに移動していった。（クルスさんの研究室は2部屋につながっているんです。エメがいるからだと思うんですけど。）

「私、殿下からはクルスさんに祝福祭について教えてもらうように、としか

言われてないんですけど……。」

「ん、これから話すのも祝福祭についてじゃよ？」

「え？」

「祝福祭の起こりについてはまた後で本を貸すから

それでもう少し勉強しといてくれるかの？」

「はい。それで……？」

「祝福祭は1週間に及んでいろんな出し物が行われるんじゃよ。

での、ティーナが主役としてやらなくてはいけないことが2つ。

それと仕事としてやってもらわねばならんことがあるんじゃ。」

「主役として、というのは魔導師（マイブル・プルーバ）の試しと？」

「そう。後魔導師（マイブル）に無事なることができたら陛下に認証してもらう式が

あるからの。魔導師（マイブル・プルーバ）の試しは祝福祭の2日目、認証式は4日目。」

「はい。」

ああ、そういえば陛下の認証が必要だって前説明してましたもんね。

それも大勢の人の前でやらなきゃいけないのか……変なことがおきないといいんだけど……。

「それと祝福祭の準備と片付けを手伝ってもらうことになるの。これは魔術師（マーゴ）も騎士（ナイト）も行うかなり大掛かりな準備なんじゃよ。ティーナは全属性使いだからかなり忙しくなると思うがの、がんばってやっておくれ。」

「は、はあ……。」

そう言ってクルスさんは笑っていた。私は苦笑いだ。

◆◆◆◆◆

部屋には1人の女。

「なんであれが……！」

女はショックを受けていた。

自分が次期当主と謳われていたはずだった。

自分はそれに見合った実力を持ち、そうなるのが確実だと思っていた。

「あれが、次の当主になるのよ……！」

先日、祖父から言われた。「お前は次期当主になれない」と。

女の燃えるような赤い眼に怒りが宿る。
自分の実力はあれよりもはるかに勝っている。
なぜ、自分が次期当主となれないのだろうか……？
「落ち着いてください。彼を、どうしたいのですか？」
荒れている女に声をかけた1人の男。
魔術師（マーゴ）のマントとは違う別の白いマントを着た男は、今いる暗い部屋の中では目立つ色なはずだが、なぜか暗闇に溶け込んでいくように思える。
――さて、彼女を自分の思惑通りに動かすのには、どうすればいいか？
「決まっているわ！　あれを失脚させるような手立てを考えなさい！」
「それでは、そういたしましょう。……」
男は女に自分の計画を話す。
女は計画を聞き、微笑んだ。
これであれは失脚！　私が当主となれるはずだわ！
「いいわ。それを実行しなさい。」
「御意に。」
男は心の中で自分の計画が上手くいくことを喜んだ。

――馬鹿な女だ。こんな計画では女が陥れたいと思っている男を失脚に追い込むことなどほぼ不可能だというのに。

俺の目的が他にあるのにも気づいていない。

その様子を、彼らを照らす月だけが見ていた――――……

＊17　祝福祭とは？（後書き）

２ヶ月以上更新できていなくてすみません……。
ようやくの祝福祭編です。

＊18　準備

こんにちは、一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）やってます、アルベルティーナ・ギラルディーニです。今日のお城は普段よりもにぎやかです。

「ぼーっとしている暇、ないだろ！」

「……あ、いつかの黒騎士（ブラックナイト）さん……。」

「おーい！　こっちの火の輪（ブラウド・アナリオ）、ずっと火が灯っているようにするには

何すればいいんだよ！？　火傷防止は！」

「ここ、壁が崩れてるわよ！　誰か治せる人は！？」

「そんなことより、これ、上手くいかないんだけど……どうすればいいの？」

「ほら、出番じゃないか！」

……。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊１８）

「これ、できないのか！？　一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）呼んで来い！」

「屋根の飾り不均等だと思いますよ。誰か直して来てください。」

今は祝福祭が始まるにあたってお城の準備中です。祝福祭は帝国

で一番大きいお祭りだから準備も大変……とある騎士(ナイト)の人が言っていました。
私は祝福祭が行われるにあたって城の防御魔法を違うものにかけなおせと言われたので防御魔法を変え、氷の彫像を作ったので祝福祭中溶けないようにしてくれとお願いされたので維持の魔法をかけ、空を飛ぶ光の玉みたいなものを製作して空に浮かせ、……初めはお願いします、とかすみません、とか皆さん一言ずつ言ってくれてたんですけど、時間が経つにつれ戦争状態に……。

「ティーナ！　父上からの仕事だ行くぞ！」
「ええっ、殿下、嬢ちゃん連れて行かないでくださいよ～。まだここの直しが……」
「そこなら他の魔術師(マーゴ)に頼めばいいじゃないか！
それよりも殿下見てくださいよ、これの使い方について説明を……」
「姉さまとの一緒に居られる機会なのに！」
「……お前ら、父上って皇帝陛下だってことわかってるのか？」
「「「……あ。」」」

殿下が私を引っ張っていくときに抗議の声が上がったが、殿下の言葉でみんな自分の作業に戻る。殿下はため息をついていた。

「全く……ティーナ、モテモテだな。」
「は、はは……。」

なんていうか、もう苦笑しか出ません。あっちに引っ張られ、こっちに押され、でしたから。

「やってもらうのはお前がやる魔導師(マイブル・プルーバ)の試しと5、6日目に行われる

武道大会の会場作りだ。ディーリもそこの係だからがんばれ。」
「ディーリ？」
「あ、会ったことないよな。
一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）の土魔術使い、ディーデリヒ・フロベールのこと。」
「ディーデリヒ・フロベールさんですか。」
これで一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）４人目ですね。

城の隣に作りかけのコロシアムの中に入る。
まっさらな土地のところに積みかけの四角のブロック、木材という状態にしか見えない木の棒が何本も置いてある。
これは「作りかけ」ではない。これは「作りかけ」の前段階……むしろ「作り始め」とでも表現した方がいいんじゃないでしょうか……。

「殿下……これは作りかけと言うのでしょうか？」
「俺もどんな状態なのか聞いてなかったからな。
この会場だけの話じゃないが……この様子だとかなり間に合ってないな、準備。」
殿下を軽く睨んだが殿下は会場の様子を見ているので私の視線に気づいていない。

「ディーリ！」
殿下が呼ぶとそれまで何か地面に書いていた人が振り向いた。
こっちをじっと見てきた彼は殿下と同じくらいの年齢だろう。黒いマント、つまり一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）。

なんかあの人、見覚えあるんですよねー……薄茶色の髪の毛、桑茶色の眼。どこかで会った気が……あ。

私が思い出したのとほぼ同時に彼も何か思い出したような様子で口を開く。

「あ、アンタ“山賊狩り”じゃん。魔術師だったの？」
「？　“山賊狩り”？　ティーナと既に知り合いなのか？」
「バルタザール様。ふーん、アンタ、ティーナっていうの？」
「本名はアルベルティーナ・ギラルディーニです……。」
「さっきの“山賊狩り”ってのは？」
「ああそれは「忘れてください！」…」
「え、気になるじゃ「いいですから！　気にしないでください！」……」

黙秘です、も・く・ひ！
2人がこっちを見ているが、その話はしたくない、してほしくない！
この姿では会ってないんだけどな、彼には。
「アレ」を見られたんだった、そうだ、あの時の……魔術師だったのか……そうだよね、魔術師じゃないとあの場面には来ないですよね……。殿下には何も報告していない、というか報告しなくていいようにするためにああやってあの件を片付けたのに……！
私が冷や汗だらだらながらも「やめてください」オーラが伝わったのかその話を諦めた殿下が彼を紹介してくれた。

「こいつ、さっき言ったやつな。ディーデリヒ・フロベール。通称ディーリ。」
「バルタザール様しかディーリとは呼ばないですよ。」
「そうなのか？　ティーナ、こいつと2人で会場作り。」

「「　え？　」」

ディーデリヒさんと私の肩にぽんと手を置いて言った。「2人？」もっと居ないんですか？

「この様子から見てわかると思うんだが、かなり準備が大変だろ。ティーナ、お前がさっきまで居たところも見たとおり、時間が足りていない。

父上、こういう状態なの知ってたんだろうな……。普通の魔術師（マーゴ）じゃ荷が重い。

騎士（ナイト）をこっちに送っても解決できる次元じゃあない。

むしろ、騎士（ナイト）が居ても邪魔なだけ。」

「……つまり、こいつと僕なら一級魔術師（マーゴ・デ・プリメーラ）の中でも実力は上の方、僕は置いておくにしても、魔導師（ティーナ）候補サマは魔力は底なしって噂だから

一日中働いても支障はなし。死ぬ気で完成させろ、てことですか？」

「え、まさか……」

「そういうこと。俺は城のほうに戻らないといけないから。がんばって完成させろよ？」

そういって殿下は「作りはじめ」の会場から出て行った。

殿下の最後の言葉に「俺には無理だから、お前らだったらできるだろ！」という副音声が聞こえた、気が……する。

「「……。」」

ディーデリヒさんと私、しばしの無言。

Q　祝福祭は何日後でしょう？

A　3日後。

1日目は精霊の踊りから始まるとされていて、精霊の踊りはパレードのように帝都を
踊ってまわる。中でも――…じゃない、そんなことを考えている時間は、ない！

ディーデリヒさんはため息をついてから詠唱を始めた。

「＞我が意志　形となりてここに具現せん＜」

ぼこぼことディーデリヒさんの前の土が動き出す。

「＞出でよ　我が僕（しもべ）たりしもの　土偶（クライ・フィゴーラ）＜」

そこに作られたのは1m弱くらいの土偶（クライ・フィゴーラ）。
ぼこぼこと5体できあがった。
これ、作るのはそれなりに練習すればできるんですけど、動かすのに自分の魔力をエネルギーとしなきゃいけないから魔力が多い人じゃないと使えないんですよね。

「……僕とキミの二人でいいって陛下が思われた理由はこっちにあると思うけどね。」
「私も作った方がいいですか？」
「いや、多くても邪魔。時間ないからさっさとやろ。」
「はい。」

それから働きに働きましたよ……！　ま、魔術師（マーゴ）って、きつい役目なんですね……。毎年こんなにやってるなんて……尊敬します。
ぽろっとそんなことをもらしたら、ディーデリヒさんから返事が返ってきた。

「いや、今年は特別でしょ。」
「え？」
“山賊狩り（アンタ）”の魔導師（マイブル・プルーバ）の試し。
それに併せて色々企画してるからこんなに人手不足なかんじになってんの。
……まあ、だけどまだアンタが底なしの魔力で助かったよ。」
この人（ディーデリヒ）、途中から「疲れたからさ。」とか言いながら私の魔力で土偶（クライ・フィゴーラ）を動かしていたんです。それによって私の疲労はさらにたまりましたよ……。

「そうですか……、！“山賊狩り”って呼ぶのやめてくださいよ！」
「さっきの様子だとバルタザール様に報告してないんでしょ。」
「そうなんですけど、それとこれとはまた別のお話でして！
こんな小さい娘に“山賊狩り”とかいう恐ろしい名前で呼ばないでくださいよ。」
「小さい娘、ねえ。まあ、僕よりは小さいけどさ。
そんなに呼ばれるのが嫌なら……そうだな、カーシャでいいでしょ。」

ディーデリヒが「小さい娘」と言ったとき意味ありげなかんじだった。事実ですよ、精神年齢はもっと上ですけど。老けて見えます？

「カーシャ？」
「うん、狩る者（ラ・カーシャ）からもじって。」
「……まんまじゃないですか。」

狩る者からもじるってそのままですよね？

私の発言にディーデリヒは眉間に皺をよせた。
「何？　不満？　じゃあ“山賊狩り”のままでもいい？」
「カーシャでお願いします。」
“山賊狩り”よりはましですけどね、そうですけどね！　その２つしか選択肢がないようなので即答。カーシャであきらめます。
「僕、次は城の方の作業あるから。バルタザール様に報告よろしく。」
「私がですか？」
「直属の部下なんでしょ？」
（ちょっと休憩してから行こうかな。）
そう思っていたらディーデリヒが私に声をかけてきた。
げ、ばれました？
「わかってると思うけど、魔導師（マイブル・プルーバ）の試しの土担当は僕。魔導師（マイブル・プルーバ）の試しって魔導師（マイブル）候補がその属性の魔法が優れていることを証明できればいいんだよね？」
「そういうことだと思いますが。」
「じゃ、試したいことあるから当日までにちゃんと魔力回復しといてね。」
そう言って会場からさっさと出て行ってしまった。
……彼方が魔力を使ったんでしょ、おい。ちょっとは労ってくださいよ。
まあ、我慢だ我慢。私は（肉体的には）若いので回復が早いのが幸いですね。

［会場作り、終わったってディーデリヒさんから聞いたぞ！
人手……というより魔術師（マーゴ）が足りてない！　こっち来…］

リアンから遠話が入った。……と思ったら途中でリアンの声ではなく、何かが派手に倒れる音が聞こえる。

「リアン？　大丈夫？」
［大丈夫、では、ない……かも…］
「今行くから！」

リアンの声からして大丈夫そうではなかった。
私がいたときと大して変わってない状態？　つまり戦争状態？
殿下に報告に行く前にこっちを見てからにしよう。

クルスさん、これ忙しいっていう言葉一言じゃ表せないレベルじゃないですか？
私は慌ててリアンのもとに転移した。

＊18　準備（後書き）

登場人物が多くて覚えにくいですよね……すみません……（汗）

＊19　一日目

朝、窓から入るまぶしい光で目が覚めた。
ベッドから起き上がり、ぼーっとする頭で考える。
（なんでこんなにだるいんだっけ？　……昨日は確か、……そう、お城の飾り付けの後に
ヴァランさんに引っ張られてちょっと手合わせしたような……。
その途中でリアンが「明日は祝福祭だから」って言って止めに入って……。）
ん？
「明日は祝福祭だから」？
――あ、そうか。今日から祝福祭ですね。
窓の外を見ると雲一つない青空が広がっていた。

導くもの　（Ｕｍａ　ｐｅｓｓｏａ　ｐａｒａ　ｃｏｎｄｕｚｉｒ　＊１９）

「すごいですね……」
精霊使いの人たちが姿なき者（ズィ・イノセンテ）を呼び出したみたいだ。
水の精霊と風の精霊によって氷の細かい粒ができ、それに更に光の精霊が当たる光を調整しているのかきらきらと氷の粒が光ってい

たり、虹ができていたりする。
色とりどりの花びらが舞い、空から降ってきている。
人の形をした精霊が踊っているのも見えるから、普段精霊を見ることができない人たちにとってはこれを見るだけでも「特別な日」というかんじがするかもしれない。

私とリアン、ザール殿下はお城の窓から外の様子を見ていた。
お城の前の方にはたくさんの人がいて、この光景を見て歓声を上げているのが聞こえる。

「……の光は……見えるけど……」

「エメが今回の祝福祭で仕事があるって言ってたんですけど、何やるかわかりますか？」
「エメ？　……ああ。エメが使役……というか喚ぶことができるのは
闇の精霊だから、エメの出番は夜だな。
昼と夜、二回に大々的な“精霊の踊り”があるから。」

「あそこ――…風の精霊――が……――！？　いや、近くに……だから、あれは……」

「昼と夜の二回って……大変ですよね。」

「――で……か？　いいよな……。」

「大変なのか？　っていってもこれが精霊使いにとっては一年の中で一番の見せ場だから
張り切ってると思うぞ。」
「精霊使いの方って魔術師（マーゴ）みたいな昇級とかないんですか？」

「ないな。……ところで、あの状態についてどう思う？」
「……私にできることは何にもないですね。」

リアンって本当に精霊好きですよね。
そうだな。いっそのこと精霊使いに転職したらいいんじゃないのか？
いや、それは無理じゃないですか？
冗談だよ、冗談。
……リアンが、ってところがあまり冗談に聞こえないです。

わかると思いますが、今会話をしていたのは私と殿下。
その間にリアンは魔眼（ディアブロ・アイ）を発動させて真剣に精霊使いの（というよりも精霊の）動きを真剣に見てぶつぶつとつぶやいていた。
真剣すぎて私たちには話しかけることができないかんじで。なんていうか、リアンのキャラはこんなんでしたっけ？

「ああ、そうだ。」

結論として、リアンは放置で会話を続ける。

「祝福祭の時に俺の兄妹はこの城に勢揃いって話したよな？」
「あ、そういえばそう言ってましたよね。」
「時間のあるうちに行くぞ。」
「行くって……あれ、リアン置いてきぼりですか？」
「あいつはあれを見ている間は誰に話しかけられても気がつかないと思うぞ。」
「ま、まあ、確かに……。」

「兄様。」
「連れてきたぞ。こっちが明日の主役、アルベルティーナ・ギラルディーニ。
魔導師候補(マイブル)だ。」
「姫様、お初にお目にかかります。」
立ち止まって姫様に礼をする。ザール殿下は部屋にいた人の隣に立った。
あれ、殿下、姫様……ですよね？
私が想像していたのはジスレーヌ様に似ているお姫様だったけど、ジスレーヌ様よりもザール殿下に似ている中性的な方だった。髪の色はザール殿下より陛下の髪の毛……つまり玉蜀黍色(とうもろこしいろ)で、目の色はザール殿下と同じ瑠璃色。髪の毛を後ろで一つに縛っていて凛とした雰囲気なところが中性的な感じがするのだろうか？　年齢も関係しているかな？
「ん？　何かついてるよ？」
そう言って姫様が私に近づき、私の髪の毛から何かをとった。
私と同じくらいの年齢だけど、姫様の方が１０ｃｍくらい身長が高かった。……私も伸びる予定ですけどね！
ちょっと悲しくなった。
「花びらだね。“精霊の踊り”のやつがついたのかな？
君のその黒い髪にこの花の色はよく似合うよ。そうだ！
兄様、今度魔導師(マイブル)になったときに花を贈るのはどうかな？」
「ああ、いいんじゃないか？」

この年で女たらし……！　しかも天然！？
姫様はにこにこと悪意のない笑顔でそうやって提案しているが、ザール殿下はにやにやと嫌な笑顔を浮かべて姫様の言葉に同意した。

「自己紹介がまだだったね。私はパメレシア・オザ・ロジオン。皇帝家の直系の末娘。今度の試験でザール兄様と同じ騎士（ナイト）になるつもりだよ。」
「姉上と違ってパメラは活動的すぎるからな。父上の部下には悩みの種ってわけだ。」
「はあ……。」
「別にいいじゃない。そんなことより、君がザール兄様より強いって聞いたよ！
私はまだ兄様に勝てたことがないんだ。……いずれは兄様よりも強くなるけどね。
今日、は祝福祭だから無理だけど、祝福祭が終わって一息ついたら……そうだな、
出来れば私が騎士（ナイト）の試験を受ける前に、手合わせお願いね？」

それは……ちょっと無理、というかできれば遠慮したいというか……ザール殿下と手合わせしたのだって1回きりだし、できればもう二度としたくないし……。
ザール殿下に助けを求めて殿下の方を見ると、殿下は相変わらずにやにやと笑っている。

「ここにいたんだ。ザール、僕も誘ってよ。」
「兄上……今日は父上と一緒だったのでは？」
「ん、そうだったんだけどね、馬鹿兄が居たから適当な理由つけて離れてきた。」

「お久しぶりですブノワ兄様、……オビディオ兄様とは相変わらずのようですね。」

現れたのはブノワ殿下だった。慌てて私はブノワ殿下に礼をする。そして周りを確認する。

今日はマルシアルは一緒じゃないみたいだ。良かった。うん。

「パメラは久しぶりだね。今回は北に行ってたんだっけ？　どうだった？」

「はい、兄様がおっしゃっていたところでは武道が盛んで、私も稽古をつけてもらいました。

今回は剣だけじゃなく他の武器も習ったんですよ。」

「そう。役に立ってよかったよ。」

「……は？　パメラ、え、お前何してたんだよ？　父上にそうやって報告したか？」

「それについては『北では武道が盛んなところもありました』と。私が今回北に行った目的はそれでしたけど、父様が見るようにおっしゃっていた

ことは別にあったので。」

「兄上、パメラに北に行くように言っていたのはそれがあったからですね。

道理でパメラが素直に行ったと思ったら……。」

「いいじゃないか、騎士（ナイト）になる前にそういう体験をしておけば役に立つと

思ったからね。」

「ありがとうございました。」

姫様はにこにこ、ブノワ殿下もにこにこ、ザール殿下はさっきとは打って変わって難しい顔をしていた。

中々いい性格してますね、姫様も。

「ティーナちゃんはそんなに久しぶりでもないかな。祝福祭の準備お疲れ様。
父上に言われて会場作りしたんだって？　それでちゃんと完成したところがさすがだね。
魔導師（マイブル・プルーバ）の試し、がんばってね。もちろん会場で見るからさ。」
「ありがとうございます。」
「兄様から聞いたけど、祝福祭初めてなんだよね？　どうかな？」
「精霊の踊りが綺麗でした。私がいた田舎ではさすがにあの規模のものはできませんから
見ていて新鮮です。これが毎年見れるっていうのはすごいですよね。」
「うん、私も毎年欠かさずに見てるんだ。
って言ってもその年によって父様と一緒に色んなところまわんなきゃいけなかったり
物凄く着飾ることになったりするんだけどね……。」
「そんな格好するな、とは言わないけど明日の魔導師（マイブル・プルーバ）の試しはちゃんとした
ドレスの方がいいと思うぞ？」
「そうだね、久しぶりにパメラが着飾ったところもみたいなぁ。」

「パメラ、ここに兄様……いるわね。兄様、いくらオビディオ兄様が一緒だからって
途中で突然消えないでください。行きますよ！」
「レオーヌが来るならしょうがない、僕は行かなきゃいけないかな。」
「ティーナ、今は無理だけど3日目にまた会いましょう！　ザー

ル、わたくしのために
ティーナをどこかに連れまわさないでちょうだいね！」
返事する間もなく、ブノワ殿下を見つけたレオーヌ様はブノワ殿下を連れて部屋を出て行った。
今の話からすると陛下とオビディオ殿下とブノワ殿下とレオーヌ様が一緒にいるのかな？
皆さんキラキラ家族だからな……あ、明日の魔導師（マイブル・ブルーバ）の試しは全員勢揃い？　すご。
「そういえばパメラとティーナは一つ違いだよな。」
……それにしては身長が違うな。とぼそっとつぶやいたのが耳に入った。
事実ですけど、そこは言わないお約束ですよ！　伸びますから、私の身長！
「そうだ、一つ違うだけなんだよね！　じゃあ私のことは敬語なしでいいよ。」
「は」
「同じくらいの年齢の子ってお城にも道場にも中々いなくて……いや、
いるにはいるんだけど私と話してくれるような立場の子じゃないっていうか……。」
「え」
「私はティーナって呼ぶから私のことはパメラでいいよ！」
「あの」
「学院行けばよかったなって思うところはここだよね。
学院だったら同世代の話し相手もいると思うんだけど私は勉強より剣だからなあ。」

血は争えないですね……！　ジスレーヌ様並の話っぷりです……。

遠慮したかったんだけど姫様が悲しそうな顔をしてそれに私が困っていると（金髪青眼に弱いのがいけないですよね、……いや、そうじゃなくても美形には敵わないっていう……。）殿下が流石にやめとけ、と止めに入ってくれた。

姫様ではなくパメラ様、と呼ぶようにすること、あとザール殿下に接するようにもうちょっとコテコテの敬語から変えるようにということで妥協しました。

ひめさ、じゃないパメラ様はそれで不満そうだったけど、ザール殿下が何かこそこそと私に聞こえないようにパメラ様に話したらパメラ様が納得していた。

パメラ様とザール殿下はこれから陛下と何かあるそうで私は退室することになった。

（夜にエメの出番があるならそれを見に行きたいよなー。
どこで見ると見やすいかな？　クルスさんに聞けばいいかな……いや、忙しいかな。
じゃあリアンに……）

その後自分の部屋に戻りながら考えていたことで足が止まった。

――リアン。忘れてたけど、もしかして、朝のまま？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9906m/

導くもの

2010年12月13日18時13分発行